鬼虎川遺跡第1～3次発掘調査報告

1990

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市内に所在する埋蔵文化財包蔵地は百数十ケ所を数え、包蔵地での土木・建築工事は毎年増加の一途をたどっております。工事に先だって緊急発掘調査も急増している状況にあります。特に神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡では、近鉄東大阪線の開通に伴い開発が急激に進んでおり、景観が一変しつつあります。

今回、鬼虎川遺跡第１～３次発掘調査の報告書作成の運びとなりました。調査は昭和50年に実施した瓦斯管埋設工事に伴うものでありますが、すでに15年が経過しております。この間に30数次にも及ぶ発掘調査が実施され、鬼虎川遺跡の全貌が解明されつつあります。第１～３次発掘調査は今までに経験したことのない低湿地での調査であり、その発掘方法も未熟でありました。しかし、鬼虎川遺跡において初めての発掘調査として意義があり、以後、実施した発掘調査の基礎的な資料となりました。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々に厚くお礼申し上げるとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

平成２年３月

財団法人　東大阪市文化財協会
常務理事　塚　田　氏　秀

例　　言

1．本書は大阪瓦斯株式会社が予定している瓦斯管埋設工事に伴って発掘調査を実施した鬼虎川遺跡第１～３次の調査報告書である。

2．現地調査は東大阪市遺跡保護調査会が大阪瓦斯株式会社の委託を受け、昭和50年５月10日より６月21日まで実施した。遺物整理は平成２年３月31日まで実施したが、昭和57年より財団法人東大阪市文化財協会が東大阪市遺跡保護調査会の作業を引き継いでおこなった。

3．第１次調査は第１トレンチ、第２次調査は第２トレンチ、第３次調査は第３トレンチである。

4．調査・整理は次の事務局体制により進めた。（平成２年３月現在）

事務局長　室田和彦（東大阪市教育委員会文化財課課長）
庶務部長　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主査）
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶 務 部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調 査 部　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　下村晴文（　　同　　上　　）
　　才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）
調査補助　飯塚典正　高山正久　本田けい子　今井喬子

5．本書の執筆はⅣ．３を中村友博氏(山口大学助教授)、Ⅳ．４を松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会)、Ⅴを嶋倉巳三郎氏、他を才原がおこなった。

6．図版に収めた遺構写真は調査担当者、遺物写真は上野利明(東大阪市教育委員会文化財課)、木器顕微鏡写真は嶋倉氏が撮影した。

7．編集は才原がおこなった。

8．中村友博氏、嶋倉巳三郎氏からは早くより原稿を頂きながら、編集者の怠慢により今日まで刊行できなかったことを深くお詫び申し上げる。

9．調査の実施にあたっては大阪瓦斯株式会社の御協力を頂いた。記して深謝する。

本　文　目　次

はしがき

例言

Ⅰ．調査に至る経過……1

Ⅱ．位置と環境……2

Ⅲ．調査の概要……5

　1．層位……5

　2．遺構……8

Ⅳ．出土遺物……9

　1．弥生土器……9

　2．土製品……27

　3．木器……28

　4．石器……48

Ⅴ．東大阪市鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種……54

Ⅵ．まとめ……57

土器観察表……59

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図……3
第２図　調査地点位置図……4
第３図　東壁断面実測図……6
第４図　落ち込み内遺物出土状況実測図……7
第５図　溝実測図……8
第６図　溝内遺物出土状況実測図……8
第７図　弥生土器実測図……11
第８図　弥生土器実測図……12
第９図　弥生土器実測図……14
第10図　弥生土器実測図……16
第11図　弥生土器実測図……17
第12図　弥生土器実測図……18
第13図　弥生土器実測図……20
第14図　弥生土器実測図……21
第15図　文様拓影……23
第16図　文様拓影……24
第17図　文様拓影・木葉痕の残る土器底実測図……25
第18図　土製品実測図……26
第19図　農具ほか実測図……31
第20図　武器形木製品・有頭木製品・弭実測図……34
第21図　板材と原材実測図……35
第22図　棒材実測図……36
第23図　原材と杭実測図……37
第24図　杭と立木の切断法……40
第25図　比較参考資料……44
第26図　打製石器実測図……49
第27図　打製石器・細部調整剝片・石核実測図……50
第28図　石錐実測図……51
第29図　磨製石器・砥石実測図……52
第30図　石器資料の重さと順位……53

図　版　目　次

図版 1　遺構　1．調査地航空写真
　　2．調査地遠景
図版 2　遺構　1．調査風景
　　2．東壁断面(第１トレンチ)
図版 3　遺構　1．落ち込み内遺物出土状況(第２トレンチ)
　　2．落ち込み内遺物出土状況(第２トレンチ)
図版 4　遺構　1．落ち込み(第２トレンチ)
　　2．溝内遺物出土状況(第３トレンチ)
図版 5　遺構　1．溝(第３トレンチ)
　　2．溝(第３トレンチ)
図版 6　遺物　弥生土器　壺、無頸壺
図版 7　遺物　弥生土器　甕
図版 8　遺物　弥生土器　甕、高杯
図版 9　遺物　1．弥生土器　壺
　　2．弥生土器　壺
図版10　遺物　1．弥生土器　壺
　　2．弥生土器　壺
図版11　遺物　1．弥生土器　壺、壺蓋
　　2．弥生土器　壺、無頸壺
図版12　遺物　1．弥生土器　甕
　　2．弥生土器　甕
図版13　遺物　1．弥生土器　甕
　　2．弥生土器　甕
図版14　遺物　1．弥生土器　甕
　　2．弥生土器　甕、甕蓋
図版15　遺物　1．弥生土器　高杯、鉢
　　2．弥生土器　鉢
図版16　遺物　木葉痕の残る土器底
図版17　遺物　甕の調整法
図版18　遺物　1．モミ圧痕の残る土器
　　2．土製品　円板状土製品

図版19　遺物　１．土製品　台状土製品
　　２．土製品　台状土製品細部
図版20　遺物　木器　腰掛、高杯、羽子板状木器、武器形木製品、有頭棒
図版21　遺物　木器　鍬、弓、刻目のある棒、板
図版22　遺物　木器　板材
図版23　遺物　木器　丸棒材と杭
図版24　遺物　杭の切断痕
図版25　遺物　a厚板の切断痕　b枝の切断痕　c腰掛の削り痕　d狭鍬にみる圧痕
図版26　遺物　１．石器　削器(表)
　　２．石器　削器(裏)
図版27　遺物　１．石器　削器、石錐、石核(表)
　　２．石器　削器、石錐、石核(裏)
図版28　遺物　１．石器　石核、石材(表)
　　２．石器　石核、石材(裏)
図版29　遺物　１．石器　太型蛤刃石斧(敲打具)、石庖丁、砥石(表)
　　２．石器　太型蛤刃石斧(敲打具)、石庖丁、砥石(裏)
図版30　木器顕微鏡写真
図版31　木器顕微鏡写真
図版32　木器顕微鏡写真
図版33　木器顕微鏡写真
図版34　木器顕微鏡写真

表　目　次

第１表　出土木器の作業流れ図……28
第２表　杭一覧表……38
第３表　出土弓一覧表……42・43
第４表　石器資料の法量と石材……53
第５表　樹種一覧表……55

Ⅰ．調査に至る経過

鬼虎川遺跡は今日では弥生時代の遺跡として著名な遺跡である。平成２年現在では第32次調査を数える。

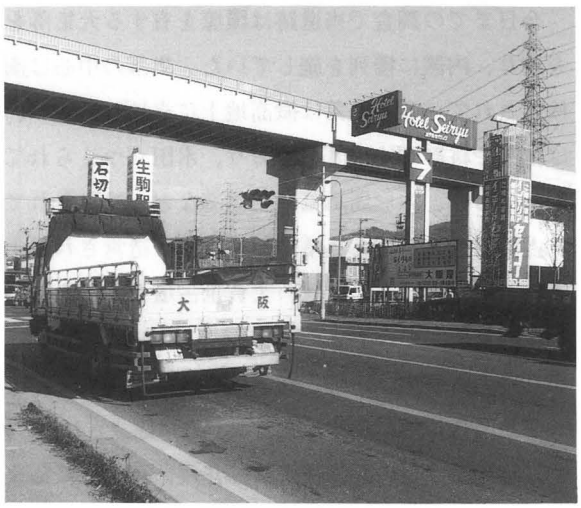
当遺跡が周知されたのは昭和38年である。大阪府の道路建設計画で外環状線（国道170号線）がつくられることになった。工事の際に弥生時代中期の土器が採集され、同時代の集落が存在することが予想された。

また、昭和41年に外環状線で水道管埋設工事が実施された。工事の掘削時に出た排土中より弥生土器と木棺が白井昇・三輪栄一郎・山田喜庸氏（当時、小学生～中学生）によって採集された。遺物は黒色粘土層に含まれていたことが確認された。弥生土器は新たに前期のものも存在し、遺跡は前期～中期に継続することが明らかになった。また、木棺の側板と底板が採集されており、周辺に墓域が存在することが予想された。当時、木棺の発見例は少なく、弥生時代の墓制を考える上では貴重な資料となった。昭和38、41年の遺物採集地点は外環状線と築港・枚岡線（国道308号線）の交差点付近である。

昭和49年に新川改修工事に伴って水道管移設工事が実施されることになった。工事予定地は昭和38、41年の遺物採集地点より東へ約100mに位置する。東大阪市教育委員会文化財課が立会い調査を実施した結果、地表下1.5mの黒色粘土層より弥生時代中期の土器を採集した。当地点まで遺跡が広がっていることが新たに確認された。

今回、外環状線と築港・枚岡線の交差点で大阪瓦斯株式会社によって瓦斯管埋設工事が計画された。瓦斯管埋設工事は交差点の３ケ所に矢板を打ち込み、押し込み工法で実施されることになった。工事予定地は昭和38、41年に弥生土器などが採集された地点であり、遺構、遺物の存在が予想された。大阪瓦斯株式会社と東大阪市教育委員会文化財課が協議した結果、工事に先だって発掘調査が必要との見解が出された。発掘調査は東大阪市遺跡保護調査会（現在の財団法人東大阪市文化財協会）に委託しておこなった。調査面積は74㎡であり、現場は昭和50年５月10日～６月21日まで実施した。

今回、実施した調査は鬼虎川遺跡では初めてであった。調査では地表下５ｍの深い所に遺跡が存在することが確認された。第１～３次調査以後、15年経過しており、鬼虎川遺跡周辺は大規模な開発に伴って景観が大きく変化している。また、開発は鬼虎川遺跡の発掘調査の増加となり、新知見が多く得られている。



調査地近景（平成２年撮影）

Ⅱ．位置と環境

鬼虎川遺跡に生駒山西麓の扇状地から平野部へ移行する地点に立地し、標高5m前後を測る。現在の行政区分では東大阪市弥生町、西石切町二丁目、宝町に相当する。

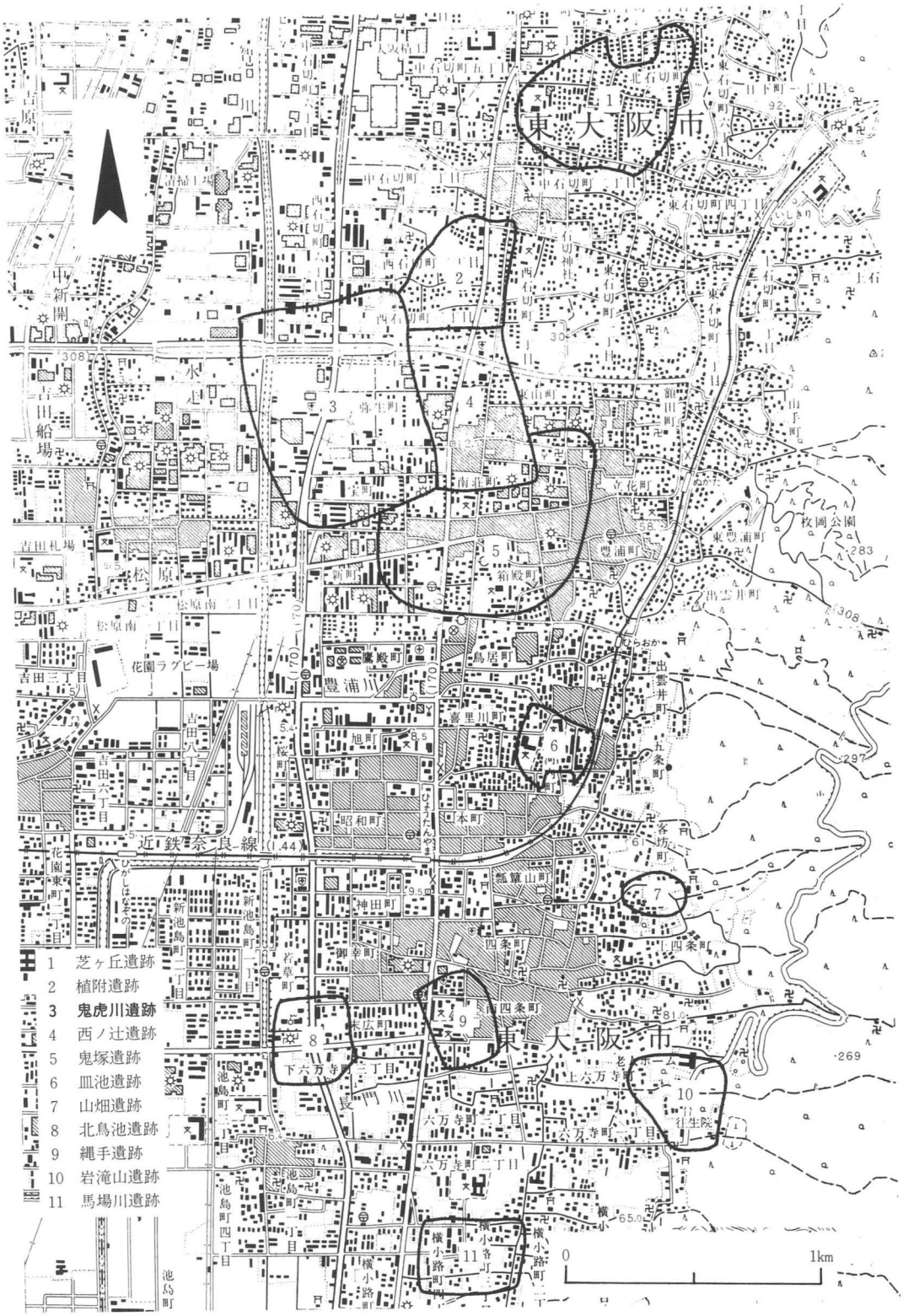
当遺跡の周辺に人々が住み始めるのは旧石器時代からである。東に位置する正興寺山、芝坊主山遺跡ではナイフブレードが採集され、古くより知られていた。また、神並遺跡の調査では、縄文時代早期の土器と共に土偶、有舌尖頭器、翼状剝片、石鏃、石匙などが出土している。当遺跡でも縄文時代前期の海岸線が検出され、落ち込んだ状態でナイフブレードや翼状剝片が出土している。また、縄文時代前期～中期の土器も出土しており、旧石器時代～縄文時代中期に小規模な集落を形成していたと考えられる。縄文時代後・晩期になると遺跡数も多く、集落の規模も大きくなる。主に扇状地上に集落が形成されており、日下、芝ケ丘、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが上げられる。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡である。淡水産の貝を主体とした貝塚であり、当時、西に広がっていた河内湾が潟へと変化していったことが窺える。また、多数の埋葬人骨が発見されており、環状列墓の存在も確認されている。縄手遺跡では数棟の竪穴住居や環状列石などが検出されている。

弥生時代前期になると前代の人々が生活の場としていた扇状地上だけではなく、扇状地から平野部へ移行する地点や平野部にも遺跡が出現する。扇状地上に立地する遺跡は中垣内、鬼塚、縄手遺跡がある。扇状地から平野部へ移行する遺跡は当遺跡があり、平野部に立地する遺跡は高井田、瓜生堂、山賀遺跡がある。前期より出現した遺跡は中・後期に継続するものが多く、集落規模も大きい。当遺跡や鬼塚、縄手、瓜生堂遺跡などが上げられる。中・後期になって出現する遺跡は扇状地上の植附、西ノ辻、馬場川遺跡、扇上地から平野部へ移行する地点に立地する北鳥池遺跡、平野部の上小阪、若江遺跡などがある。また、標高80～100mの高所にも出現し、山畑、岩滝山遺跡などが上げられる。

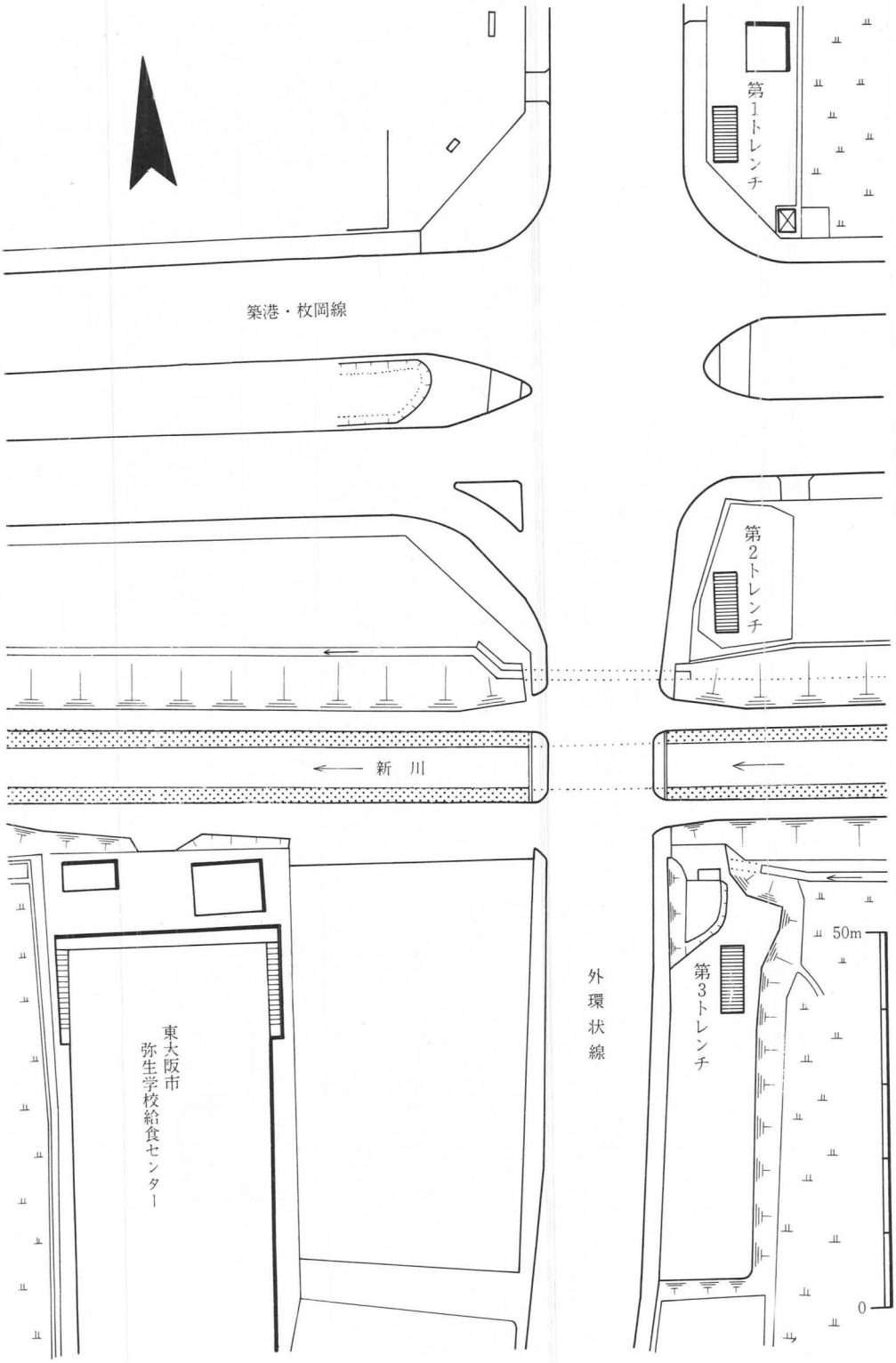
今日までの調査で当遺跡は環壕を有する大集落を形成していたと考えられる。環壕は幅5.2mを測り、内側に柵列を施していた。集落の中心は南に広がっており、多量の柱痕や井戸などが検出されている。集落は微高地上に立地しており、周辺には貝塚を形成している。また、西には杭列や杭群が検出されており、水田がつくられていたと考えられる。墓域は環壕の北東に広がっており、方形周溝墓や土坑墓などが検出されている。

古墳時代になると集落以外に古墳が造営されるようになる。東大阪市域では中期の古墳が最も古く、塚山、えのき塚、大賀世古墳などがある。また、後期になると古墳の数も急激に増加し、群集墳を形成するようになる。生駒山西麓の各尾根筋には群集墳が存在し、辻子谷、神並、出雲井、客坊山、山畑、花草山、五里山古墳などが上げられる。

奈良時代以降になると法通寺が東に建立される。神並、西ノ辻遺跡は法通寺の周辺に位置し、奈良時代～中世の掘立柱建物、井戸、溝、土坑墓などが見つかっており、集落が継続して存在していたと考えられる。


東大阪市
豊浦川
近鉄奈良線
長門川
1 芝ヶ丘遺跡
2 植附遺跡
3 鬼虎川遺跡
4 西ノ辻遺跡
5 鬼塚遺跡
6 皿池遺跡
7 山畑遺跡
8 北鳥池遺跡
9 縄手遺跡
10 岩滝山遺跡
11 馬場川遺跡
0
1km

第1図　遺跡周辺図



第2図　調査地点位置図

Ⅲ．調査の概要

今回の調査地は外環状線(国道170号線)と築港・枚岡線(国道308号線)の交差点付近である。外環状線の東側に３ケ所のトレンチを設定した。北側より第１、２、３トレンチとする。第１トレンチは16㎡、第２トレンチは26㎡、第３トレンチは32㎡である。

調査は第1トレンチより開始し、調査完了後、第2、3トレンチと移った。上層より約３～5mは機械掘削でおこない、下層は人力掘削で精査した。

1．層位（第３図）

第１トレンチ

第１層　灰褐色粘土層。南側でやや厚くなる。層厚20～40cm。

第２層　黄褐色粘土層。調査地の南側で終り、層が波状を呈する。層厚10～30cm。

第３層　淡灰色粘土層。第５層面より切り込んだ掘り上げ田の溝に堆積した層である。層厚70cm。近世。

第４層　淡灰色シルト質粘土層。掘り上げ田の溝に堆積した層である。下は未確認。層厚1.3m以上。近世。

第５層　淡青灰色粘土層。掘り上げ田のベース面である。層厚40～50cm。

第６層　淡灰色砂礫層。弥生土器、須恵器、土師器の細片を含む。層厚30cm。

第７層　淡灰色粘土層。調査地の南側で終る。層厚20～30cm。

第８層　黒色粘土層。層厚30～40cm。

第９層　灰褐色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚10～20cm。

第10層　黒色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚40～50cm。

第11層　淡青灰色粘土層。弥生時代中期の遺構面。

第２トレンチ

第１層　青灰色粘土層。溝内の堆積層。層厚10～20cm。

第２層　淡灰色粘土層。溝内の堆積層。層厚20～30cm。

第３層　黄褐色粘土層。溝のベース面である。層厚30～40cm。

第４層　淡青灰色粘土層。層厚10～20cm。

第５層　灰色粘土層。植物遺体を多く含む。層厚30～40cm。

第６層　暗灰色粘土層。弥生土器、須恵器の細片を含む。層厚40～50cm。

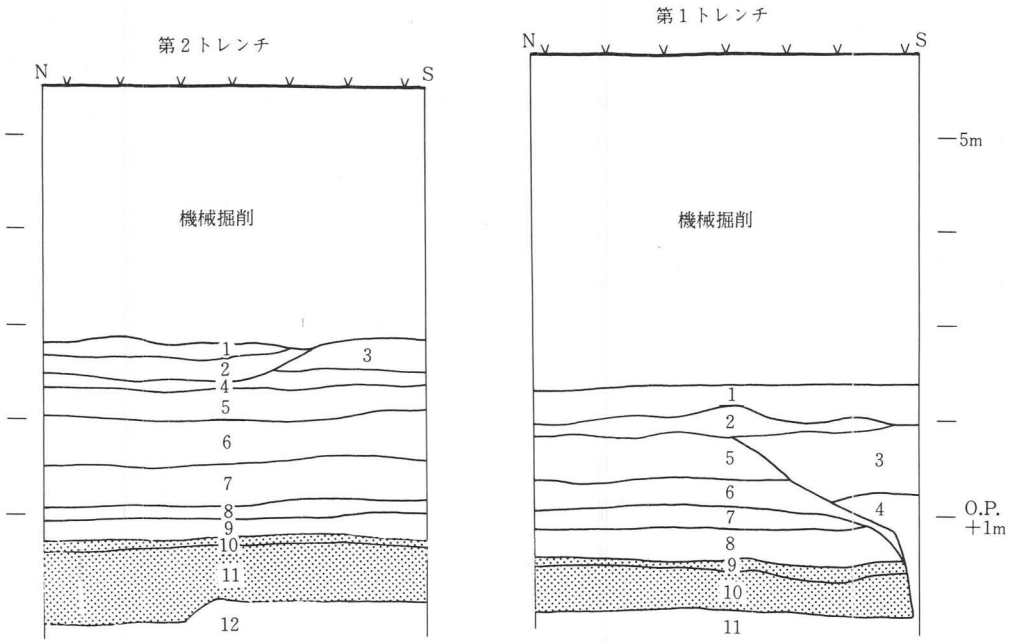
第７層　暗青灰色粘土層。層厚30～40cm。

第８層　暗青灰色砂礫混り粘土層。層厚10～20cm。

第９層　淡黒色粘土層。層厚20～30cm。

第10層　淡黒灰色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚５～10cm。

第11層　黒色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚５～10cm。



第1トレンチ

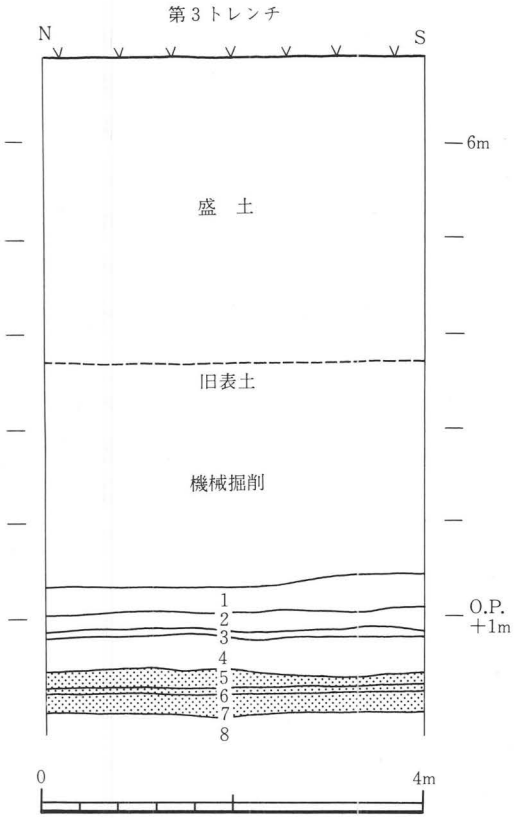
第1層　灰褐色粘土層
第2層　黄褐色粘土層
第3層　淡灰色粘土層
第4層　淡灰色シルト質粘土層
第5層　淡青灰色粘土層
第6層　淡灰色砂礫層
第7層　淡灰色粘土層
第8層　黒色粘土層
第9層　灰褐色粘土層
第10層　黒色粘土層
第11層　淡青灰色粘土層

第2トレンチ

第1層　青灰色粘土層
第2層　淡灰色粘土層
第3層　黄褐色粘土層
第4層　淡青灰色粘土層
第5層　灰色粘土層
第6層　暗灰色粘土層
第7層　暗青灰色粘土層
第8層　暗青灰色砂礫混り粘土層
第9層　淡黒色粘土層
第10層　淡黒灰色粘土層
第11層　黒色粘土層
第12層　淡青灰色粘土層

第3トレンチ

第1層　淡褐色粘土層
第2層　灰色粘土層
第3層　青灰色粘土層
第4層　黒色粘土層
第5層　暗灰色粘土層
第6層　淡青灰色粘土層
第7層　黒色粘土層
第8層　淡灰褐色粘土層



第3図　東壁断面実測図

第12層　淡青灰色粘土層。弥生時代中期の遺構面。

第３トレンチ

第１層　淡褐色粘土層。層厚30cm。

第２層　灰色粘土層。層厚20～30cm。

第３層　黄灰色粘土層。層厚５～10cm。

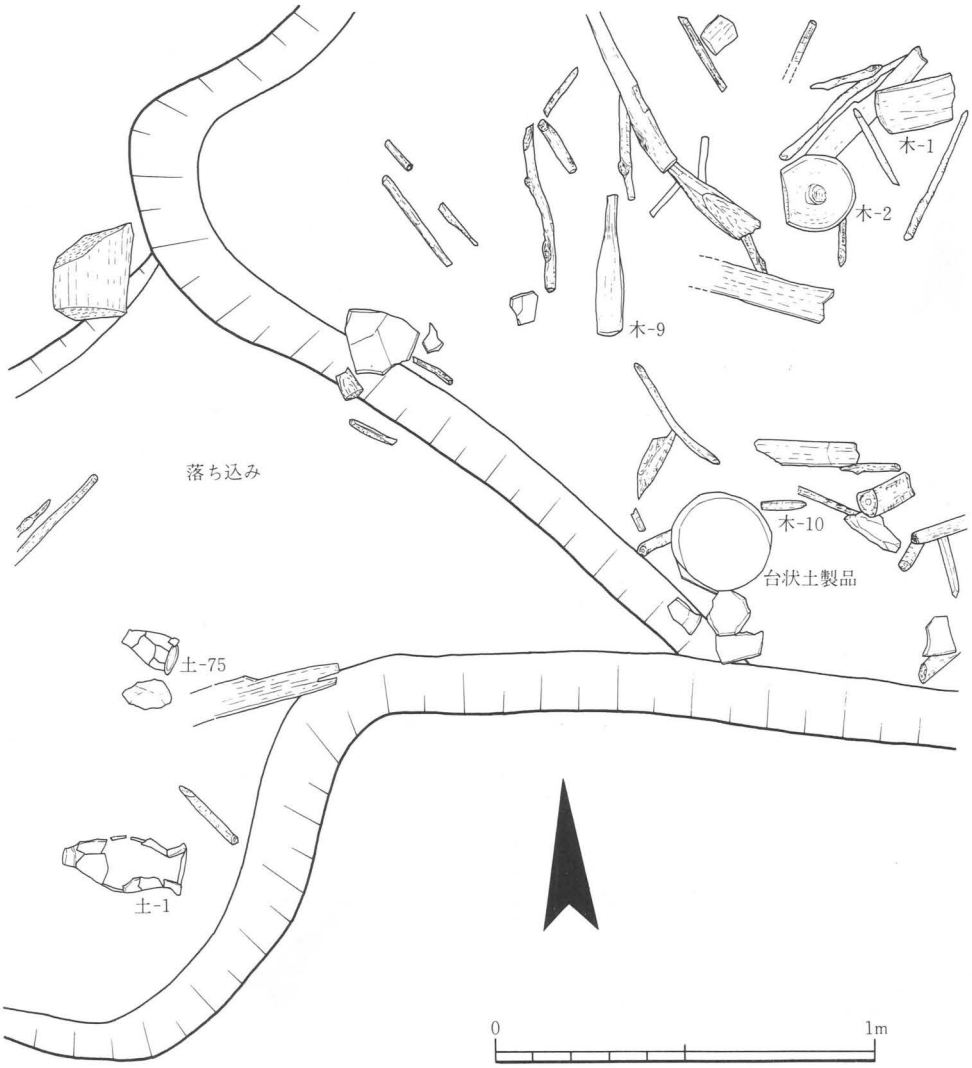
第４層　黒色粘土層。層厚40cm。

第５層　暗灰色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚10～20cm。

第６層　淡青灰色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚５～10cm。

第７層　黒色粘土層。弥生時代中期の遺物包含層。層厚20～30cm。

第８層　淡灰褐色粘土層。弥生時代中期の遺構面。



第４図　落ち込み内遺物出土状況実測図

2．遺構

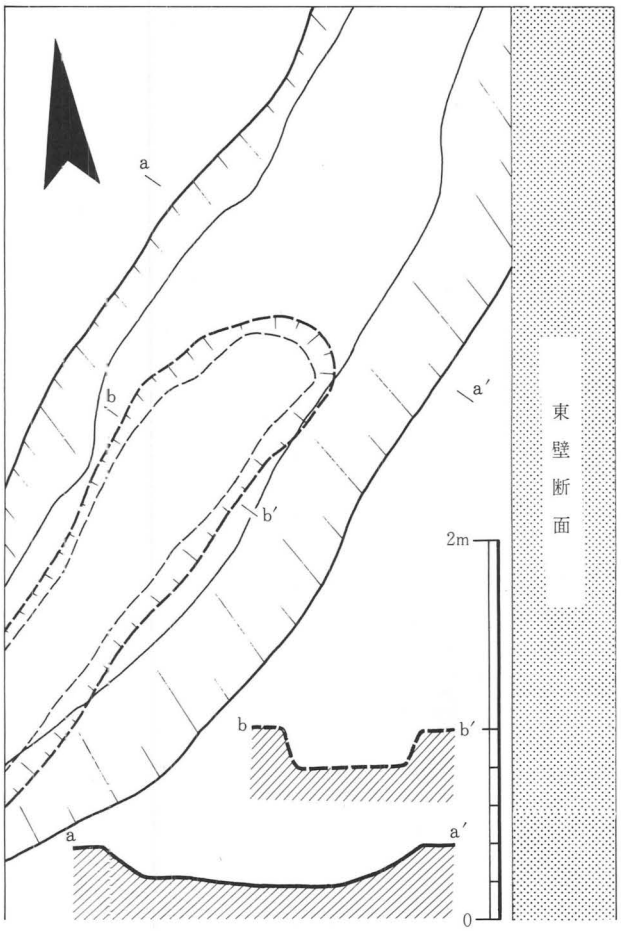
弥生時代中期の遺構を検出した。第２トレンチでは落ち込み１、第３トレンチでは溝１と杭を検出した。第１トレンチでは遺構は認められなかった。

落ち込み（第４図）

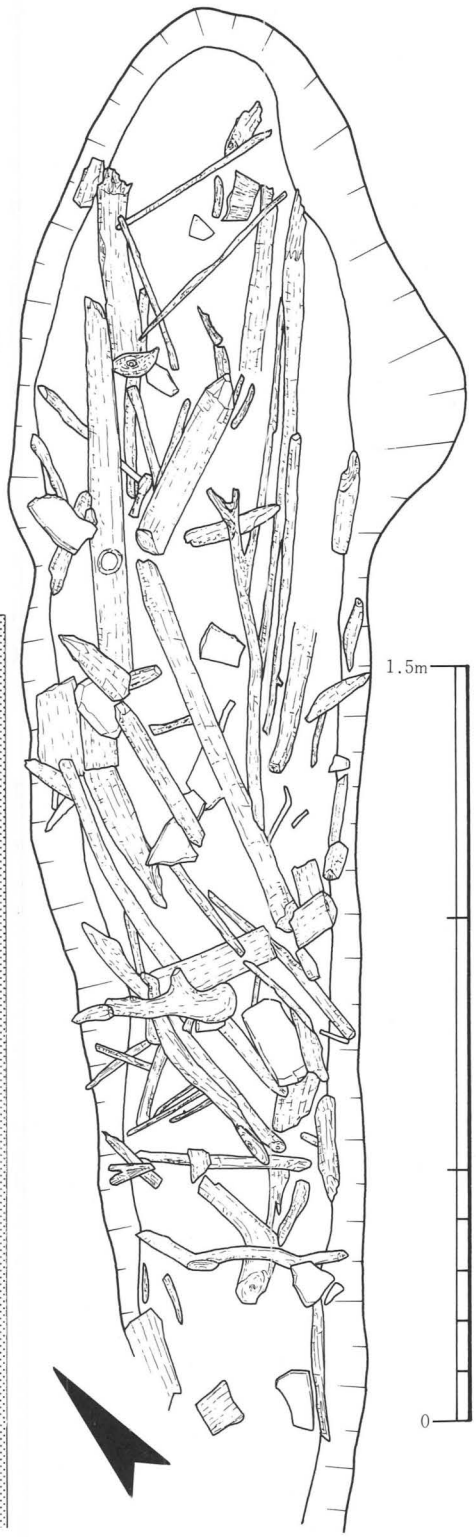
調査地の北側で検出した。第12層上面をベース面とする。不整形を呈する落ち込みであり、西側より溝状に伸び、さらに東側で一段落ちる。落ち込み内より多量の土器、土製品、木器が出土した。深さ20～30cmを測る。

溝（第５・６図）

調査地の北側で検出した。第８層上面をベース面と



第５図　溝実測図



第６図　溝内遺物出土状況実測図

する。南西から北東方向に伸びる溝である。断面形がゆるいU字状を呈し、底は平坦である。開削時の溝は幅1.7m、深さ20cmを測る。溝の埋没時には溝内が狭くなっており、幅0.5～0.9m、深さ15cmを測る。埋没時には多量の木器が埋っており、杭や原材などが多く認められた。

杭

調査地の北西部で杭が３本打たれていた。径が10cm前後を測るものである。

Ⅳ．出土遺物

今回、出土した遺物は弥生土器、土製品、木器、石器がある。

1．弥生土器

今回の調査で出土した弥生土器は、すべて中期のものである。畿内編年の第Ⅱ～Ⅲ様式にあたる。これらの土器は第１～３トレンチの遺物包含層より出土した。第Ⅱ・Ⅲ様式の土器は同一層内に混在した状況で各トレンチより出土した。そのため、層位的に分離できなかった。また、トレンチごとの時期差も認められない。土器は遺物包含層より出土したので大部分が破片であり、全形を知り得るものは少ない。出土土器の量は第Ⅱ様式が多く、第Ⅲ様式は少量である。第Ⅱ様式の土器は壺・無頸壺・壺蓋・甕・甕蓋・高杯・鉢の器種がある。第Ⅲ様式の土器は壺・甕・高杯・鉢の器種がある。

土器の説明は本文と観察表でおこなう。本文では各タイプごとに分類基準の概略を説明する。観察表では各土器の法量・形態・技法・胎土・色調・出土トレンチ・生駒西麓産か非河内産などを記す。本文や観察表に示した生駒西麓産と非河内産の分類基準をここで明らかにしておきたい。当地域の土器は胎土中に含まれる鉱物や色調に特徴があり、肉眼観察でも容易に河内周辺地域の土器と識別できる。生駒西麓産の土器は、胎土中に石英、長石、角閃石、雲母を含む。角閃石は生駒西麓に産する閃緑岩に含まれる鉱物である。当地域の縄文～弥生時代の土器は閃緑岩の風化土を用いるため、角閃石が普遍的に認められる。これに対して周辺地域では閃緑岩がなく、そこで作られた土器の胎土中には角閃石を含まない。当地域と周辺地域との土器の区別には、以上の理由で角閃石の有無を大きな基準とすることができる。色調は主観的な観察になりがちであるが、他地域においても生駒西麓産の土器が褐色系を呈することが基準になっている。今回、出土した非河内産の土器は、乳灰色を呈するものが多い。このことから当地域と他地域を区別するためには、色調も参考になると思われ今回は記す。

調整法のうち１回目におこなわれるのを１次調整、２回目におこなわれるのを２次調整とする。例えば１次調整でハケメ調整をおこない、２次調整でヘラミガキ調整する土器の調整法は、ハケメ＋ヘラミガキ調整と記す。口縁部のヨコナデ調整は、口縁部を整えるために普遍的におこなわれる調整法なので、本文中では必要な時以外は記さない。

壺

壺は大部分のものが口縁部の破片であるが、一部完形品もある。第Ⅱ様式と第Ⅲ様式の壺が出土している。第Ⅱ様式の壺は器形、文様の特徴から壺A～Hの8タイプと小型壺に分類した。第Ⅲ様式の壺は絶対量が少ないので、今回は分類をおこなわなかった。

第Ⅱ様式の壺

壺A（第7図　1～13）

最大腹径が胴下半部にある丈の高い壺である。底部はわずかにくぼむ平底であり、胴部の張りは少ない。頸部は細くしぼるが、頸部と胴部の境は明瞭でない。口縁部はゆるく外反するものが多い。口縁端部は尖り気味のものや面をもつものなどがある。このタイプの壺は無文であることも特徴とする。頸部内面にはしぼり痕を残すものがある。壺の内外面は、ヘラミガキ調整かナデ調整するものが多い。すべて生駒西麓産である。

壺B（第7図　14～16）

器形は壺Aと同様であるが、頸部外面に櫛描文様を施すのを特徴とする。口縁端部は面をもつのを常とする。頸部内外面はナデ調整するが、指頭圧痕が内面に残るものもある。すべて生駒西麓産である。

壺C（第7図　17～22）

太く短い頸部を有する無文の壺である。頸部と胴部の境が明瞭でなく、口縁部がゆるく外反するものが多い。口縁端部は丸いもの、わずかに上端が立ち気味のもの、面をもつものがある。頸部内外面はハケメ＋ナデ調整かハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁端部が面をもつものは非河内産である。17～20は生駒西麓産。21・22は非河内産。

壺D（第8図　23～34）

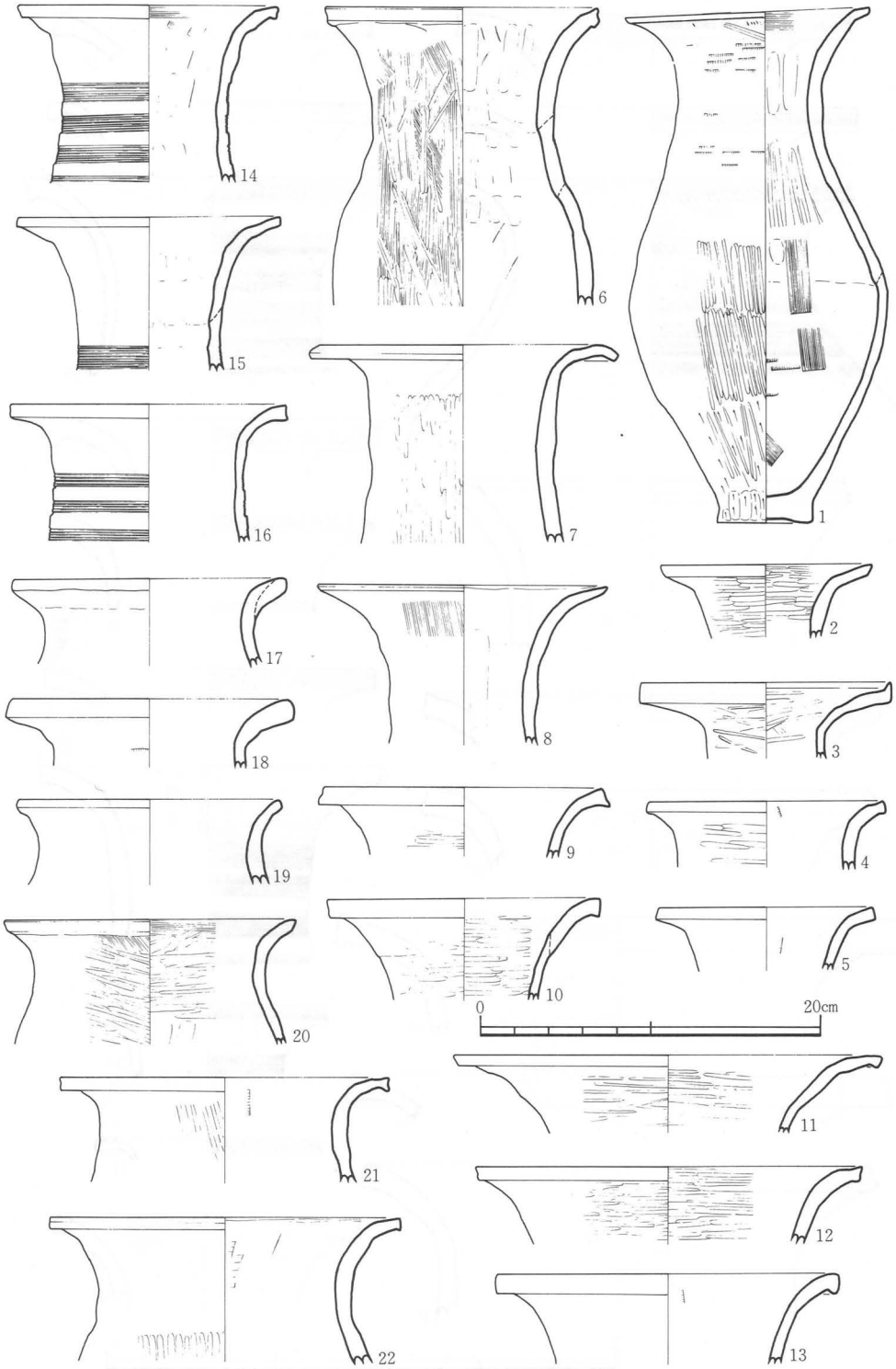
頸部が筒状を呈し、口縁部が大きく外反する壺である。口縁端部は面をもつものと下方へわずかに拡張するものがある。口縁端部や頸部外面などに文様を施すのを常とする。文様は櫛描文様とキザミ目がある。口縁端部には櫛描波状文、頸部外面には櫛描直線文を多くもちいている。頸部内外面はナデ調整やヘラミガキ調整するものが多い。頸部外面を縦方向、口縁部内面を横方向のハケメ調整するものは非河内産である。23・24・27～30・34は生駒西麓産。25・26・31～33は非河内産。

壺E（第8図　35～40）

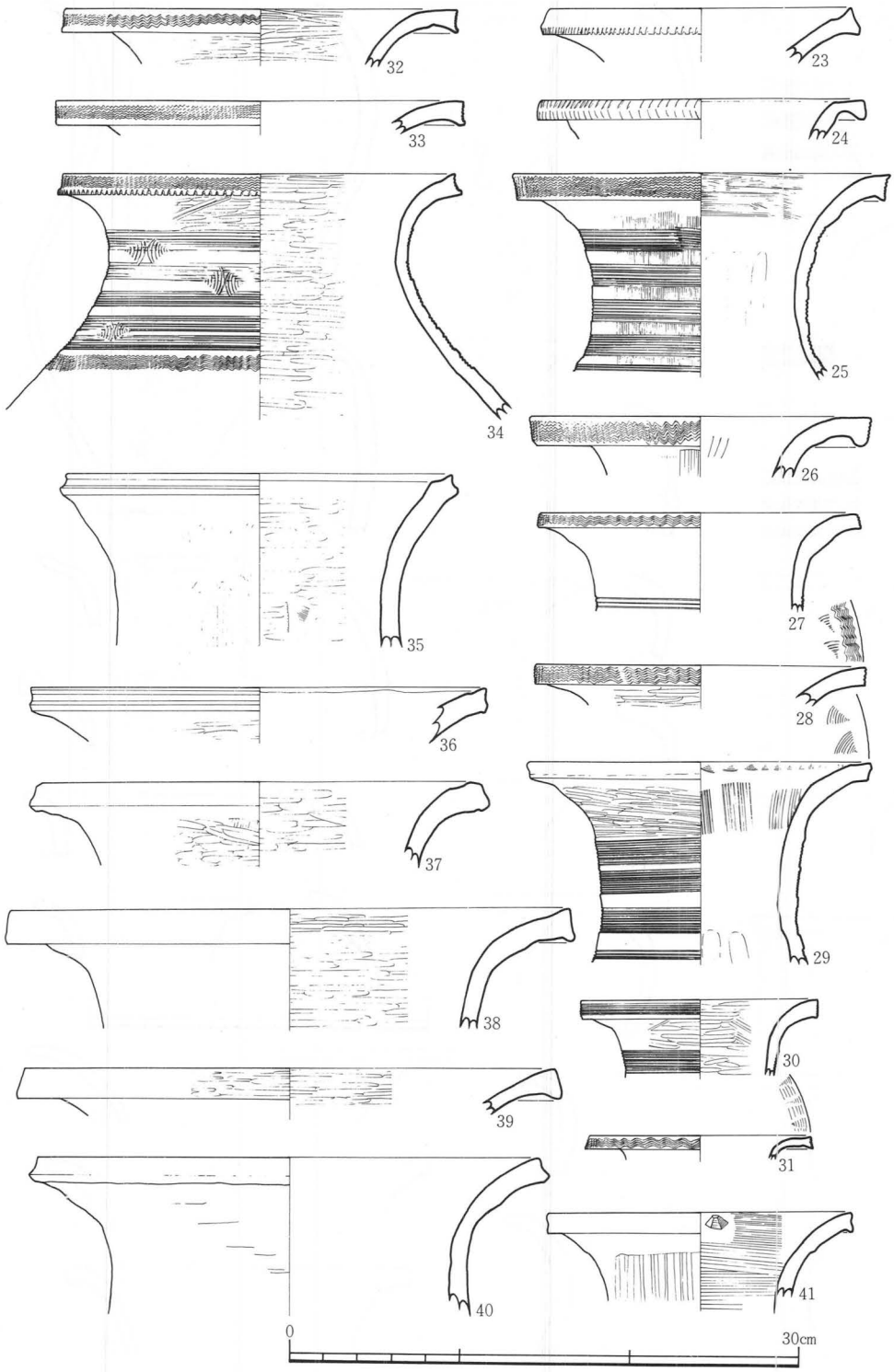
器形は壺Dと極似するが無文であるのを特徴とする。壺Dに比して大型で、器壁も厚い。口縁端部は面をもつものや下方へわずかに拡張するものが多い。頸部内外面はナデ調整かヘラミガキ調整する。口縁端部をヘラミガキ調整するものもある。35・36・38・40は生駒西麓産。37・39は非河内産。

壺F（第8図　41）

頸部は漏斗状を呈し、口縁部がわずかに外反する壺である。口縁端部は面をもつ。口縁部内面には円錐形を呈する乳状突起を貼り付ける。乳状突起は破片のため1個しか残っていないが、



第7図　弥生土器実測図



第8図　弥生土器実測図

通例からみて２～４個ほどあったと考えられる。乳状突起は裾部径1.5cm、高さ0.5～0.6cmを測る。頸部外面はハケメ原体のような条間や条溝のない工具でナデ調整し、内面はハケメ調整する。非河内産である。

壺G（第９図　42～44）

口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へ拡張する壺である。口縁端部の下端に指や棒状工具で圧痕を施し文様とする。そのため口縁端部の下端は波状を呈する。口頸部外面はナデ調整し、内面はヘラミガキ調整か横方向のハケメ調整する。横方向のハケメ調整するものは非河内産である。42・43は生駒西麓産。44は非河内産。

壺H（第９図　45・46）

口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へわずかに拡張する壺である。口縁端部に櫛描文様やキザミ目を施す。口頸部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。内外面に黒い塗料を塗っているものもある。すべて生駒西麓産である。

小型壺（第９図　47～49）

口縁部径が10cm内外でつくりの粗い無文の壺である。頸部は長い筒状のものと短い筒状のものがある。口縁端部は下方へ拡張する。頸部内外面はハケメ＋ナデ調整する。48・49は生駒西麓産。47は非河内産。

第Ⅲ様式の壺（第９図　56～61）

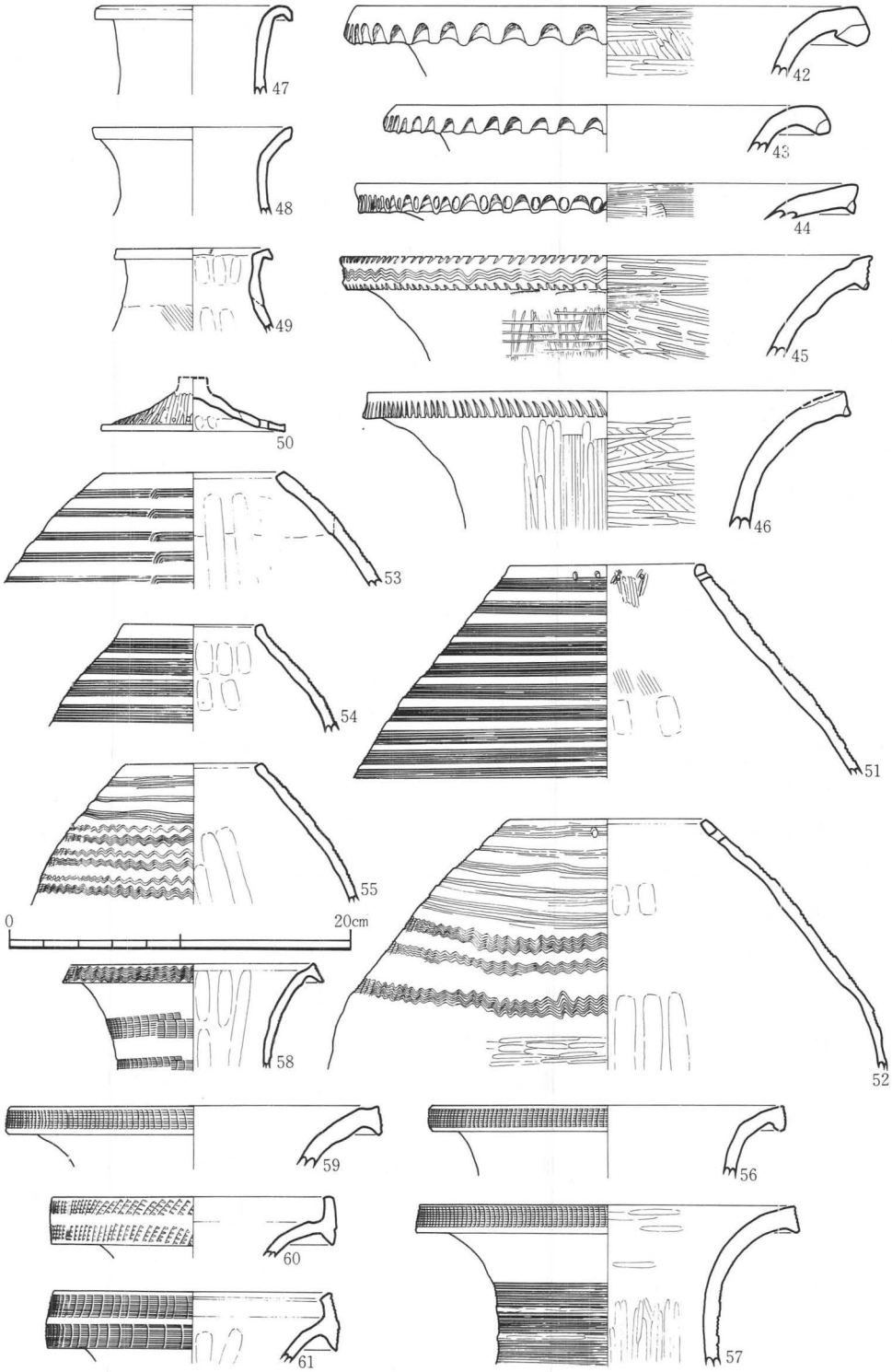
口縁部が漏斗状のものと筒状を呈するものがある。口縁端部は下方へ拡張し断面形が三角形を呈するものと、上下に拡張し幅広い面をもつものがある。口縁端部や頸部外面に櫛描文様を施すのを常とする。口縁端部を下方へ拡張したものは１帯の櫛描文様を施す。口縁端部を上下に拡張したものは２帯の櫛描文様を施し、幅広い文様帯間とする。口縁端部には櫛描簾状文を多く用いる。頸部内外面はナデ調整するものが多い。すべて生駒西麓産である。

第Ⅱ様式の無頸壺（第９図　51～55）

胴上半部が「八の字」状を呈する無頸壺である。口縁端部が角ばる、いわゆる擬口縁のものと丸いものがある。口縁部には焼成前に小円孔を１孔だけ穿ったものと２ケ１対で相対した２ケ所に穿ったものがある。胴上半部外面には櫛描文様を施すのを常とし、文様構成は直線文を施すものなど数種類がある。粗雑な直線文の下に波状文を施すものや直線文を描き、その完結する位置で櫛原体の下端を軸にして扇形文を施しているものもある。胴上半部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。胴下半部の残っているものは、外面を横方向のヘラミガキ調整する。直線文だけを施したものは生駒西麓産であり、他は非河内産である。51・54は生駒西麓産。52・53・55は非河内産。

第Ⅱ様式の壺蓋（第９図　50）

笠形を呈する壺蓋である。つまみ部は上方へ伸びるが、大部分を欠損している。口縁部には焼成前に２ケ１対で相対する２ケ所に小円孔を穿っている。体部外面は縦方向の丁寧なヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。生駒西麓産である。



第9図　弥生土器実測図

甕

甕は大部分が口縁部の破片であるが、一部完形品もある。第Ⅱ様式、第Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭、第Ⅲ様式の時期に比定できる甕が出土している。第Ⅱ様式の甕は甕A～Dの4タイプに分類した。甕A～Cは器形は極似しているが、細部で異なる。そのため、第Ⅱ様式の甕は器形と内外面の最終調整を基準として分類した。また、大型の甕は小型の甕と大きさが異なるだけであり、小型の甕に含めて分類した。第Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭と第Ⅲ様式の甕は、絶対量が少ないので今回は分類をおこなわなかった。

第Ⅱ様式の甕

甕A（第10・11図　62～88）

最大径は大部分のものが口縁部にあるが、口縁部と胴部の径が等しいものもある。底部は厚い平底であり、胴部の張りは少ない。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸いものやわずかに面をもつものが多い。胴部内外面をナデ調整するのを特徴とする。大型の甕も同様である。口縁端部にキザミ目を施すものが1例あるが、他は施さない。すべて生駒西麓産である。

甕B（第11図　89～99）

器形は甕Aと同様であるが、胴部内外面をヘラミガキ調整するのを特徴とする。Bタイプのヘラミガキ調整は第Ⅲ様式のものに比して部分的で粗い。大型の甕は小型のものよりわずかに丁寧なヘラミガキ調整する。口縁端部にキザミ目を施すものは1例あるが、他は施さない。すべて生駒西麓産である。

甕C（第12図　100～120）

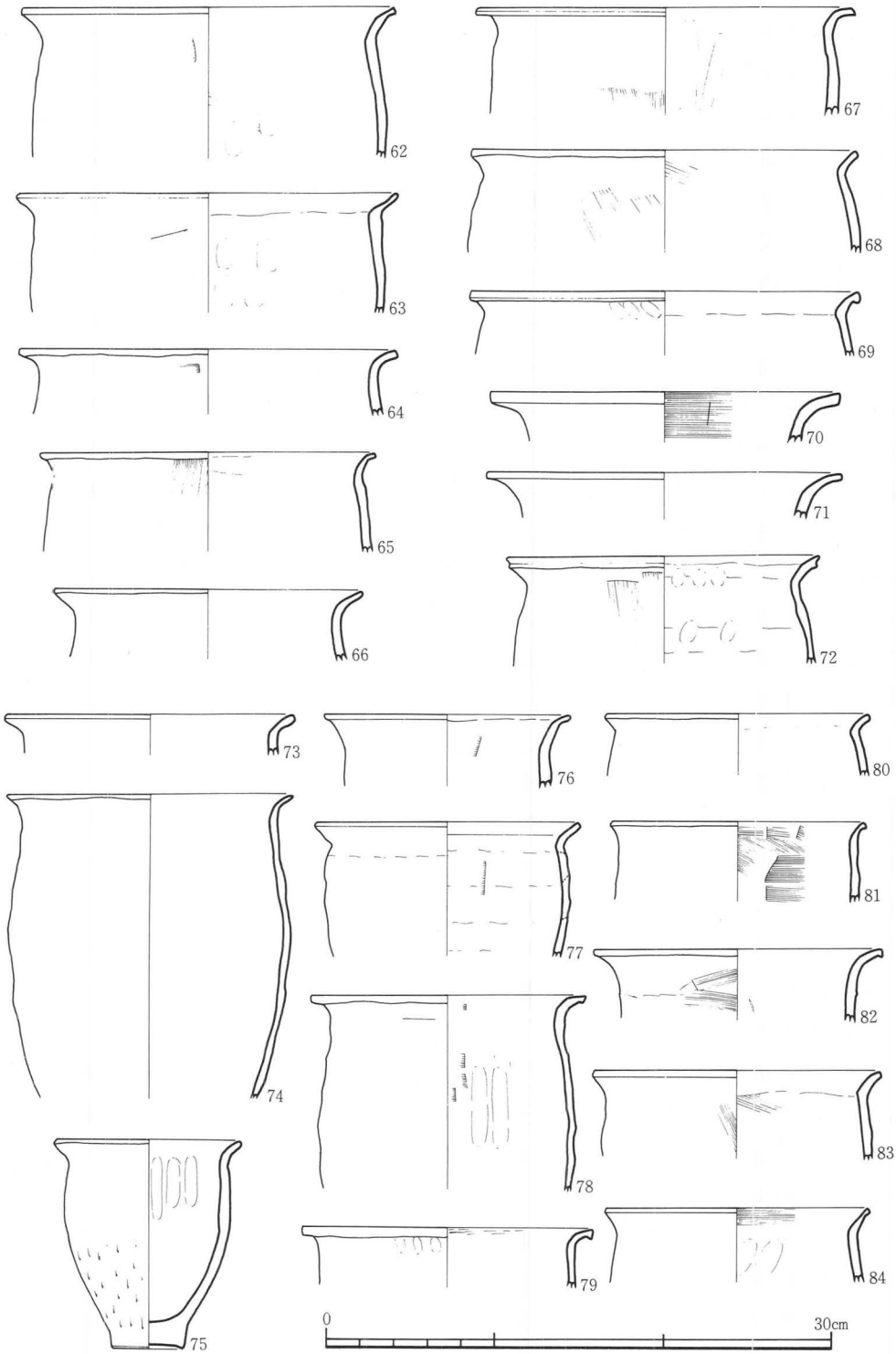
最大径は大部分のものが口縁部にあるが、口縁部と胴部の径が等しいものもある。底部は厚い平底で、胴部の張りは少ない。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が巻き込むような形状を呈するものが多い。胴部外面を縦方向のハケメ調整し、口縁部内面をヨコナデ＋横方向のハケメ調整するのを特徴とする。胴部内面はナデ調整する。口縁端部にはキザミ目を施すものが多い。大型の甕は、口縁端部が面をもつものと尖り気味のものがあり、キザミ目を施さない。大部分が非河内産である。108・109・111・113～115・117は生駒西麓産。100～107・110・112・116・118～120は非河内産。

甕D（第12図　121・122）

最大径が口縁部にあり、胴上半部より口縁部は大きく外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。胴下半部外面を横及び斜め方向のヘラケズリ調整するのを特徴とする。胴上半部外面と胴部内面はナデ調整する。胴上半部外面と下半部の境にはヘラケズリ調整による明瞭な稜が残る。すべて非河内産である。

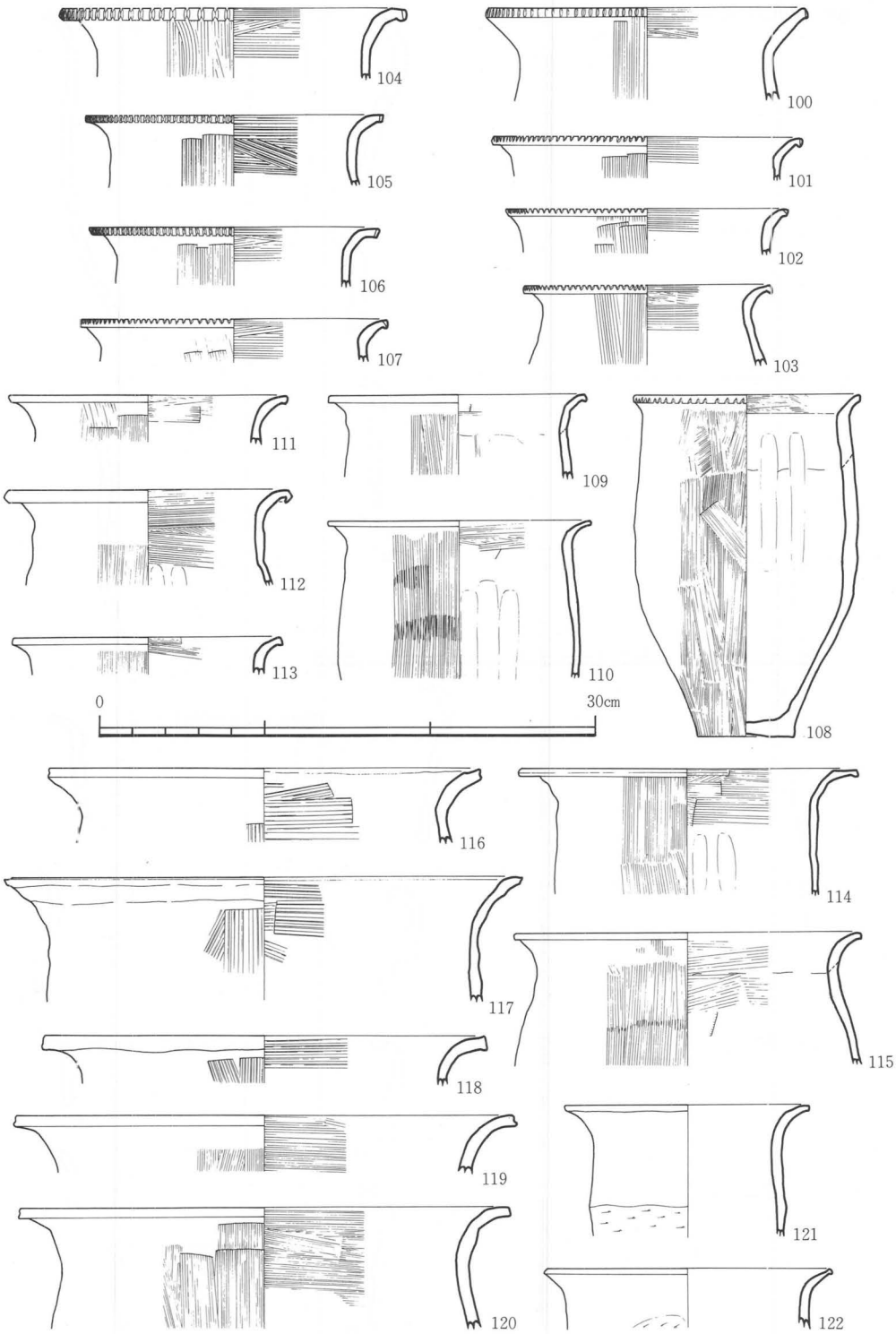
第Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭の甕（第13図　123～125）

最大径が口縁部にあり、胴部の張りは少ない。口縁部は「くの字」状に外反し、内面には強いヨコナデ調整のためにできた稜が認められる。口縁端部は面をもつものと上方へ拡張するものがある。胴部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。大型の甕は胴部内外面を横方向のヘラミガキ調整する。すべて生駒西麓産である。



第10図　弥生土器実測図

第11図　弥生土器実測図



第12図　弥生土器実測図

第Ⅲ様式の甕（第13図　126～134）

最大径が胴上半部にあり、胴部の張りが大きい甕である。器壁は薄い。口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は面をもつものが多いが、上方へわずかに拡張するものもある。胴部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整する。第Ⅱ様式のものに比して口縁部は丁寧なヘラミガキ調整する。大型の甕は、口縁端部が面をもつものと下方へ拡張し、そのため断面形が三角形を呈するものがある。胴部内外面はヘラミガキ調整する。すべて生駒西麓産である。

第Ⅱ様式の甕蓋（第13図　135～138）

甕蓋はつまみ部の破片である。つまみ部の上面は５～８㎝程度の径を有し、凹む。体部はゆるやかな裾広がりである。内外面はナデ調整するもの、ハケメ＋ヘラミガキ調整するもの、ハケメ調整するものがある。すべて生駒西麓産である。

高杯

高杯は杯部、脚部、脚裾部の各破片が出土している。これらは第Ⅱ様式と第Ⅲ様式のものがある。

第Ⅱ様式の高杯（第13図　139・142～147）

杯部は深い椀状を呈し、口縁部が内弯する。口縁端部は面をもって内傾する。口縁端部には粗いキザミ目を施す。脚部は柱状を呈し、中実である。脚裾部はゆるやかな裾広がりになり、裾端部は上方へ拡張するものと面をもつものがある。杯部内外面はヘラミガキ調整し、脚部外面はハケメ＋ナデ調整かヘラミガキ調整する。脚裾部内外面はハケメ調整かナデ調整する。142～147は生駒西麓産。139は非河内産。

第Ⅲ様式の高杯（第13図　140・141・148）

杯部は漏斗状を呈し、口縁部が水平方向に外折した後、下方へ垂下する。口縁部と杯部の境には断面形が三角形や台形の凸帯がめぐる。脚部はわずかに裾広がりになり、中空である。杯部内外面はヘラミガキ調整する。脚部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はハケメ調整する。すべて生駒西麓産である。

鉢

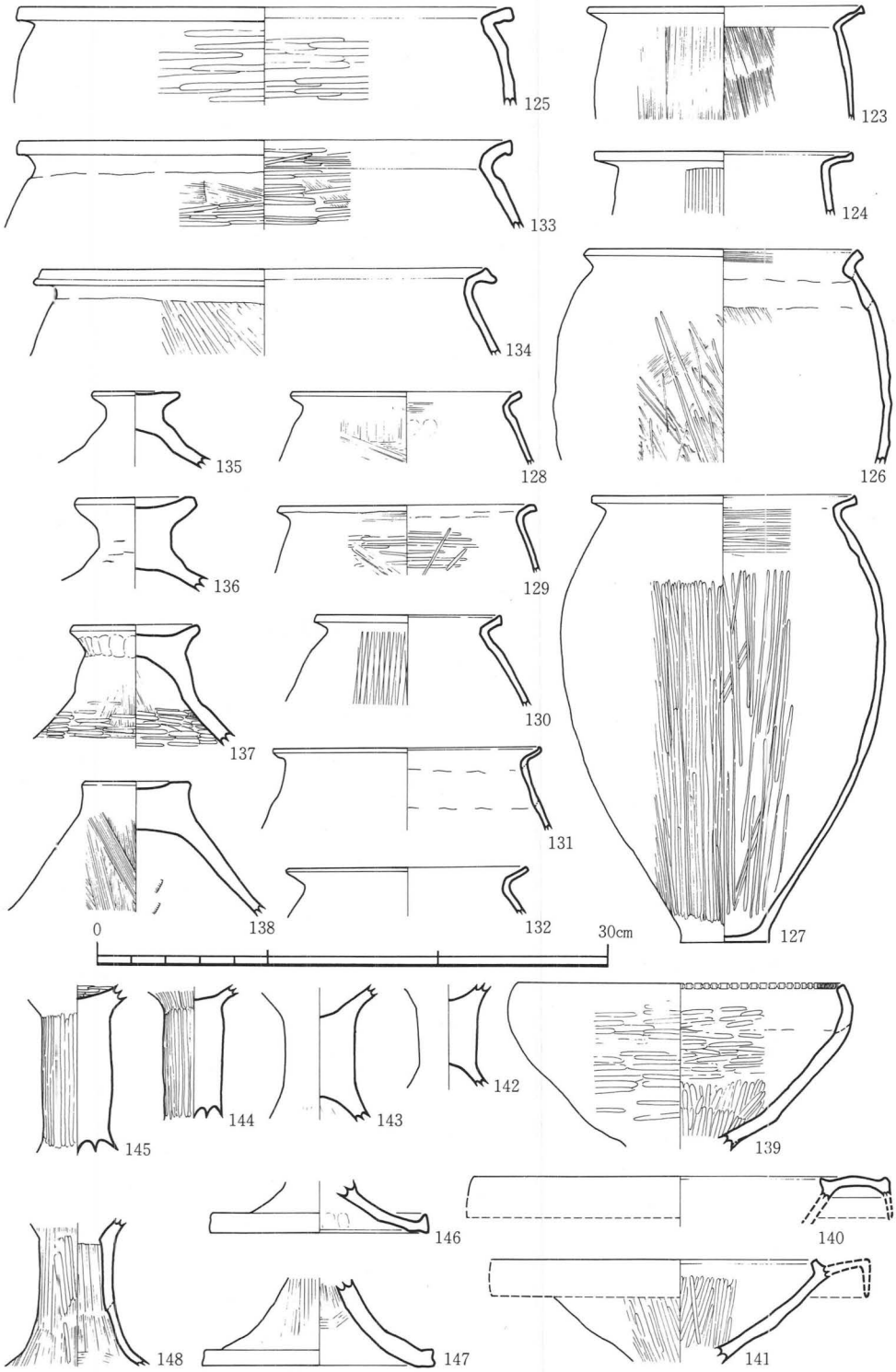
鉢はすべて口縁部の破片である。第Ⅱ様式と第Ⅲ様式の鉢が出土している。第Ⅱ様式の鉢は器形から鉢Ａ～Ｃの３タイプに分類した。また、大型の鉢は小型の鉢と大きさが異なるだけであるので小型の鉢に含めて分類した。第Ⅲ様式の鉢は絶対量が少ないので、今回は分類をおこなわなかった。

鉢Ａ（第14図　149～151）

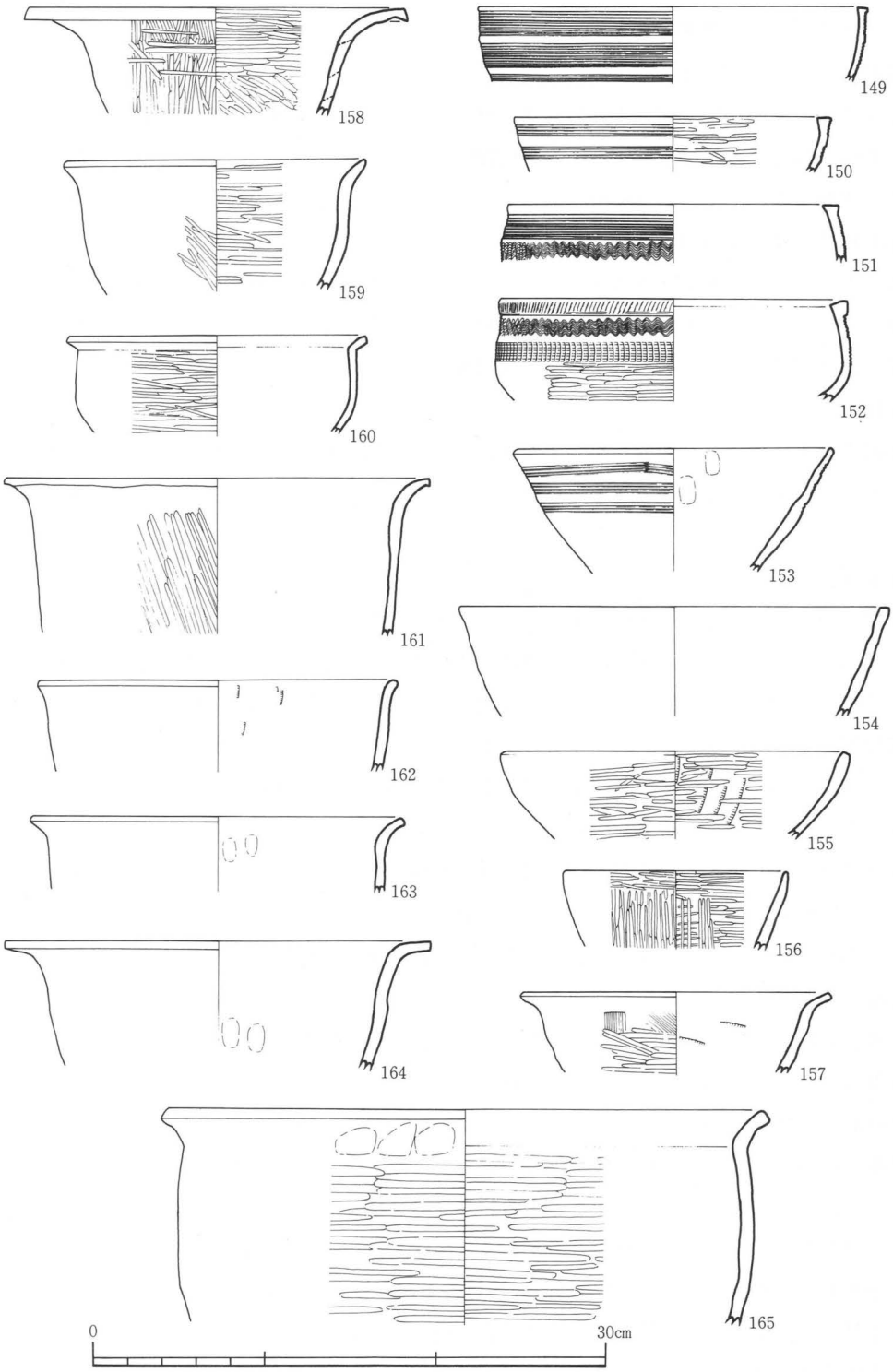
内弯気味の深い椀状を呈する鉢である。口縁端部は胴部に比して厚くつくられ、やや幅広い水平面をもつ。胴部外面には櫛描文様を施すのを常とする。胴部外面はナデ調整し、内面はナデ調整かヘラミガキ調整する。149・150は生駒西麓産。151は非河内産。

鉢Ｂ（第14図　153～156）

逆円錐形を呈する直口の鉢である。口縁端部は丸いものが多い。胴部外面に櫛描文様を施す



第13図　弥生土器実測図



第14図　弥生土器実測図

ものが1例あるが、他は施さない。胴部外面はナデ調整し、内面はナデ調整かヘラミガキ調整する。すべて生駒西麓産である。

鉢C（第14図　157～165）

胴部の張りが少なく、口縁部が外反する鉢である。口縁端部は丸いものと面をもつものがある。すべて無文である。胴部内外面はナデ調整かヘラミガキ調整する。大型の鉢も同様である。すべて生駒西麓産である。

第Ⅲ様式の鉢（第14図　152）

器高が低く、胴上半部が内傾する鉢である。口縁端部は外方へ拡張し、段状を呈する。口縁端部にキザミ目と胴上半部外面には櫛描文様を施す。胴下半部外面はヘラミガキ調整し、胴上半部外面と胴部内面はナデ調整する。生駒西麓産である。

文様

今回の調査で出土した文様をもつ土器は、大部分が第Ⅱ様式のものであり、一部第Ⅲ様式のものを含む。文様は主に壺や鉢などに認められる。ここでは各様式に分け、また、施文原体ごとに記す。

第Ⅱ様式の文様

櫛描文様（第15～17図　166～207・215・217・220・221）

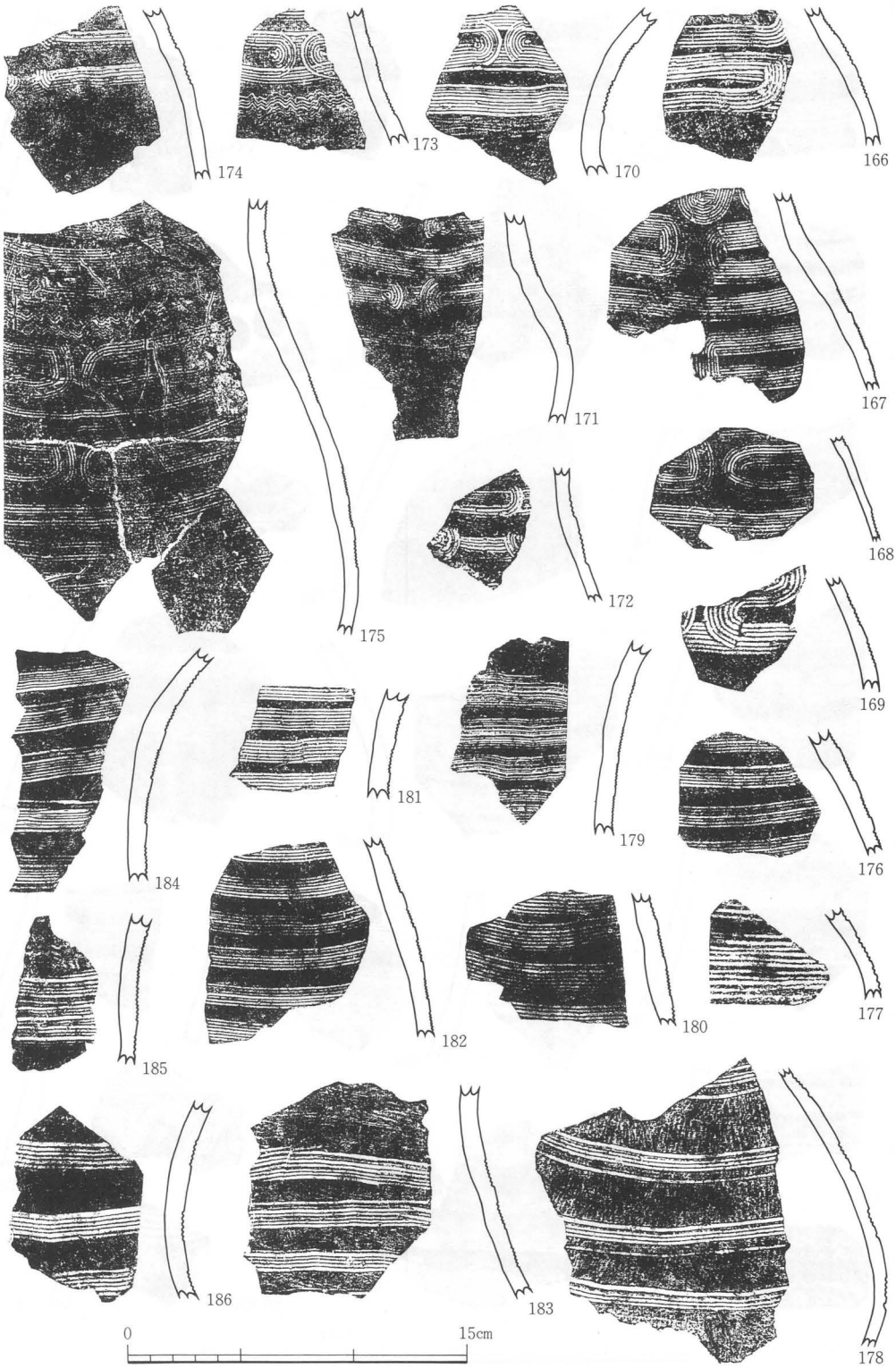
第Ⅱ様式の土器に用いる櫛原体は、第Ⅲ様式にみられるような歯数が20本をこえるものはなく、平均5～8本のものである。文様は口縁端部、口縁部内面、頸部外面から胴部外面に施す。口縁端部の文様は波状文や直線文がある。また、直線文の上に扇形文を加え擬似流水文とするものもある。口縁部内面には波状文や扇形文を施している。頸部外面から胴部外面には、直線文を多くもちいるが、波状文や扇形文なども施す。波状文は、数体ならべて施すものや直線文と交互に施すものがある。数帯の直線文を施した後、その下に1帯だけ波状文を施すものもみられる。扇形文は直線文の上に加えるものや数帯の文様を描いた後、その下に1帯施すものが多い。まれに直線文の下に数帯施すものもある。直線文の文様帯間に相対する2ケ並列の扇形文を施し、擬似流水文を描くものがある。扇形文間はナデ消していない。流水文は直線文を施した後、2帯の文様帯を相対する大きな孤で結び、文様帯間をナデ消している。また、流水文は大部分のものが横方向に描くが、1例縦方向と横方向の両方に描くものもある。

その他の文様（第17図　209～214・216・218・219・222～225）

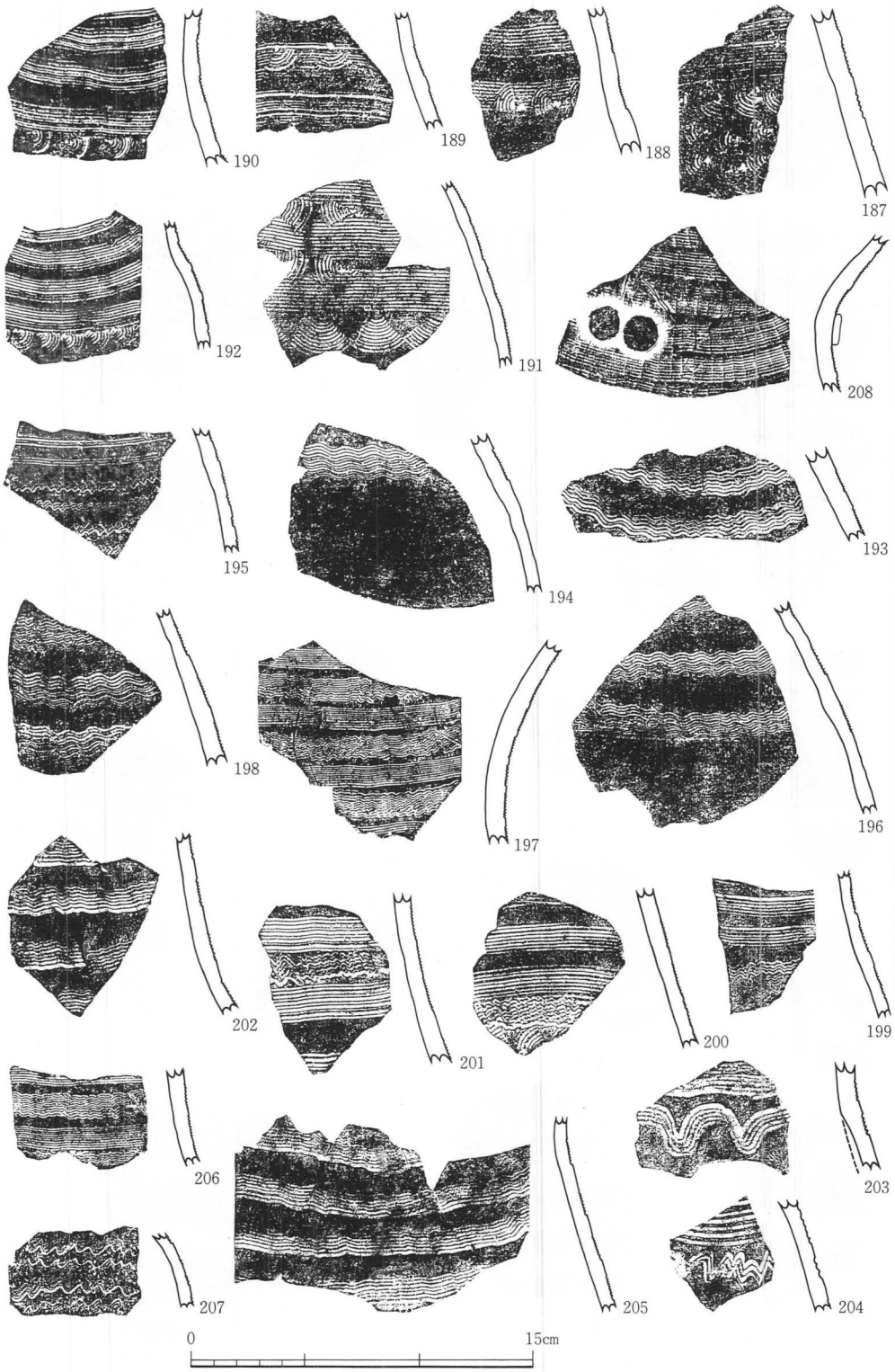
櫛描文様以外にヘラ描文様と棒状工具や指によって圧痕を施し文様とするものがある。これらの文様は、口縁端部に施すのを常とする。ヘラ描文様はキザミ目がある。キザミ目は単独で施すものと櫛描文様に加えて施すものがある。棒状工具による圧痕は口縁端部外面に円形の凹みを施すものである。指による圧痕は口縁端部の下端に施すのを常とし、下端は波状を呈する。棒状工具と指の両方で口縁端部と下端に圧痕を施したものもある。

第Ⅲ様式の文様（第16図　208）

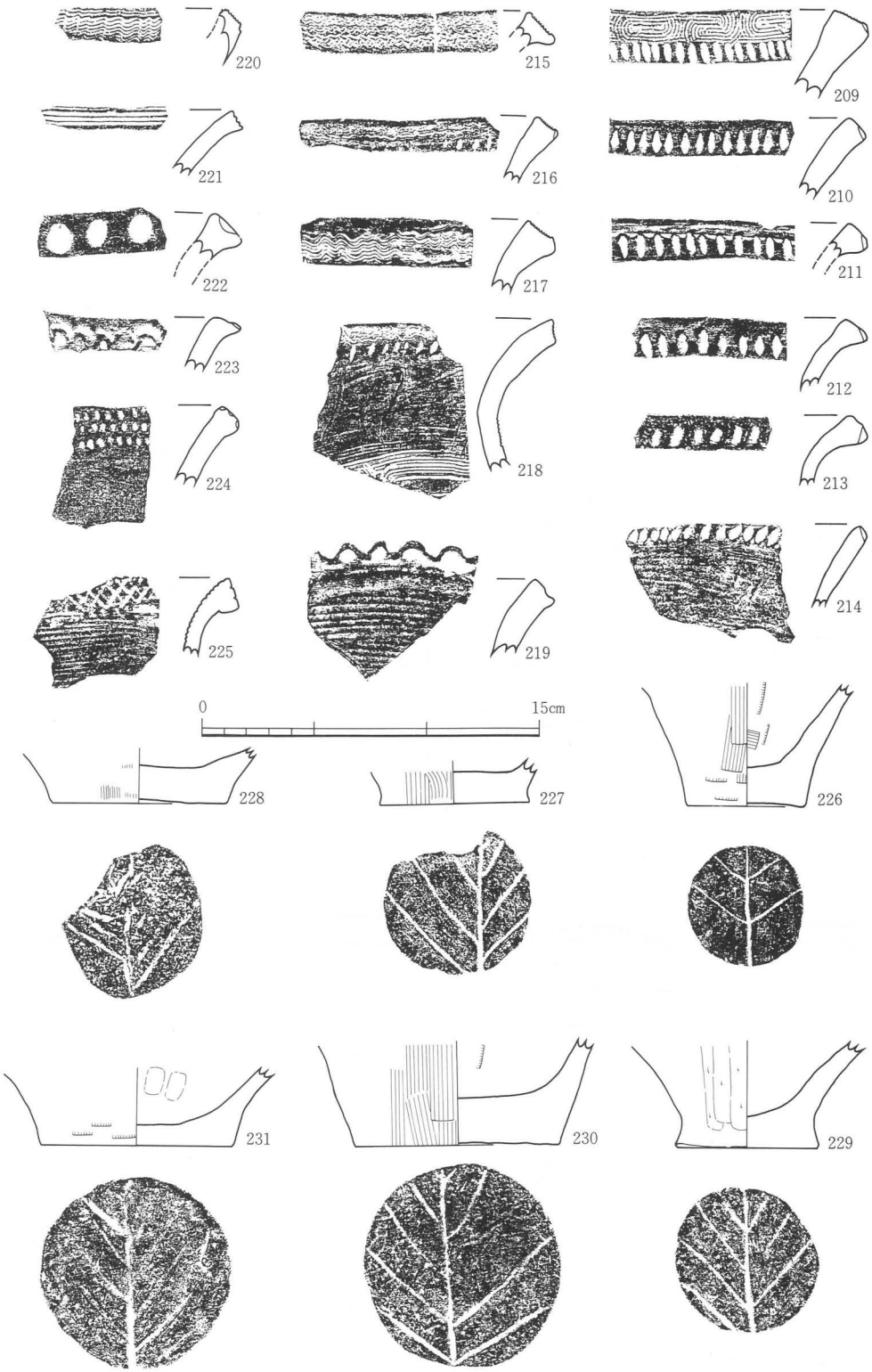
第Ⅲ様式の文様は櫛描文様がある。頸部外面に簾状文を施し、その上に円形浮文を貼り付け


174
173
170
166
175
171
167
172
168
169
184
181
179
176
185
182
180
177
186
183
178
0
15cm

第15図　文様拓影


190
189
188
187
192
191
208
195
194
193
198
197
196
202
201
200
199
206
203
207
205
204
0
15cm

第16図　文様拓影

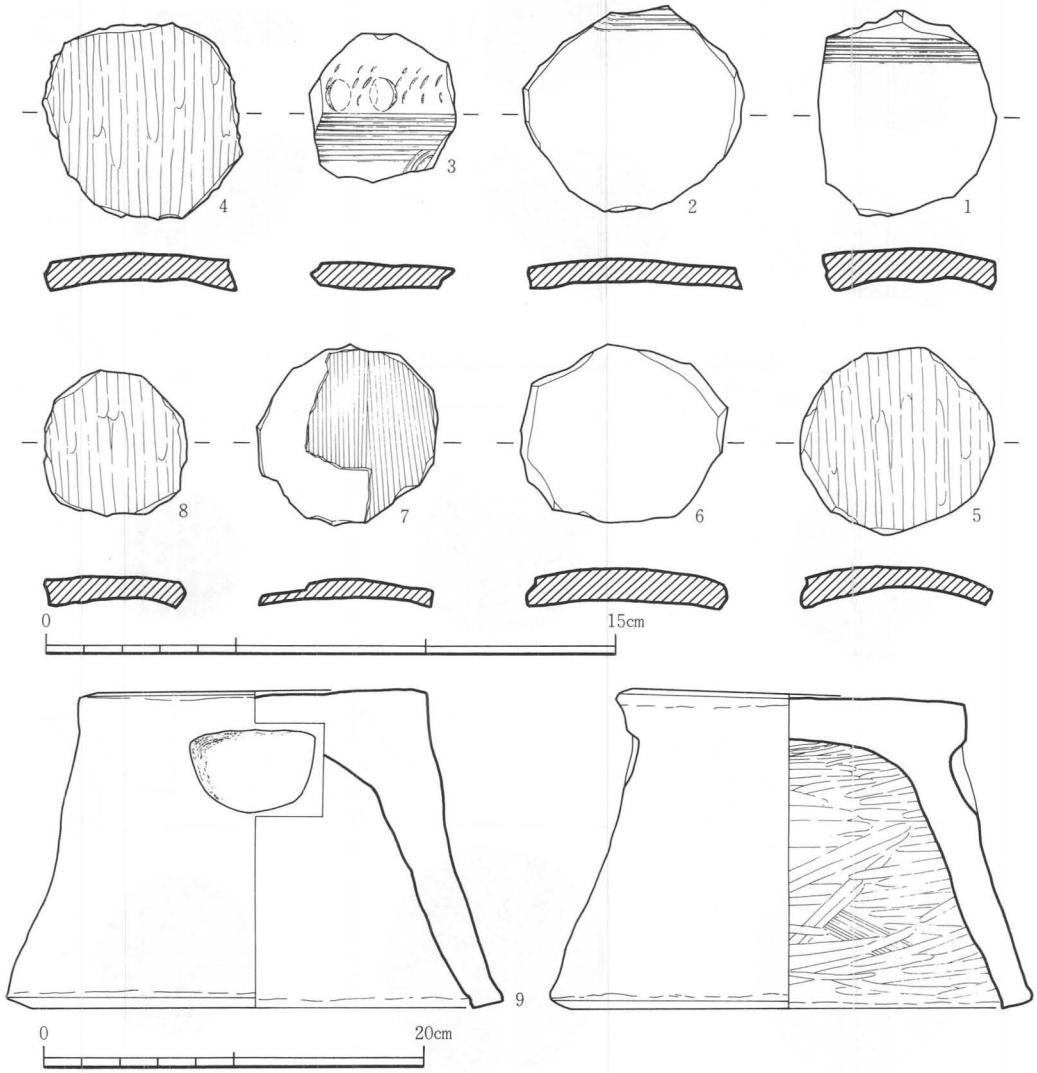


第17図　文様拓影・木葉痕の残る土器底実測図

る。櫛原体の本数は多い。

木葉痕の残る土器底（第17図　226～231）

木葉痕の残る土器底は９個出土し、器種は壺と甕がある。底部壁は厚く、底面は平底かわずかに凹む。底部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整するものが多い。木葉痕は底面の全面にわたって残っている。用いられた葉は広葉樹で、底面に葉の裏側をあてる。また、葉の痕跡は１枚だけである。今回の調査で出土した土器底は251個あり、木葉痕が残るものの比率は４％を示す。229・231は胎土中に石英、長石、角閃石を含む生駒西麓産の土器である。他は胎土中に石英、長石を含み、色調が乳灰色を呈する。非河内産である。第３トレンチの遺物包含層より出土。第Ⅱ様式。



第18図　土製品実測図

2．土製品

土製品の出土量は少ないが、円板状土製品と台状土製品がある。

円板状土製品（第18図　1～8）

1～8は円板状土製品である。紡錘車の未製品の可能性がある。円板状土製品は土器片を2次加工したものである。土器片の縁辺を打ち欠いて円形に整える。縁辺は打ち欠いた後、研磨するものが多い。土器の器種に関係なく円板状土製品として利用する。例えば、1～3は櫛描文様などで装飾した土器片であるから壺、7は外面をハケメ調整し、2次焼成を受けているから甕と考えられる。1は長径5.4cm、短径4.6cm、厚さ0.9cm、2は長径5.7cm、短径5.2cm、厚さ0.6cm、3は長径3.9cm、短径3.8cm、厚さ0.7cm、4は長径5.2cm、短径5.1cm、厚さ0.8cm、5は長径5.1cm、短径4.9cm、厚さ0.8cm、6は長径5.3cm、短径4.7cm、厚さ0.9cm、7は長径4.8cm、短径4.7cm、厚さ0.5cm、8は長径3.8cm、短径3.7cm、厚さ0.7cmを測る。6は第2トレンチ、他は第3トレンチの遺物包含層内より出土。第Ⅱ～Ⅲ様式。

台状土製品（第18図　9）

9は鉢を伏せたような形状を呈する土製品である。土製品の裾端部は面をもつ。体部は台形を呈し、中空である。上面中央部はわずかに凹む。裾端部径25.4cm、上面径18.4cm、器高17.0cmを測る。器壁は最も薄い裾端部で1.5cm、上面中央部で2.8cmを測る。上面より2.4cm下に半円形のえぐりを相対する2ケ所に入れる。えぐりは最大長6.6cm、最大幅4.4cm、奥行き1.0cmを測る。裾端部はヨコナデ調整し、その際にでた粘土のはみだしが内面に残る。体部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。上面はナデ調整する。また、えぐりにはケズリ痕がみられる。上面にはモミ圧痕が残る。胎土中に石英・長石・角閃石・雲母を含み、色調が淡褐色を呈する。生駒西麓産である。第2トレンチ落ち込み内出土。第Ⅱ～Ⅲ様式。

3．木器

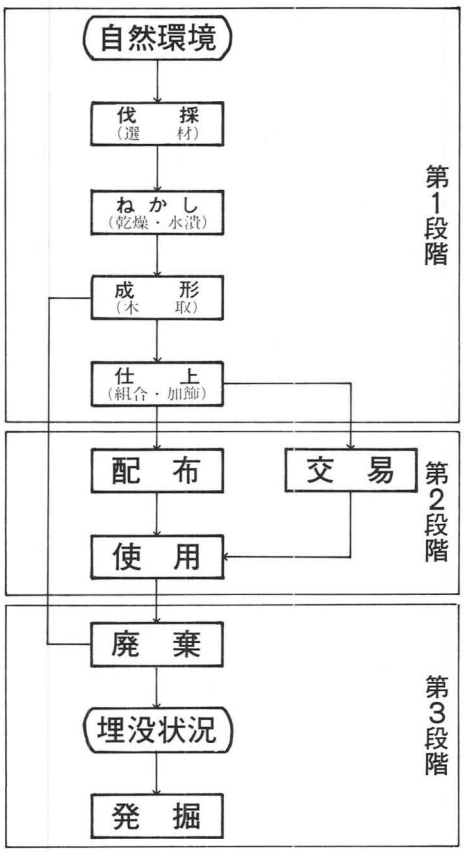
1）研究

出土木器の研究には、土器や石器の研究とは違う顕著な特徴がある。日常使う自然な言語と同じ名辞を用い、型式概念を用いない。端的にいえば、研究は名前当てである。出土した木器は、それが何であるのかという疑問が最大の課題となる。その理由は単純で、出土木器と同じ器物が、現在あるいは比較的近い過去に機能している事実による。つまり出土木器に現在の名辞をかぶせることにより、生きた社会から情報を得る立場をとるのである。

土器研究は、粘土の特性である可塑性がひきおこす変異から、型式学を用いて詳細な編年をうちたてることができる。石器は明らかに死んだ社会の産物であるため、現在の日常の名辞を用いて研究することはできない。しかし、我々は木器の利用において、きわめて古い風習を残しているのだから、出土木器に関して現在の民具を研究するのと同じく、連続性を前提にして研究が成り立つとしたのである。ここにおける連続とは、時間系の連続であるから、民具と出土木器の研究法の違いは、共時論的であるか通時論的であるかの相違となる。そして、民具研究と出土木器研究の決定的に違う根拠を、対象の静態と進化の２面におくことができる。

出土木器が過去のものであることは自明であるから、考古学における木器研究もほんらいこの自明の理から出発しているはずである。したがって、違った時間系の推論対象を制禦することなく単系で操作しても、過去の復原には到達しない。ふるくチャイルドは「民族学対比は、考古学的記録自体での説明をどの方向に求めたらよいかという点に関する手がかりを与えるにすぎない[(1)]」といい、新しくはビンフォードが死んだ社会と生きた社会とにはつなぎ理論の生ずることを力説している[(2)]。生きた社会と死んだ社会をつなぐことはもともとできないわけであるから、考古学としては死んだ社会を復原する目的の資料解釈で、生きた社会を参考とする意味合いであるし、それ以外の立場はないはずである。

第１表　出土木器の作業流れ図



木器が古いかたちのまま現在あるという出土木器研究の前提は、過去の真世界の実体をとらえるうえでは、決定的に重要で固有な意義をもつ。多くの製品がなお現用される木器に関しては、編年的型式学が問題となるのは、もともと限られた分

野でしかない。しかし、型式学が、「文化の変遷は進行中の状態で観察することは出来ない」[3]自明の理に成立根拠を求めたのと同じく、出土木器研究も、型式学的操作をとるとらないにかかわらず、分節的な小区分概念の導入なしで、研究を進展させることはできない。そしてこの場合の小区分として、出土木器の製作から埋没に至る経過を分節することを考えてみよう。

第1段階　使用を意図した製品ができるまで。

第2段階　使用して、廃棄されるまで。

第3段階　廃棄して、埋没し、発掘されるまで。

第3段階は、発掘調査法にかかわるが、それ以前の第1、2段階は、木器がヒトの行動を伴いながら変遷する過程である。その行動は、特有の意志決定の連鎖系であり、つぎのような流れで遂行される(第1表)。

もちろん製品によって、ある特定の行動は必要がなかったり、省略されたりする。そこで、時間系にかかわりなく、製品の名辞を日常言語に合致させる出土木器研究においては、それぞれの過程における行動のみが、比較の対象として残されることとなる。出土品である以上、行動は死んだものであるから、直接知ることができない。行動は、遺物の素材、型態、状況におきかわっているのであるから、行動そのものは、復原によってえられる。

出土木器の研究が、復原された行動にかかわることは、型式学的方法による編年とは違い、過去の真世界の実体を格段にひろく解明することになる。

2)　時代

木器は、第2トレンチと第3トレンチの黒色粘土層から出土した。2つのトレンチとも黒色粘土層は間層をはさんで上下2層あるが、木器を出土したのはそのうち下層の黒色粘土層である。この黒色粘土層は木器のほか多量の弥生土器を包含し、土器型式をもって木器の年代をあてることができる。この層は、微量の弥生時代前期の土器を包含するが、弥生時代中期前半の土器が圧倒的に多く、なかでも中期初頭の畿内第Ⅱ様式が優越している。これは第2トレンチ、第3トレンチに共通しているので、出土木器をほぼ弥生時代中期初頭の所産に位置づけることができる。

3)　問題点

木製資料には、調査地で加工の有無を認定できないものが多いため、杭をふくめて、出土したすべての樹木を持ち帰り、水洗した。この作業によって加工痕のある樹木をすべて抽出できたが、整理の途時に出土地の混乱が生じた。その例に関しては、本文中に第2トレンチか第3トレンチか出土地点の帰属が明記してない。

出土木器の研究は、死んだ社会の行動の復原にあるから、多原理的なmulti disciplined研究法が必要とされる。植物学の樹種分類は、出土木器において有益な情報をもたらす[4]が、すべての資料にわたって樹種同定が実施されていない。この点、問題把握に制限がある。

さらに経験不足から、木器の木取りを誤まって復原したものがあるかも知れない。資料は水漬で保管されており、保存乾燥処理した出土木器に比べて、一般的に年輪が不鮮明である。この点にも批判を乞いたく思う。

4) 出土木器

出土木器には1から順次個体ごとに番号を付している。挿図と図版の数字は、個体番号であり、本文もこれに従う。

腰掛（図版20ノ1、第19図1）　材はクスノキ。第2トレンチ出土。一木造りの小型の腰掛。台部の下に双脚を削り出す。1つの脚がまるごと折れた状態で、全体の3分の2ほどが残存する。台部の平面は長円形で、長径20.0cm、短径は現存長11.6cm(復原で約15cm)。高さは8.1cm。脚は長軸に平行して、外開きに削り出す。台部上面は平坦であるが、使用による磨耗が著しい。台部下面は周縁を削り落し、全体の厚みより薄く仕上げて、面どりする。下面は粗雑で、刃縁の平行条線を削除せず、削り痕を明瞭に残す(図版25ノc)。削り痕は、木製高杯の脚内面のノミ痕とは違っており、段状の凹凸はない。

木取りは、確心はないが、全体の印象と折れ具合から、横木取りとみられる。心持ち材ではない。

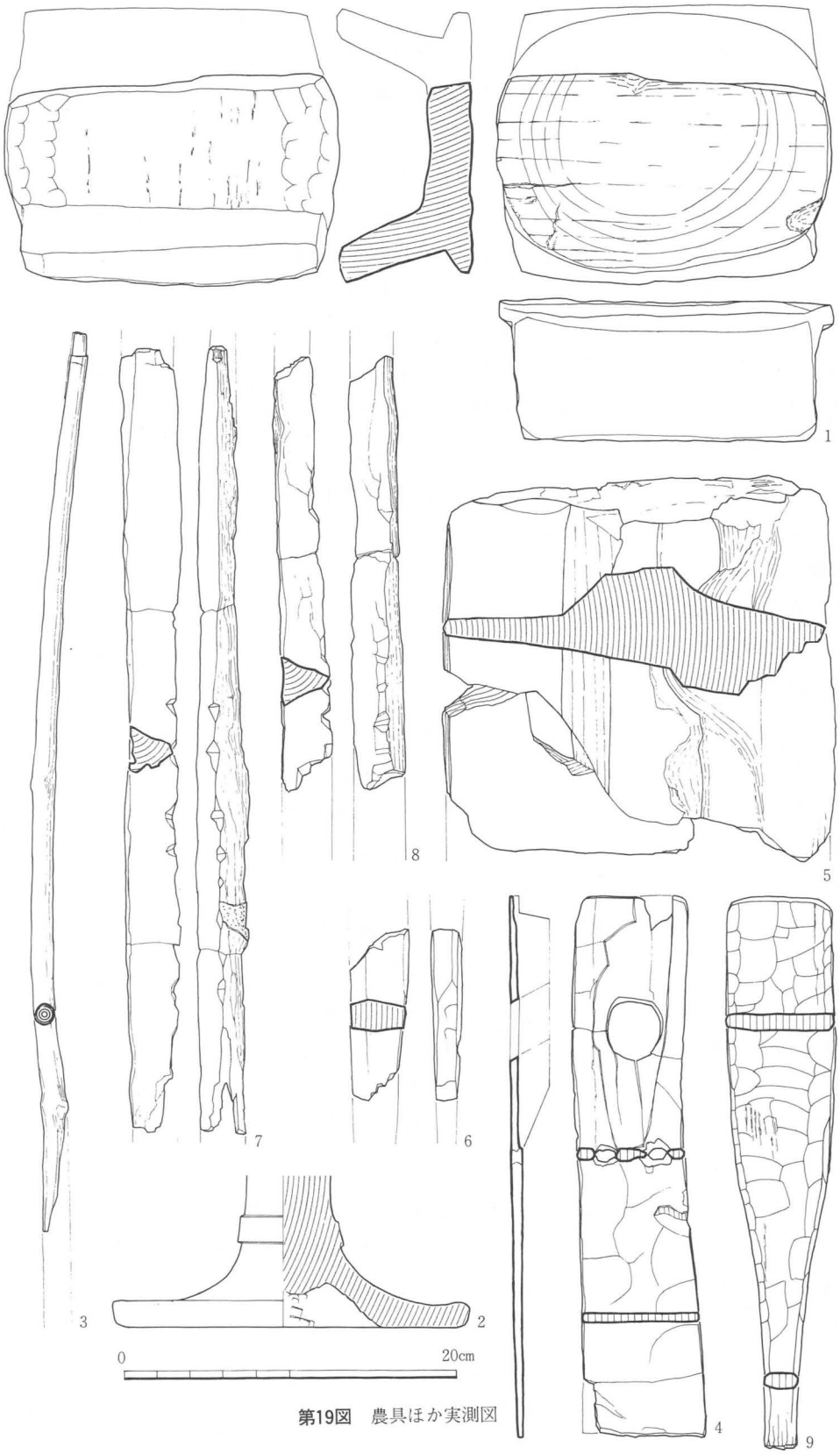
弥生時代の腰掛には、本例のような一木造りのものと台部と脚部の組合せからなる寄木造りのものとがあるが、古墳時代の埴輪や模造品から推定される背もたれのつく例[5]は、知られていない。一木造りと寄木造りの腰掛は、脚の位置が長軸に平行するか、直交するかの違いがある。静岡県山木遺跡、登呂遺跡では、寄木造りと一木造りの腰掛が共伴しており[6]、分布差があるとは思えない。別々の機能があるかどうかは判らない。

高杯（図版20ノ2、第19図2）　材はケヤキ。第2トレンチの落ち込み上部で検出した。杯部は欠失するが、脚部は全周が残る。折れ面に枘穴がないので、一木造りの高杯である。脚部の裾は大きく広がり、端部は丸く厚みをもたせる。脚中央には、幅広い突帯1条を削り出す。脚部の直径21.3cm、突帯の幅1.4cm、削り出しの高さ0.3cmである。横木取りである。

外面は丁寧に磨き上げるが、突帯の段の削り痕は不連続で、横挽きろくろによる成形ではない。脚の内部は平滑でなく、削り痕が顕著である。ほぼ1cm間隔のノミのあたりが段状に残る。内部中央に半球状の削り残しがあるが、中心軸とは一致しない。大阪府恩智遺跡の木製高杯も脚内部に半球状の削り残しがある[7]ので、これで完成品であったと判断する。

突帯は、弥生土器の器面装飾に多用されるが、木製容器にもみられる。畿内中心部では、土器の突帯装飾は前期で衰退するが、木製品の本例は中期初頭にくだる時期である。ほかに愛知県朝日遺跡で出土した木製高杯2例にも突帯が削り出され、うち1例は貝田町式土器と共伴した[8]事実から中期中頃まで古い装飾が木器に残ると考えたい。

大阪府恩智遺跡から出土した木製高杯11点は、すべてヤマグワを使っている[9]が、本例はケヤキである。鬼虎川遺跡と恩智遺跡のほぼ中間に位置する大阪府山賀遺跡の木製高杯は、ヤマグ



第19図　農具ほか実測図

ワとケヤキの両種がみられる。[10] 鬼虎川遺跡と恩智遺跡は、ともに生駒山西麓に位置し、植生の顕著な違いがあったとは思われない[11]から、選材の違いは注意されてよい。資料の増加をまって、検討される課題と考える。

ケヤキの容器は、現在でも白木のまま用いられることが多い。加工に適した材質と独特の木目の美しさが珍重されるのである。しかし弥生時代にケヤキの木目を珍重する風習があったかとなると、大変疑わしい。さきの山賀遺跡や奈良県唐古遺跡から出土した弥生時代前期の木製高杯は、ケヤキ製であるにもかかわらず、木葉文様が赤彩されている。[12] 木目そのものの美しさに気づくには、やはり時間がかかったものとみられる。

弓（図版21ノ３、第19図３）　材はカヤ。第３トレンチの溝から出土。丸木弓の断片で、中頃で折れる。現存長53.6cm。断面は円形で、最大径1.4cmを測る。心持ち材を使い、樺巻き、樋状溝、塗彩を加えない、白木の簡素なものである。

弭（第20図３）は、若干欠損するが、本体より両側を１段浅く彫り窪める。張の長さは、1.5cm。下文で述べるが、本例は実用の弓としては、もっともきゃしゃな部類である。

狭鍬（図版21ノ４、第19図４）　材はカシ。第３トレンチ出土。ほぼ完形を呈する狭鍬の刃先である。全長31.9cm、幅7.2cm、厚さ0.7cm。頭部に直径3.0cmの柄穴がある。舟形の隆起部は折れて、剝落する。弥生時代の狭鍬で、諸手でないものは、通例段の顕著でない低い隆起部を柄穴の周囲に造り出す。しかし本例は剝落の痕跡からみて、平鍬のごとく高い隆起部を造り出したと推定する。裏面の柄穴の下に、斜め横方向の圧痕（図版25ノd）がある。埋没後の土圧によるものか、使用中のものか断定できないが、大阪府安満遺跡出土の狭鍬の裏面にも同様の圧痕がある。[13] 木製広鍬に多くみられるゲタや蟻じゃくりに相当する結縛痕ではないかと推定する。

柄穴の下に、直径１cmほどの双孔がある。孔間は芯芯で、3.5cm。位置としては、ちょうど舟形隆起の先端にあたり、左右１対の配置となる。鍬にはしばしば柄穴とは別に、小さい双孔を穿つものがある。位置は、柄穴の左右に配するのが通則で、本例のように柄穴より下に穿つ例は、稀有である。ほかに兵庫県長越遺跡から出土した鍬に、柄穴の下に小孔をみる[14]（第25図2）。欠損しているが、ほんらいは双孔であったと推定する。鬼虎川遺跡のような狭鍬の場合、柄穴の左右に穿孔場所が確保できず、そのため下方にずらしたものと思われる。長越遺跡の例は、欠損品であるため断言できないが、狭鍬であった可能性も考えておきたい。

広鍬の未製品（図版21ノ５、第19図５）　材はカシ。第２トレンチ出土。幅23.0cmの厚い板で、中央に隆起部がとおる。２片に大破しており、現存長22.9cm。広鍬の未製品と推定する。裏面は、割り面であり、加工はない。頭部は表裏２方向から切断した木口であるが、他端は折れて欠失する。台形断面の隆起部の高さは、3.0cm。隆起部右辺は、木目にそった割れ口で、整形の削りはなされていない。全体の断面形はほぼ菱形であり、ミカン割りをした原材に、隆起部を削り出しながら、平坦に仕上げる工程を示す。

鍬の未製品の木口は、垂直のものと中央に稜の高まりのあるものとがある。後者は、表裏２面から切削するもので、奈良県唐古遺跡の例[15]をはじめ、類例は多い。垂直の木口は大阪府安満

遺跡の鍬未製品にみる[16]もので、切削面ではなく、割り面のようにみえる。鋸が出現する以前に、厚手の板材を垂直に切断するには、下文で述べるように独特の行動がとられたのである。

農具の１部か（第19図６）　材はおそらくカシ。第３トレンチの溝から出土。角柱が両端で折れたもので、四周を削る。現存長は、10.3cm。

どのような木器の１部か判らないが、材質と形状からすれば、九州地方の弥生時代前半期に例の多い又鍬(あるいは又鋤)の刃先に似る。しかし畿内地方では、歯数の多い、円形断面の歯をもつ小型の又鍬しか知られていないので、比較には問題がある。ほかに可能性として、農工具の柄が考えられる。大阪府亀井遺跡から出土したタテ斧の柄は、握りの部分が通例と違い矩形断面に仕上げられている[17]。しかしこの類例は乏しく、比較にはなお問題がある。

刻目のある棒（図版21ノ７・８、第19図７・８）　２点出土した。同一個体の可能性もあるが、接合しない。材は、ともにカシ。第３トレンチの溝から出土。断面が三角形の棒の稜上に細かい刻目を切り込む。ともに両端は欠失する。７の現存長は46.9cm、８の現存長は25.7cm。ともに一辺３cmほどの正三角形の断面をし、１面は樹表である。側面は割り面のままで、切削した痕跡はない。７に８つ、８に４つ刻目が現存する。間隔は一定しないが、平均値をとると７で2.1cm、８で1.7cmである。

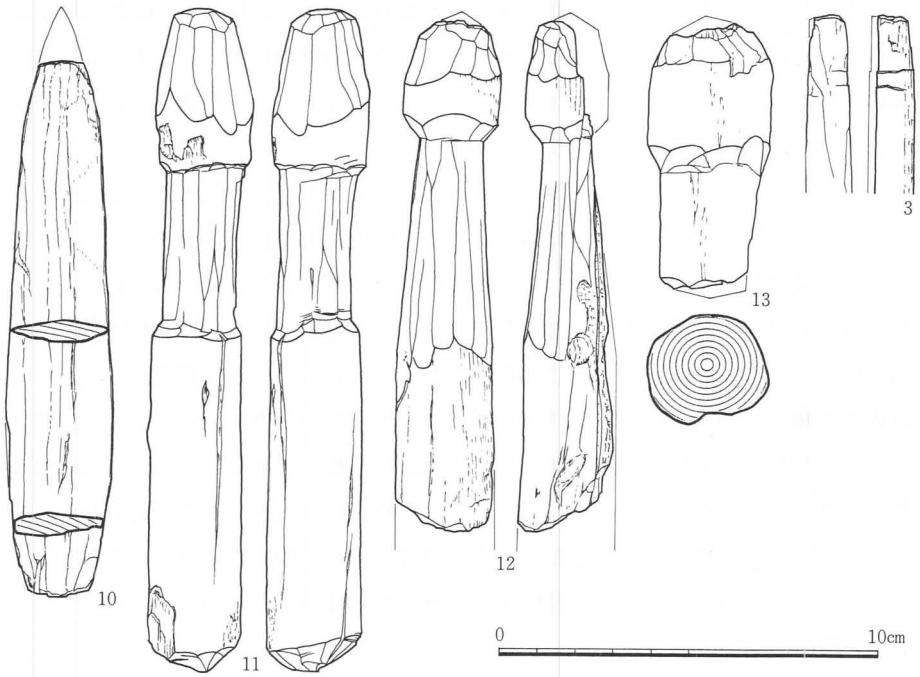
用途に関しては不明であるが、可能性として編台の目盛板を推定しておきたい。静岡県伊場遺跡から出土した奈良時代後半の編台は、現在の俵編機と変らない精巧なものである[18]。弥生時代の確実な例としては、愛知県南木戸遺跡と朝日遺跡の報告例がある[19]。板の側端に刻目を入れたもので、ともに体部には角孔が並ぶ。報告書は、部材を編台に転用したものと推定したが、２例とも同じ位置に角孔があるので、転用品とは見なしがたい。京都府上久世遺跡から出土した１例[20](第25図1)は、弥生時代終末以降の所産といわれるが、鬼虎川例との関連で注目される。端部は矩形断面であるが、体部は鬼虎川例と同じく三角形断面に仕上げ、稜上に刻目を入れる。槌の子が出現する弥生時代終末以前には、きわめて稚拙な棒が編台の目盛板に使われたと推定する。

羽子板状木器（図版20ノ９、第19図９）　材はヒノキ。第２トレンチ出土。玩具の羽子板の形状をした木器で、扁平な体部と細長い柄からなる。体部と柄の境界は、段をなさず、なだらかな曲線に仕上げる。厚さは、体部、柄とも同じく、1.0cm。柄頭の裏面に斜めに削げた面があり、原材時の割り面なのか、ほんらい製品の突起部の折れ面なのか判らない。先端部の１面は、使用による磨耗が強く認められる。

武器形木製品（図版20ノ10、第20図10）　材はコウヤマキ。第2トレンチ出土。板目材を木葉のかたちに削る。先頭部は欠損するが、ほぼ完形である。現存長14.1cm(復原長約15.5cm)。最大幅2.8cm、厚さ0.6cmである。側縁の形状は凸線で、断面は杏仁形、基部は凸基に造る。明瞭な鎬はなく、基辺と基部両側縁は面どりする。

同形の石製品に、打製石槍と鉄剣形石剣の一種があって、畿内式尖頭器と汎称する[21]。本例は畿内式尖頭器を忠実に模作したもので、祭祀具と考えている[22]。

有頭木器（図版20ノ11～13、第20図11～13）　３点出土した。11、12は第３トレンチの溝

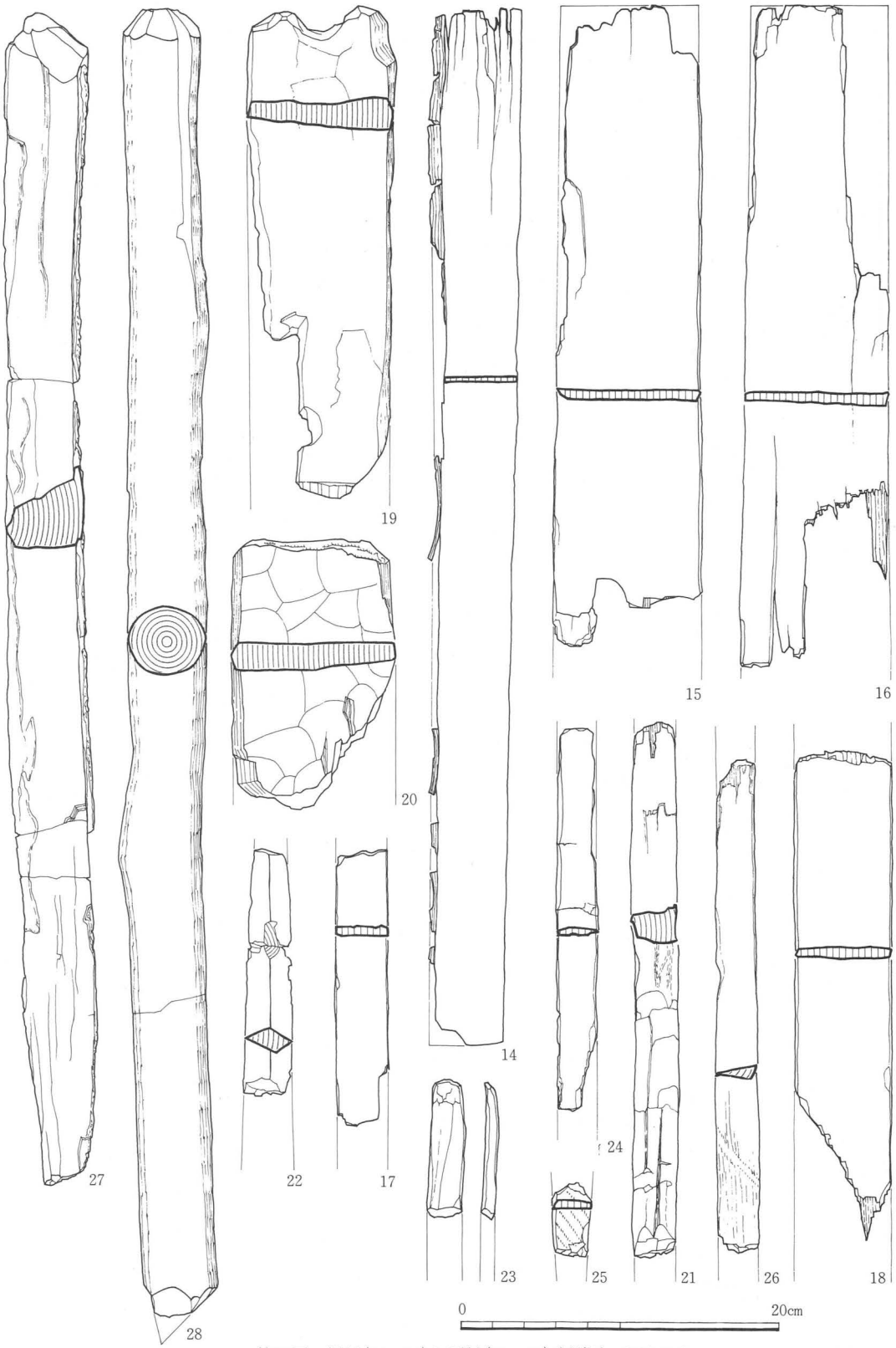


第20図　武器形木製品(10)・有頭木製品(11～13)・弭(3)実測図

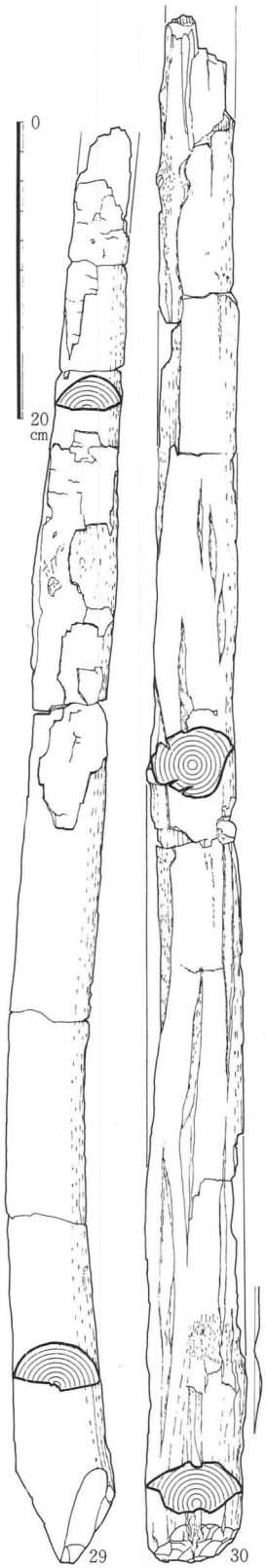
から、13は第２トレンチの出土である。11、12はともにサカキで、心持ち材。13は樹種未鑑定であるが、同じく心持ち材。11は完形品で、全長17.5cm、そのうち頭部が4.2cm、頚部が4.2cmである。体部の直径は、2.4cm。12は体部が焼失するほか、頭部も若干欠損する。体部径2.6cm、全長は不明だが、現存で13.5cm。13は、11、12に比べて著しく腐食する。全長7.0cmであるが、転用品かも知れない。３例それぞれ頚部の造りに違いがあるので、同一の用途に供したものかどうか判らない。12はほんらい長い棒の可能性もあり、ちきりの１端とみれなくもない。11は短小であり、ちきりや「有頭棒」としてすでに報告のある例[23]と比較できない。男根を象る祭祀具の可能性があるが、この場合もう少し写実性がないと断定できない。

板材（図版22、第21図14～26）　細板と厚板とがある。厚さ１cm以下のものを細板とし、厚板と区別する。細板は、すべて第２トレンチから出土した。細板14は、ヒノキの柾目板。全長64.0cm、幅4.5cm、厚さ0.4cmで、資料中もっとも薄く仕上げた板である。側縁には、樹皮を残す。細板15は、ヒノキの柾目板。現存長39.7cm、幅9.5cm、厚さ0.7cm。細板16は、ヒノキの柾目板。トレンチの矢板で切断したため、現存長60.0cm、幅9.0cm、厚さ0.7cm。細板17も、ヒノキの柾目板である。現存長17.4cm、幅3.3cm、厚さ0.7cm。細板18も、ヒノキの柾目板である。現存長30.8cm、幅6.0cm、厚さ0.7cm。以上の細板は、すべてヒノキを用いており、スギが選材されない事実は注目に値する。15と16は幅と厚さが等しいので、規格品と考える。ほかに17と18の厚さが等しいので、15～18の４点は同一用途に供したものと推定する。細板の面は平滑で、鉄製ヤリガンナが仕上げに使われた可能性が高い。

厚板19は、カシ。第２トレンチから出土した。表裏とも大きな割り面で、部分的にちょんな



第21図　板材(14～26)と原材(27・28)実測図；27は×2



第22図　棒材実測図

痕と思われる形跡がある。現存長21.6cm、幅9.4cm、最大厚2.2cm。狭鍬の原材としても使える。厚板20は、ヒノキの柾目板である。第３トレンチの溝から出土。ちょんなで面を仕上げて後に、木口を両面から切断する。他端は火中して、焼失する。現存長15.7cm、幅10.0cm、厚さ2.0cm。

第21図21は角材で、割り面を部分的に削る直線刃の痕跡がある。22～26も、板材というよりは棒材であり、削り痕のない割り面からなる。26には、斜め方向の当り痕がある。22、26は火中している。

特種な厚板に第23図31がある(図版21ノ31)。材は、ムクノキ。第２トレンチから出土した。全長32.6cm、現存幅15.9cm、最大厚4.9cm。裏面と１側辺は割り面のままであるが、側辺は不為の折れによる可能性が高い。木口は、ノミや片刃石斧を思わしめる利器で切断する（図版25ノa)。対向する木口と側辺を孤状に削る。裏面が割り面のまま放置されているのは、槽として刳り貫くためであろうか。

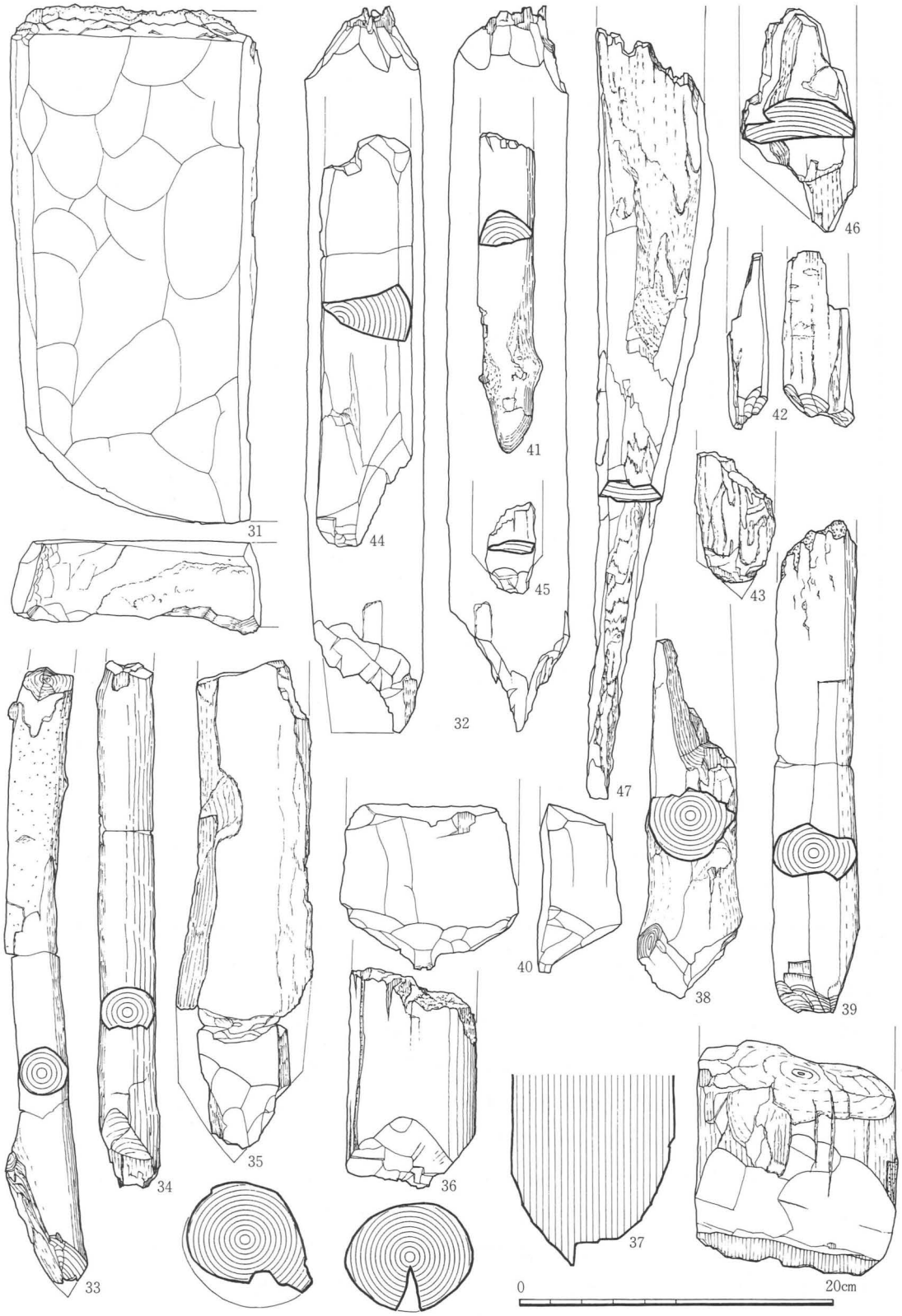
角材（図版21ノ27、第21図27）　材は、カシ。第３トレンチ出土。今回出土した木器で、最大のものである。全長146.7cm、最大幅9.3cm、最大厚9.0cm。丸太をミカン割りした原材で、樹皮を残す。木口の１端をオノで切断するが、他端は折れ面のようである。側面は割り面のままで、加工痕はない。樹心部を割り落す点は、注目される。

丸太（図版21ノ28・30、第21図28、第22図30）　第21図28は、樹幹の両端を切断した丸太で、全長82.5cm、径は5.0cmである。両端の切断痕は、円錐状である。樹皮を剝したままの白木の材であるが、部分的に火をうけた形跡がある。

第22図30も、丸太としておく。材は、シイノキ。第３トレンチの溝から出土した。１端は折れて欠失するが、もう１端はにぶい円錐状の切断痕をもつ。現存長104.0cm、径はほぼ６cm。端部近くに、斜め横方向の圧痕がある。心持ち材であるが、全体に腐食が進んでおり、外表はかなり剝落している。

半截材（図版21ノ29、第22図29）　材は、カシ。丸太を樹皮のついたまま半截したもの。第３トレンチの溝埋土から出土。裏面は割り面で、刃物のあたった形跡はない。先端は、尖った切断痕であるが、杭としてはきゃしゃであるから、原材に用いるものとみられる。尖った切口は、半截以前の丸太の段階のものとみられ、半円錐状である。

丸棒材（図版23ノ32、第23図32）　第３トレンチの溝から出土。丸太に比べて寸が短かく、全長45.5cm、径7.5cm。樹皮を除去して、両



第23図　原材(31・32)と杭(33～47)実測図

第2表 杭一覧表

第23図	出土地区	樹　種	木取り	最大径(幅)(cm)	現存長(cm)	備　考
33	第3トレンチ		丸　木	3.3	39.2	溝　内
34	第3トレンチ		丸　木	3.5	33.5	溝　内
35	第3トレンチ		丸　木	8.5	30.8	すわったもの
36	第3トレンチ	クスノキ	丸　木	8.0	14.0	すわったもの
37	第3トレンチ		丸　木	12.7	15.0	不　明
38	第2トレンチ		丸　木	5.6	22.7	落ち込み内
39	第3トレンチ		丸　木	5.3	31.4	溝　内
40	第3トレンチ	クスノキ	半　截	11.0	10.6	すわったもの
41	第3トレンチ		半　截	3.6	20.3	溝内　焼ケ
42	第3トレンチ		半　截	4.2	11.2	不　明
43	第3トレンチ		半　截	4.9	8.2	不　明
44	第2トレンチ		ミカン割	5.7	25.5	落ち込み内
45	第3トレンチ		背　板	3.0	5.7	不　明
46	第3トレンチ		背　板	7.2	14.6	不　明
47	第2トレンチ		背　板	7.4	48.2	落ち込み内

端を切断する。1端は全周方向からの加撃で切断し、他端は2方向からの加撃で切断する。

杭（図23・24、第23図33～47）　杭として現位置に打ち込んであったのは、第3トレンチで検出した3例にすぎないが、尖頭のある棒材をかりに杭として扱う。尖頭の加工法と材の木取りから、杭を分類することができる。杭材には、丸太をそのまま使う丸木杭、丸太を半截して使う半截杭、丸太をミカン割りして使うミカン割杭がある。その他尖頭部をもつものに、丸太を六割りしたときに採れる背板back boardがある。弥生時代の背板の小口は、木挽きによる垂直面ではなく、斜めの切口を呈するので、杭との区別が難しい。背板を杭として使うこともできるが、ほんらいは製材に生ずる副産物である。

杭の一覧を別表(第2表)に掲げるが、その他にも2、3点杭として扱うべき加工木をえた。尖頭部の加工法は、次頁で述べる。

5). 出土木器の考察

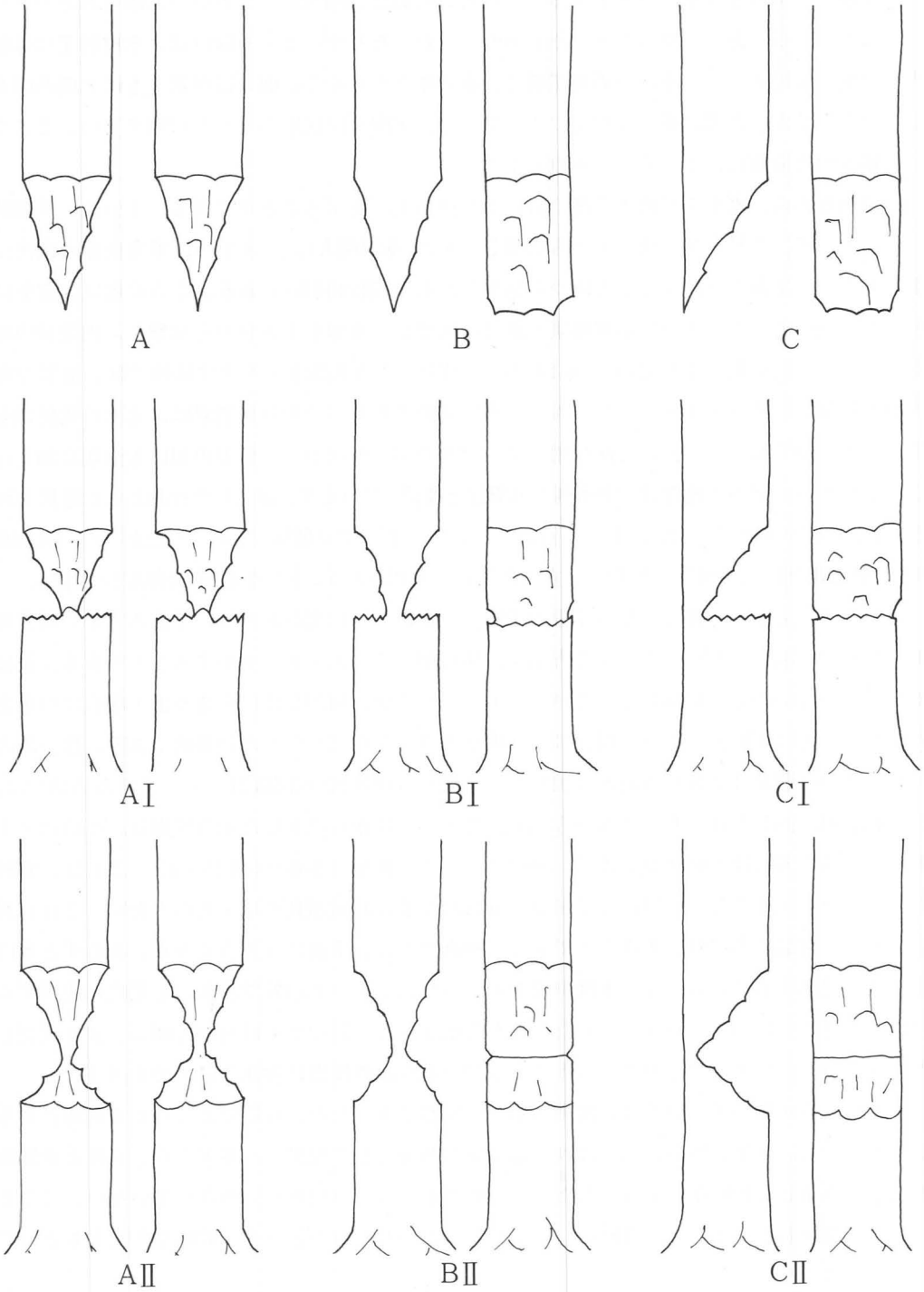
加工痕　素材を加撃して加工するヒト特有の行動は、基本的にはたいへん限られたパターンしかない[24]。折ったり、焼いたり、たわめたり、彩ったりすることを除けば、木材加工には線形の刃先が常用される。そのため加工痕は、面の集合からなる。面には平滑なものと凹凸のあるものがあるが、両者の違いは程度によるもので、実際には区別のしがたい例が多い。ここでは、基本的な分類にかかわることを取り上げたい。

杭の観察から、丸木を切断する削り方には2種類を区別することができる。1つは、円錐状に削るもので、工具を3方向以上から加撃したもの(第24図A)。いま1つは不完全な円錐状に削るもので、工具を対向する2方向から加撃したもの(第24図B)である。この両者は、完全に区別が可能であった。ほかに佐賀県菜畑遺跡の例では、丸木を1方向から加撃し、円錐状の切口をもたない杭が報告されている[25](第24図c)。杭のような尖頭を削り出す器物では、加撃方向の数を基準にして分類することが、もっとも実際的である。この分類基準は、立木の代採にも明らかに有効である。立木の代採行動には、倒木の切口のほかに、根方の切口も分類に加えることができる。根方の処理は、倒木側の加撃法と連鎖しているが、独立した行動として選択されるのは、切口を平坦にしておく(Ⅰ)か、斜めにしておく(Ⅱ)かの2種類である。したがって、倒木側3種、根方側2種、計6種類の行動が、立木の代採に選択されることになる(第24図AⅠ～CⅡ)。

ところで、尖頭を必要としない厚板の切断は、どのように実行されるのであろうか。材を垂直に截断する場合、もっとも正確な方法は、槌を用いてソエアテウチをすることである。鋸は知られていないので、問題とならない。ソエアテウチは、精巧な仕口を造り出す場合に頻用されるが、たんに切断するだけの場合には、衝撃力の点からフリウチが効果的である。出土品のうち、鍬の未製品は表裏2方向から加撃し、厚板から切り放つ(図版21ノ5)。そのため切口は、三角状に張り出した稜をもつ2面からなる。鬼虎川遺跡から出土した別の厚板は、小口にノミ痕もしくは片刃石斧の痕跡が顕著で、斜行フリウチが観察できる(図版25ノa)。これは、右利きのヒトが右上から左下に斜行して加撃する自然な手の回転運動を示すものである。これに対し、鍬の未製品の木口は、垂直ウチである。垂直ウチは、手前に力を引くから、おのずと木口が下方に突出することになる。木挽や槌を用いるソエアテウチ以外で、木口を垂直に成形するには、垂直ウチに加えて斜行ウチがなされたと推定する。斜行ウチは対向方向に、より直交した力を連続して与えることができるから、木口の垂直面の作出に頻用されたであろう。

弥生時代の木器の加工痕では、使用利器が金属器であったか、石器であったかを問題とすることができる。金属器特有の刃こぼれが切削面の凸線として現出する事実から、石斧と金属器を区別する重要な判断基準が示されたが[26]、今回の木器はこの観点から精査していない。ここでは、金属器か石器かといった判断を、よく切れるか切れないかという一般的な所見をもとにして考えてゆきたい。

実験によれば、金属斧と違った石斧特有の効果的な使い方は、つぎの点が肝要とされる[27]。1. 斧頭を柄に堅く着装せず、緩やかに据える。2. 力まかせにおもいきり振り落さず、何度も穿つ



第24図　杭と立木の切断法

ようにうつ。この行動の違いは、当然ながら切口にも反映し、石斧による切断痕は、切削面の多い、全体として鈍ぶいものとなる。[28] 滋賀県滋賀里遺跡から出土した縄文時代の原材は、切削面が多く、鈍ぶい切口をもっており、考古学的にも実験結果を実証している。[29] 鬼虎川遺跡では、こうした例を石斧によるものと考え、ほかに切削面が少なく、鋭い切口のものを金属斧によるものと想定したのである。

福井県鳥浜貝塚は、金属器以前の木器を出土したことで知られるが、ここの杭の切口はさらに興味深い事実を伝える。鳥浜貝塚で発掘された杭の先端は、杭としての機能が疑われるほど「尖らず平端になった」ものから、金属斧の使用を思わしめるほど鋭利で先の尖ったものまで、各様の加工痕を示す。縄文時代の杭に、鋭利なものがあること自体は注目に値するが、報告者が推断したごとく、これは削器による加工痕で、斧による切断痕ではない。[30] したがって石斧と金属斧を比較する議論からは除外して扱わねばならない。そこで、さきの一般的相違をふまえて、鳥浜貝塚の杭をみると、切口に年輪にそった段が多く現われている事実に気づく。この段は、A.年輪にそって剝落した割れとして大きく現われる場合もあるし、B.年輪の夏目と冬目の段として小さく現われる場合もある。こうした年輪にそった段は、明らかに石斧による切削特有の現象である。[31] なぜなら、石斧による刃先は、使用による磨耗がはげしいため、刃縁に細長い面ができ、強い磨擦力が分解され主分力main cutting force方向に異常な力が作用するからである。磨擦で、斜めの切削方向の加撃力が、縦と横に分解され、年輪にそった割れが生ずるのである。磨擦の弱い場合、こうした現象は起らず、斜行ウチをすれば、斜行方向に切削は進む。鬼虎川遺跡の杭やその他の加工痕には、こうした年輪にそった割れはないので、石斧による切断はなかったとも解すことができる。しかし、この現象は、磨擦を少なくすれば解消するから、石斧でも刃先を鋭く研げば、発生しない。じっさい鳥浜貝塚の丸木杭にも年輪にそった割れをみない例がある。

さきに采畑遺跡の報告で指摘された切削面の凸線と、鳥浜貝塚で確認した年輪にそった割れは、ともに石斧使用の重要な判断基準とすることができる。しかしそれでもなお、そうした現象の表出しない事態が石斧にはありうるから、石斧か金属斧かの鑑定にはいぜん難しい問題が残されている。ここでは、切口が鈍く、切削面の多いものを石斧に、切口が鋭く、切削面の少ないものを金属斧にあてる一般的相違から、鬼虎川遺跡においては金石併用の行動をいちおう想定しておきたいのである。

弓　今回報告した弓(第19図3)の全長は判らないので、寸法のうち径をとりあげてみよう。弭に近い径が1.4cmである。

弓身の厚さは、丸木弓の場合でも剝いで角ばった断面の弭を造り出す例も多く、円径の単純な比較におきかえられないが、1.4cmという数値は実用の弓としては最小の部類に入る。これより細い径1.2cmの静岡県登呂遺跡の弓を、報告者は儀器ではなかろうかとしているし、また同じ登呂遺跡の径1.0cmの弓を玩具ないし火鑽臼として扱っている。[32] 知りえた弭の最大径は3.3cmの滋賀県川崎遺跡の弓である[33]が、ほかに弥生時代終末とも古墳時代初頭ともいわれる奈良県石塚

第3表　出土弓一覧表

遺跡名	資料番号	長さ	幅(径)	材質	特徴	報告者	書名	備考
萪内	0016	101.2	2.5	カヤ		工藤利幸	萪内遺跡	
	0017	68.0	2.2×1.8	カヤ				
	0018	(97.6)	2.0×1.9	イチイ	黒漆・樋			
	0019	(93)	1.2×0.9	スギ	樋			
	0020	(104)	1.7	イヌガヤ				
	0021	(68.4)	1.6	イヌガヤ				
	0022	(104.5)	2.1	イヌガヤ				
	0023	(53.5)	1.8	イヌガヤ				
	0024	(73.3)	2.1	イヌガヤ				
	0025	(54.2)	2.2	イヌガヤ				
	0026	(34.2)	1.7	イヌガヤ				
滋賀里	AW 15	(43)	3.0×2.5		漆	田辺・加藤	湖西線関係遺跡調査報告書	(実測図より計測)
	16	(24)	2.5×1.8		漆			
	17	(125)	2.5×2.0					
	18	158	3.0×2.0		樺巻・有溝			
	19	(128)	2.5					
	20	150	2.5					
	21	145	2.5×3.0					
	22	125	2.5					
是川	赤塗 1	130	1.5×0.5		樺巻・樋	保坂三郎	是川遺跡出土遺物報告書	
	2	80	1.4×0.9		樺巻			
	3							
	黒漆 1	128	2.0		樋			
	2	(75)	2.2					
菜畑	03	80.0	2.4×2.0			中島直幸	菜畑	特殊な短弓
	06	(84.7)	3.1×2.0					縄文晩期
	48	(13.6)	1.4×0.9					(儀礼品か)
	49	(20.7)	2.1×1.4					
	50	(23.8)	3.0×1.8					(弓として疑問)
	51	(31.4)	1.9×0.8					(弓として疑問)
	52	(31.8)	1.8×1.6					(弓として疑問)
唐古	81	(60弱)		イヌガヤ		末永・小林・藤岡	大和唐古弥生式遺跡の研究	
	82	(51余)	2.4	イヌガヤ	黒漆・樺巻			
	83	(30余)	3.0	イヌガヤ	樺巻			
	84	(60弱)	2.7	イヌガヤ	黒漆・樋			
森本	第16図12	(73)	3.0			吉本・浪貝・北山	森本遺跡発掘調査概報	
瓜郷	挿図56-56	(55.7)	1.6—1.8	マキ		後藤・久永	瓜郷	
	〃 56-58	(20.4)	1.6—1.3	ヒノキ				植物学者弓否定
篠束(1次)	第22図 1	(20.0)	2.2×1.5	イヌガヤ		紅村　弘	篠東遺跡調査報告書	
	6	(31.5)	1.8×1.4	マキ				
	7	(49.0)	2.5×1.4	マキ				
	8	(57.0)	2.5×1.4	不明	赤漆			
	9	(47.0)	1.8×1.5	イヌガヤ				
	10	(109)	1.8	マキ				
	11	142.5	2.5×2.0	イヌガヤ				
	PL. 13の3の2	(31.5)	2.2×1.6	マキ				
	の5	41.5	2.7×2.0	イヌガヤ				
山賀(その3)	W 16	(28.4)	2.2×1.8	カヤ		上西美佐子	山賀(その3)	
	17	(18.6)	1.2	カヤ				
	18	(70.2)	1.6	カヤ	桜巻			(第86図W19/20混同)
	19	(70.8)	2.8×2.5	カヤ	皮巻			
	20	(74.8)	2.0×1.6	カヤ				
四分	25	(12.5)	1.5×1.2	ヒノキ		山中・千田	飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅲ	
池上	W20- 1			カヤ	赤漆	小野・奥野	池上遺跡第4分冊の2	
	2	79.5	2.2×2.0	カヤ	皮巻			
	4	52.0	1.9	カヤ	樺巻			
	4′	(26.0)	1.0	カヤ	樺巻			(W20-15と同一品か)
	5	(31.1)	2.0	カヤ				
	6	(18.3)	1.8×1.3	カヤ				
	7	(59.5)	2.2×1.9	カヤ				
	8	(30.5)	2.0×1.8	カヤ				
	9	(78)	1.8	クワ	樺巻			
	10	(57.5)	2.3×2.0	カヤ				
	12	(69.0)	2.0	カヤ				
	13	(41.0)	2.6	カヤ				
	14	(17.5)	1.8×1.3	カヤ	樺巻			

第3表　つづき

遺跡名	資料番号	長さ	幅(径)	材質	特徴	報告者	書名	備考
亀井	271	(109.8)	2.4			宮崎泰史	亀井	
	57	(65.5)	2.1			高嶋　徹	亀井・城山	
	58	(56.8)	2.9		樋			
朝日	40	(77.5)	2.2×1.8			石黒立人	朝日遺跡Ⅱ本文編2・図版版	
		(26)	2.2×1.2					
		(33.1)	2.2×1.2					
		(30.8)	2.7×2.3		樋・赤漆			
		(91.1)	2.2×1.8		黒漆			
		(80.7)	2.0×1.8					
	39	(103)	2.8×2.4		樋・赤漆			
		(9.4)	2.3×2.1		樹皮巻			
恩智	45	52.5	1.5	カヤ		毛利光用子	恩智遺跡Ⅰ	
	46	37	1.8	カヤ				
川崎		102.3	3.3		樺巻	大江　傘	国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書	
大中の湖南		276	3			水野正好	大中の湖南遺跡	
鹿部東町		87.5	2.5			高橋　徹	鹿部山遺跡	
登呂(1次)	29	(19.9)	1.2	スギ	樺巻	大場磐雄	登呂前編	儀器か火鑽臼
	57	(46)	2.0	イヌマキ				
	58	(30)	2.5	イヌマキ				
	59	(57.5)	2.6	イヌマキ				
登呂(2次)	69	(49.0)	2.5	イヌマキ		後藤守一	登呂本編	
	70		1.0	イヌマキ				玩具か火鑽臼
	71	(74.0)		イヌマキ				
山木(1次)		(20)	2.2×2.5	イヌガヤ		後藤守一	韮山村山木遺跡	
		(93)	2弱					
		(53)						
千種	挿図16—22	61.6	1.2	ハイイヌガヤ	黒漆	新潟県	千種	(実測図より計測)
	〃 16—23	(40.8)	1.2	ハイイヌガヤ				
	〃 16—24	74.4	2.0	ハイイヌガヤ				
	〃 16—26	(60)	2.8	ハイイヌガヤ				
	〃 16—29	(38)	2.0	ハイイヌガヤ				
伊場		(120.5)	1.9	イヌガヤ				
石塚古墳周溝		174.8	7.6×3.6			石野・関川	纒向	天秤棒
辻		5.8	0.9		黒漆			
タテチョウ	第62図 3	174.5	2.5	カヤ		三宅博士	タテチョウ遺跡発掘調査報告書	
那珂深ヲサ	W20	(38.3)	2.3×1.4	アワブキ属		飛高・力武	那珂深ヲサⅡ　1982	弓形木製品
	21	(8.4)	2.3×1.8	シイノキ				弓形木製品
	22	(7.2)	2.1×0.8	シイノキ				弓形木製品
	23	(12.9)	1.7×1.6	カシ				弓形木製品
	24	(51.7)	2.4×1.9	アワブキ属				弓形木製品
	25	(46.7)	2.3×1.9	アワブキ属				弓形木製品
	26	(78.7)	2.2×1.8	アワブキ属				弓形木製品
産土山古墳		126-123	2.1×1.8	マユミ		梅原末治	竹野郡竹野産土山古墳の調査	
			2.1					
七廻り鏡塚	第12図 1	(182)	3.0			大和久震平	七廻り鏡塚古墳	
	2	(185.3)	2.7					
嶋	第47図 1	90	1.5			柏倉亮吉	嶋遺跡	
	2	(52)	1.5					
	3	54	1.5					
辻地区		(74.3)	2.2×1.0			石野・関川	纒向	柾目・弓形木製品
		(23.1)	1.7×0.9			石野・関川		柾目・弓形木製品

注

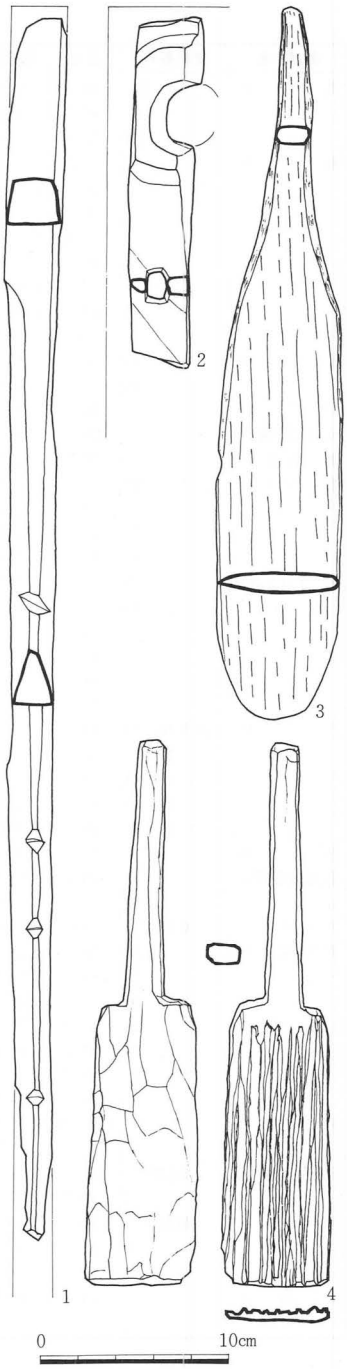
一覧に示した以外に奈良県唐古遺跡には、加飾のない丸木弓が多数ある。

縄文時代の福井県鳥浜で弓として認定された木器は、なお疑問品の混入もあるので、集計から除外した。その他計測値の未公表の資料も多く、文献の検索も十分でなく遺漏があろうと思う。大方の御教示を賜りたい。長さ欄の(　)内は、破片長である。

古墳の周溝から出土した径3.6cmのものがある。[34] 石塚出土例を報告書は天秤棒ではないかと疑っているが、数値を集計しても、3.6cmの厚さは異常で、弭部寸法の正規の分布からはずれる。[35]

小さいものでは、愛知県瓜郷遺跡から出土した1.3—1.6cmの例[36]があるが、ヒノキの割材を使ったもので、植物学者は弓ではなかろうとしている。時期が下るが山形県嶋遺跡で出土した弓は、径が1.5cmと小さく、うち2例は完品で、長さが54cmと90cmとを測り、それぞれ短小であったことが判る。[37] 大阪府恩智遺跡から出土した弥生時代前期の弓も径が1.5cmと小さいが、[38] 長さはさほど短くなく、復原で恐らく1m を越えるものであろう。全長の判る例が少ないので断言できないが、細い弓が必ずしも短小であったとは言えないと思う。

弭に関して、後藤守一はつぎのように主張した。[39]「奈良時代の弓のすべてはこの弭の作りを定型化しているし、その形はすでに古墳時代のものに通有のものとなっている」、いっぽう「弥生時代の弓遺物の弭をみると千差万別、ほとんど定まるもるものがない」ので、「古墳時代以後の弓とは全く趣を異にする」。弭の定型化に関しては、後藤守一の指摘どおりであるが、古墳時代の弭が弥生時代の弭の系譜を引かないと考えるなら、それは誤りである。古墳時代以後の弭は、両側を削り落し段で弓身と区画するものだが、今回報告した鬼虎川遺跡の弭もこれと同巧であるし、大阪府池上遺跡で、報告者がA類と分類した弭の型態[40]が、古墳時代以後の弭と一致する点をみのがしてはならない。また古墳時代の弭金物の祖型は、弥生時代の角製品にある[41]から、古墳時代の弭は、弥生時代に出現したと評価する。縄文時代の弓は、端部に周溝を彫りめぐらし、瘤状の弭をつくる。むしろこうした弭が、弥生時代以後すたれる事実に注意を払いたい。



第25図　比較参考資料

羽子板状木器の用途　正月の風習である羽子突に使う羽子板状の木器(第19図9)が一例出土した。この板は、何に用いられるものであろうか。

遊戯具としての羽子板は、記録のうえから中世以前にさかのぼらないから、[42] 考慮から除外する。ほかにヒトは、羽子板状の器物を、つぎの事態に用いる。

1．北米インディアンは、植物の実を羽子板状の木器で収穫する。パイユート族は、草の種、松の実を、グレート・レイク地方のオジブワ族は通称「野生稲」wild riceの穂を収穫するとき、

羽子板状の打棒で実を脱落させ、容器にうける。[43]

鬼虎川例を、収穫具としての打棒とみることは、全くできないとは思われないが、弥生時代の収穫植物の点からみて、こうした農法を想定するには、現時点で難点が多い。

2．バタンのアミ族は、羽子板状の木器を調理の時の攪伴に用いる。鳥居龍蔵は、粟を煮るときにかき雑ぜると報じている。[44]

弥生時代の前半期は共同飲食の風習が一般的であったと推定されるので、[45]こうした大型のヘラを調理用に使った可能性はある。しかし今回の資料はカシ材からなっており、なぜ調理用のヘラに硬材を用いるのか疑問が残る。

3．製陶に、羽子板状木器を使う。専業の陶工のいない社会でも、当て具と叩き板で土器を成形する技術がある。叩き板には、羽子板に似たものが報告されている。叩き板を使う製陶技術は一様ではなく、シェパードが提唱した土器成形分類に従えば、ⅠA1b、ⅠB1b、ⅢA1a、ⅢA1b、ⅢB1bの事態がある。[46]叩き板は、塊状の厚手のものから、細くきゃしゃなものまであるが、どのような叩き板がどの成形法と組み合うのか特性をまだ抽出できるには至っていない。

叩き製陶技法は、民族誌資料よりも考古資料に広汎に出現する。東アジアに多い印文陶や縄蓆文陶は、叩き板を用いて生産したものである。弥生土器と土師器、須恵器にも叩き目が残り、大阪府東奈良遺跡では、打面に平行の条溝を彫った叩き板の実例(第25図4)が知られている。[47]叩き目をもつ土器は、弥生時代の中期末以後に集中するが、近年に至り弥生時代前期の平行叩き目をもつ少数の事例が、北部九州で知られるようになった。[48]畿内地方でも、奈良県四分遺跡の発掘調査の所見から、叩き技法が中期初頭にさかのぼる可能性が指摘されている。[49]したがって中期初頭の鬼虎川遺跡の木器に叩き板が存在しても、年代的には不都合ではない。問題は、無刻の叩き板が弥生時代にあったかどうかという点であるが、無刻の板を打っても、器面に刻文が残ることはないから、判断材料を欠くことになる。

4．民族誌資料にはないが、出土木器の類似性から農具の可能性がある。材がカシであることも、農具と考えるのに有利である。もっとも近似する類例は、報告者によってふぐしと推定された大分県安国寺遺跡出土の「杓子状木器」である(第25図3)。[50]安国寺遺跡の木器をふぐしと推定した根拠は、おそらく先端部が丸く突出するところから、土掘具として機能を連想したのではあるまいか。鬼虎川例の端部は平坦に仕上っており、この点は土掘具としては機能的でない。しかし安国寺遺跡の「ふぐし」も使用によって、端部が丸くなったと考えられないであろうか。そうであれば、これをふぐしとみることは、なお難点がある。

木下忠は、弥生時代のふぐしとして愛知県篠束遺跡から出土した「剣形木器」と「刀形木器」の2例を指摘している。[51]ともに柄部のほうを、刃部よりも厚手に造り、柄頭に突起を造り出している。ここにいう「剣形木器」は、現在では類例が増加し、その機能に関しても、別柄を結えて、組み合せの着柄鋤とすることが判っている。「刀形木器」なるものも、鋤先の一側縁が折れたものであろう。よし刀形の不対称の刃先でも、弥生時代の長柄鋤には、ごくまれに不対称の刃先をもつ例が知られるので、[52]鋤先であったことに変りはない。鋤の先端は、平坦なもの、丸味を

もつもの、尖頂のもの、それぞれあるが、ほんらいはすく機能にあり、平坦に仕上げ、使用の度合によって変化したと考えておきたい。

組み合せ鋤の着柄法は、各種のものがあったようである。その1つは、鋤先中央に双孔を穿って、柄を結える方法であるが、孔のないものも多い。その場合、長柄と結縛するために、鋤先末端に瘤状の突起を造り出す工夫がこらされる。福岡県鹿部東町遺跡出土の着柄鋤は、孔も突起もないかわりに、紐を固定するための側溝が、鋤先基部に彫られている。[53] 鬼虎川遺跡の羽子板状木器は、長柄を着装するための格別の仕口や造り出しをみないが、可能性として鋤先を想定しておきたい。

注

(1) ゴードン・チャイルド(近藤義郎訳)『考古学の方法』(河出書房　1964年)72頁。

(2) Binford, L.S., General Introduction in *For Theory Building in Archaeology*, New York, 1977.
Binford, L.S., *In Pursuit of the Past*, London, 1983.

(3) 山内清男「縄文土器型式の細別と大別」(『先史考古学』第1巻第1号　1937年。『山内清男・先史考古学論文集』第1冊再録　1967年)。

(4) 樹種同定は、嶋倉巳三郎によって実施されたが、これは氏の好意によるものであって、明記して深謝する。

(5) 原田淑人「日本に於ける倚坐の風習」(日本人類学会編『日本民族』岩波書店　1961年)。

(6) 木下忠「木器」(後藤守一編『韮山村山木遺跡』山木遺跡調査会　1962年)図版第十六。
後藤守一「机と腰掛」(日本考古学協会編『登呂』本編　1961年)挿図第四四。

(7) 毛利光用子「木製品」(瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ　1980年)木器番号60。

(8) 石黒立人「木製品」(愛知県教育委員会『朝日遺跡』Ⅱ本文編2・図版編　1982年)図版37—10。

(9) 嶋倉巳三郎「恩智遺跡から出土した木製品の樹種」(瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ　1980年)Tab. 32。

(10) 嶋倉巳三郎「山賀遺跡(その3)の出土木製品の樹種について」(大阪文化財センター『山賀』その3　1984年)。

(11) 恩智遺跡を花粉分析した安田喜憲は、弥生時代中期の森林開発の結果、エノキ・ムクノキの二次林が形成されたとしている。いっぽう鬼虎川遺跡の那須孝悌による花粉分析は、アカガシ亜属が優占で、二次林要素が著しく低い事実を指摘している。これは集落内でのサンプリングであるので、原材の供給源である生駒山西麓が、照葉樹の極性相であったことは想像にかたくない。
那須孝悌「花粉」(東大阪市遺跡保護調査会『鬼虎川遺跡調査概要』Ⅰ　1980年)。
安田喜憲「恩智遺跡周辺の古環境の復元」(瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ　1980年)。

(12) 上西美佐子「出土の木製品について」(大阪文化財センター『山賀遺跡』その3　1984年)W43・W46。
末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16　1943年)第68図19・20。

(13) 原口正三編『高槻市史』第6巻考古編　1973年　PL.53—501。

(14) 岡崎正雄「木製品」(兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』　1978年)図154—7。

(15) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16　1943年)図版第六九。

(16) 原口正三編『高槻市史』第6巻考古編　1973年　PL.68。

(17) 宮崎泰史(大阪文化財センター『亀井』　1983年)木器番号288。

(18) 辰己均「編台」(伊場遺跡調査団『伊場遺跡遺物編』1　1978年)写真図版第18B。

(19) 澄田正一・岩野見司・大参義一編(『新編一宮市史』資料編二　弥生時代　1967年)図版八五—7。
石黒立人「木製品」(愛知県教育委員会『朝日遺跡』Ⅱ本文編2・図版編　1982年)図版38—12。

(20) 大塚美義(六勝寺研究会『上久世遺跡発掘調査報告』1976年)図版51—2。

(21) 中村友博「畿内式磨製尖頭器」(東大阪市遺跡保護調査会『調査会ニュース』No.17　1980年)。

(22) 中村友博「弥生時代の武器形木製品」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度　1980年)。

(23) 機能を特定しない「有頭棒」という用語は、しばしば報告者に採用される。1例は、平良泰久「古殿遺跡発掘調査概要」　(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1978　1978年)第52～54図。

(24) 身体技法と加工の相関は、アンドレ・ルロワ＝グーランが始めて立論したもので、一部拙訳を試みた。本文中にある片仮名混りの用語は、以下を参照願えれば幸甚である。
アンドレ・ルロワ＝グーラン(中村友博訳)「加撃」(『神奈川考古』第12号　1981年)。

(25) 中島直幸「杭・矢板の加工痕について」(『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第５集　1982年)杭㋖㋡㋥。

(26) 中島直幸「杭・矢板の加工痕について」(『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第５集　1982年)524頁。

(27) Iversen, J., Forest Clearance in the Stone Age, *Scientific American*, Vol. 194 No. 3, 1956.

(28) 石斧と鉄斧を併用して伐採した切口は、顕著に両者の違いを示している。
Carneiro, R.L., Tree Felling with Stone Ax in Kramer, C. (ed.) *Ethnoarchaeology*, New York, 1979. Fig. 1. 8.

(29) 田辺昭三・加藤修編『湖西線関係遺跡調査報告書』1973年　図版五五。

(30) 山田昌久「木工技法の分類」(森川昌和『鳥浜貝塚』1　1979年)。山田昌久「木製品に残された加工痕について」(森川昌久『鳥浜貝塚』2　1981年)。

(31) 森川昌和と山田昌久は、縄文時代の木器が砥石で磨いて仕上げられる事実に注意を払っているが、これは石斧による加工を前提にして始めてよく了解がつく。石斧による切断は、割れが生ずるので、平滑な面をうるには、磨いて調整する以外に解決法がなかったのである。

(32) 後藤守一「木器」(日本考古学協会編『登呂』本編　1961年)木器番号70。

(33) 大江傘『国道８号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』　1971年　図版25。

(34) 辻俊和「木製品」(石野博信・関川尚功編『纒向』　1976年)図135―1。

(35) この器物は全長174.8㎝を測り、長さの点からも弓でない可能性が高い。日本の矢史時代の弓は、土器の線刻画や銅鐸絵画が示すとおり、通例身長を超えない大きさのものであり、長大な弓が普及するのは歴史時代に入ってからであろう。身長より大きいものは、ほか２例があるが、これをもって長弓と短弓の２種類の存在を説くには、資料数のうえから問題がある。

(36) 後藤守一・久永春男編(豊橋市教育委員会『瓜郷』　1963年)挿図第56の58。

(37) 柏倉亮吉『嶋遺跡』(『山形市史』別巻１　1968年)第47図１・３。

(38) 毛利光用子「木製品」(瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ　1980年)木器番号45。

(39) 後藤守一「木器」(日本考古学協会編『登呂』本編　1961年)241・242頁。

(40) 小野久隆・奥野都(大阪文化財センター『池上遺跡』第４分冊の２　1978年)32・33頁。

(41) 中村友博・松田順一郎「鬼虎川遺跡出土の角製品一例」(東大阪市遺跡保護調査会『調査会ニュース』No.14　1979年)。

(42) 羽子突の文献での初出は、『看聞御記』に記する永享４(1432)年らしいが、羽子板の出土器には、鎌倉時代の後半にあてられたものがある。
山内紀嗣「遺物」(下関市教育委員会『長門国府』長門国府周辺遺跡調査報告Ⅱ　1979年)第12図１・２。

(43) フィリップ・ボック(江淵一公訳)『現代文化人類学入門』(三)(講談社学術文庫104　1977年)49頁。

(44) 鳥居龍蔵『紅頭嶼土俗調査報告』1902年。(『鳥居龍蔵全集』第11巻再録　朝日新聞社　1976年)303頁。

(45) 都出比呂志・佐原真による個人別食器の動向に関する発言を参照されたい。
都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社　1982年)。
佐原真「食器における共用器・銘々器・属人器」(『文化財論叢』　同朋社　1983年)。

(46) アンナ・シェパード(中村友博訳)「土器成形法の分類について」(東大阪市遺跡保護調査会『調査会ニュース』No.16　1980年)。

(47) 原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」(高槻市史編さん委員会『高槻市史』第1巻本編1　1977年)図106。

(48) 橋口達也「甕棺のタタキ痕」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　1982年)。

(49) 木下正史(奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ　1980年)155頁。

(50) 乙益重隆「木器及び木製品」(九州文化総合研究所編『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の研究』　1958年)第97図８。

(51) 木下忠「農具」(和嶋誠一編『日本の考古学』Ⅲ弥生時代　河出書房新社　1966年)237頁。

(52) 山口譲治『拾六町ツイジ遺跡』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第92集　1983年)木器番号136。

(53) 高倉洋彰編『鹿部山遺跡』　日本住宅公団　1973年　図版72―2。

4．石器

石器資料は総数93点採集した。このうち打製石器関係の遺物は86点、磨製石器は６点、砥石が１点である。遺物のほとんどは第３トレンチの黒色粘土層から出土している。本石器資料の相対年代の決定は伴出土器に依存する。以下、打製石器に関しては、石器タイプの分類を試み、分類項目の特徴を記載する。磨製石器に関しては、各器種ごとに個別の資料の特徴を記載する。各個体の法量、材質は第４表にまとめた。

1)　打製石器

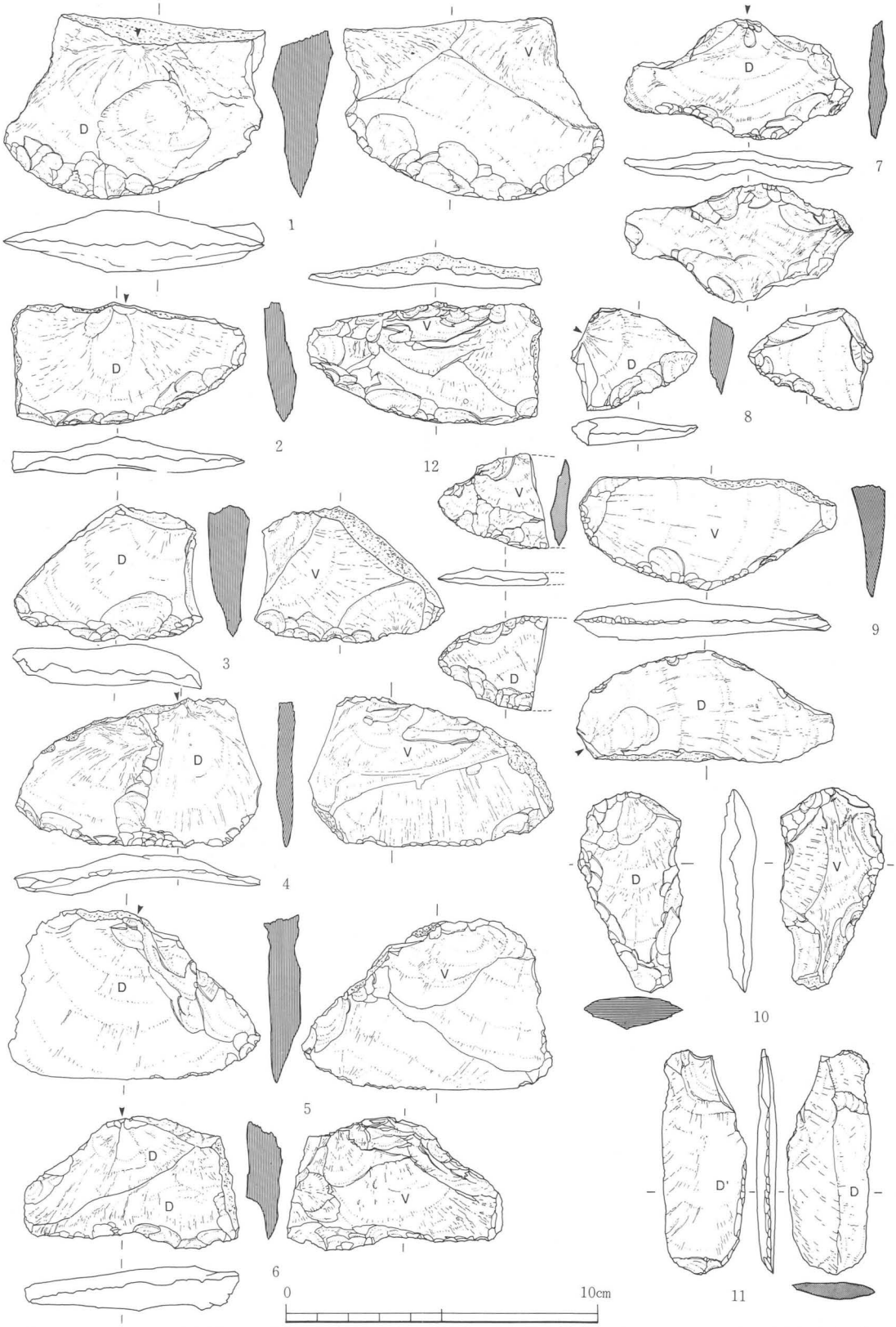
打製石器資料には、削器(20点)、細部調整剥片(６点)、石核(６点)、石錐(１点)、剥片(52点)、搬入石材(１点)がある。これらの材質はすべてサヌカイトであり、二上山産と思われる。

削器　素材剥片の縁辺の一部を連続した細部調整によって、均一な断面形をもつ稜線に仕上げ刃部とした石器。本稿では削器を、１縁辺の刃部細部調整をもつ資料(単に削器と呼ぶ)と、２縁辺に刃部細部調整をもつ資料(複刃削器)に分け、前者はさらに素材剥片の形状によって、横形削器と縦形削器とに区別した。後者も素材剥片の形状で分類できるが、結果的には技術形態論的名称と慣用的名称が重複しそうな資料を含むので適宜それを記載する。

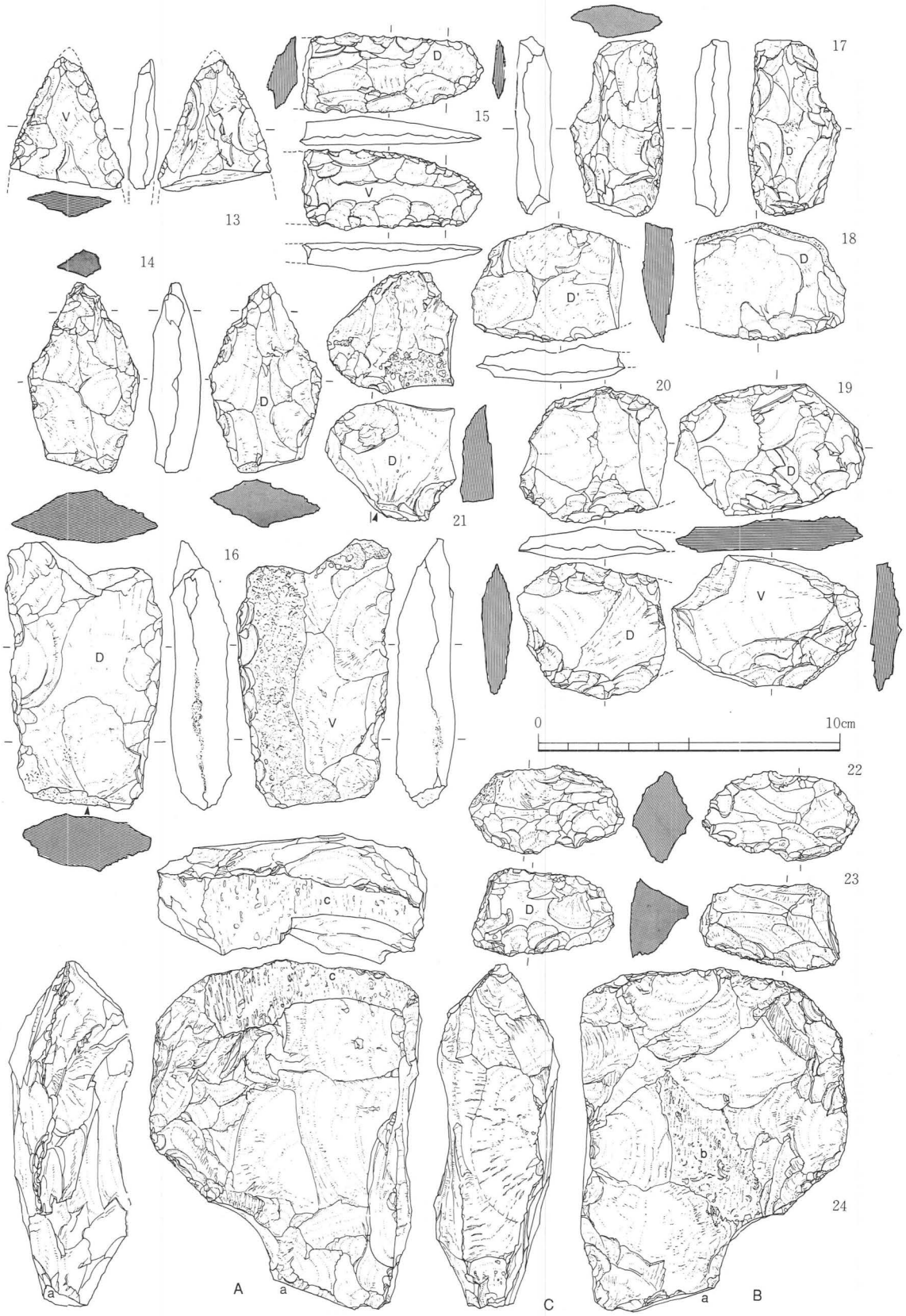
横形削器（図版26－1～8、第26図1～8）　素材剥片の主剥離軸に直交する最大幅が主剥離軸長より長い削器。採集遺物に即していえば、３を除いてすべて素材剥片の打点を残しており、原礫面打面４点、剥離面打面１点(原礫面と接する)、稜状打面が３点ある。表面の剥離痕の観察から本資料群の素材剥片と同様の剥片剥離が同一作業面で少なくとも1、2回は繰り返されていたことが知れる。刃部の形状は凸刃(1～5)が多く、直刃(８)は少ない。屈曲して整わないもの(6、7)もある。調整痕は、薄形～厚形－浅形が多い。

縦形削器（図版27－9～11、第26図9～11）　剥離軸長がこれに直交する最大幅より長い剥片を素材とする削器。９は原礫面に接する剥離面打面で、表面も打面を共有する１枚の剥離痕で構成される。10の表面では主剥離面と同方向の剥離痕とこれに直交する古い剥離痕で構成される。打面は細部調整で失われている。11の素材剥片は奇妙ではあるが表裏ともポジティブな剥離面をもつ。横形の剥片の裏面をさらに表面として剥片が生産されたことを示している。２回目の主剥離面先端には、台石上技法による剥片剥離にしばしばみられる台石からの衝撃で生じた小剥離痕がある。打点は破砕されている。縦形削器の刃部の細部調整痕は概して連続性を欠き、平形～厚形－浅形(9、11はきわめて浅形。使用痕にも見える)である。

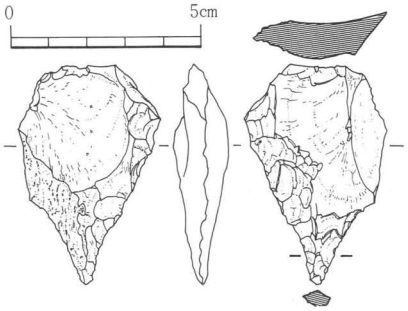
複刃削器（図版26－12・13、図版27－14～17、第26図12、第27図13～17）　隣合う２縁辺(尖端部を形成する場合を含む)、あるいは相対する２縁辺に刃部調整のある資料を便宜的にこのカテゴリーに入れた。素材剥片は、16を除き横形剥片。調整剥離痕は、精粗がある。12・13は比較的連続した平形～薄形－浅形細部調整の刃部をもつ。後者は粗製の尖頭器の破片とも思える。14はその基部であろうか。ただし、側縁の突出部は著しく磨耗し、光沢をもつ。15は石小刀に類する資料である。16は原礫面打面の縦長素材剥片の両側縁から薄形～厚形－厚



第26図　打製石器実測図(矢印は素材剥片の打面。Dは裏面、Lは表面を示す。断面のハッチングはサヌカイトの流理。)



第27図　打製石器・細部調整剝片・石核実測図



第28図　石錐実測図

形～深形の調整を施す。調整部位の稜上と周辺の器表に微細な敲打痕と磨耗がみられる。17ではマイクロフレーキングと磨耗痕が両側縁にみれるほか、裏面側の中央に微細な敲打痕の集中するところがある。以上の複刃削器および尖頭器の調整痕の特徴は、12を除けば、両側縁からの侵形～深形剝離痕が器表を支配的に覆うことである。

細部調整剝片（図版27 - 18～21、第27図18～21）

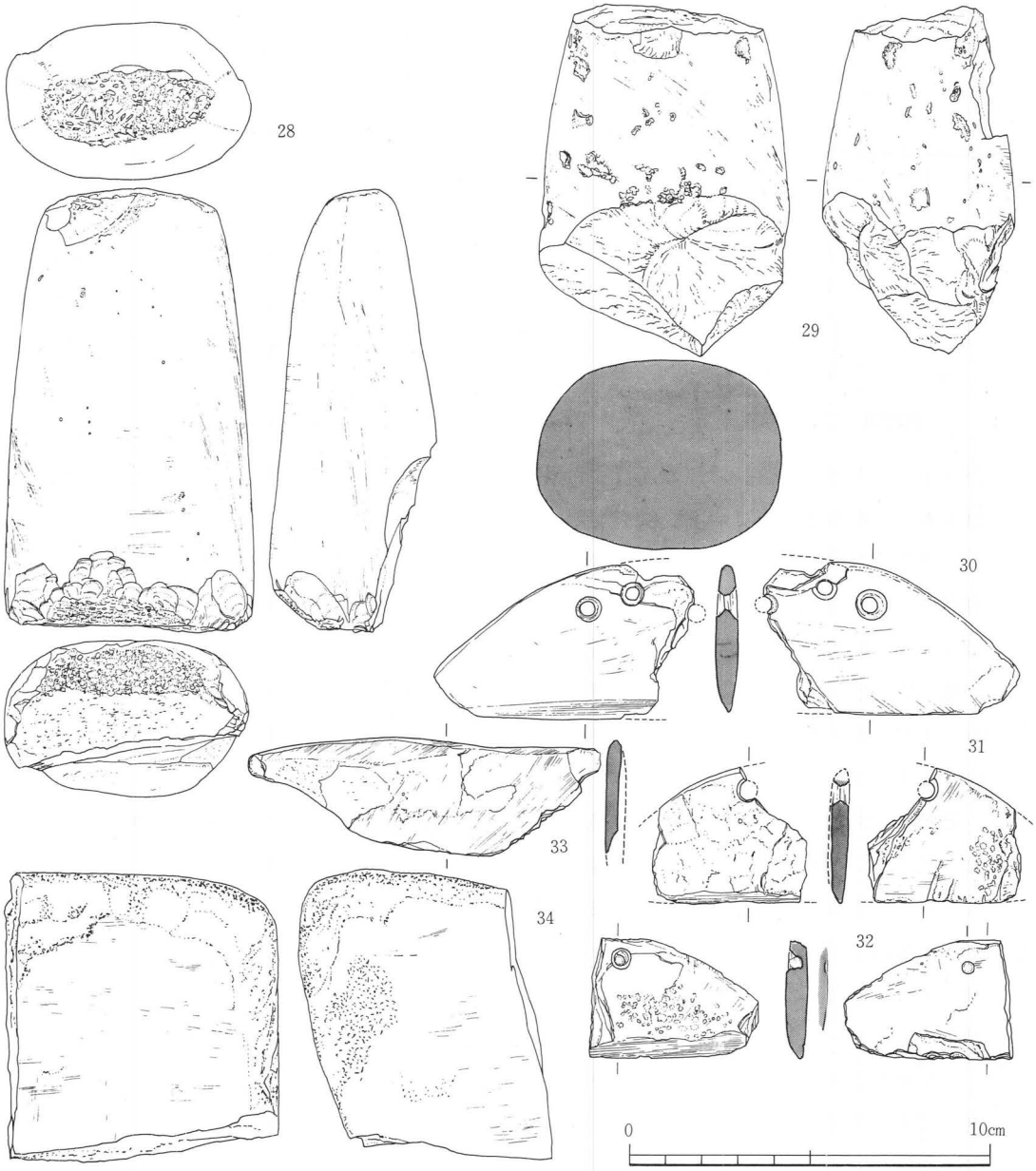
石器タイプには属さないが剝片素材に何らかの細部調整がみとめられるもの。18は原礫面打面の横形剝片素材で、先端部に平形～薄形 - 浅形の細部調整をもつ。側縁が折れている。横形削器の破片ともみえる。表面にも主剝離軸と直交するポジティブな剝離痕をもつ。19、20の素材剝片の形状は不明で打点も失われている。周縁部からの剝離痕には、連続した薄形 - 浅形細部調整のほかに、薄形～厚形 - 深形～侵形細部調整あるいは樋状の剝離痕がみとめられる。旧石器・縄文時代以来の楔形石器に似る。

錐（図版27 - 25、第28図25）　原礫面に隣接する剝離面を打面とする横形剝片を素材とする。素材剝片の端縁と原礫面を残す側縁部に薄形～厚形 - 浅形細部調整を施し、錐の尖端部を作り出す。素材の体部を残しつまみとする。使用痕はほとんどみとめられない。

石核（図版28 - 22～24・26、第27図22～24）　22・23はともに厚手の凸形断面をもつ小さな石核で鈍い稜線がめぐる。この稜線に打点をもつ剝離痕は平形～極厚形 - 浅形～侵形と変化に富む。中央はすでに打点のない比較的大きな剝離面で構成される。長軸方向と短軸方向で向い合う稜線上でとくにマイクロフレーキングや潰れの集中する部分があり、台石上技法との関連が予想される。23は剝片素材。24は図示したa、b、c３面の原礫面とA、B、C３面の作業面からなる石核。

C面側からの打撃でA面の剝片剝離を行った後、B面側からの打撃でC面が作られる。次にC面を打面としてA、B面で2、3の剝片剝離、原礫面cを打面としてB面の剝離、さらに原礫面aまでの間のA、B面への交互剝離を行う。A、B面が稜をなす部分は著しく磨耗しており、使用痕と考えられる。図版の26は２面の剝離面をもつ細長い亜円礫の石核。27は亜円礫の搬入石材。

剝片　紙数の都合で法量と原礫面の有無のみを第４表に示す。また、原礫面の有無と他の石器との重さとの関係に焦点をあて、各資料のランク - サイズの散布図を描いた(第30図)。本資料群に限っていえば、原礫面をもつ剝片とそうでない剝片の平均重量のt検定では、自由度18、確率0.1%で有意差がみとめられた。この２つのグループの差が石器製作作業の進展の違いだと仮定すれば、図示したほとんどの石器が両者の間におさまる。つまり、石器資料の重さは加工程度に応じて整合した関係をもつと考えられる。石器資料に対するランク - サイズ散布図の適合性については稿を改めて検討するつもりである。



第29図　磨製石器・砥石実測図

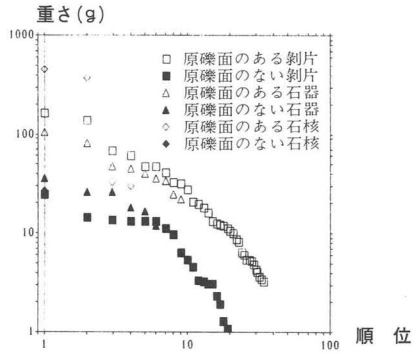
2)　磨製石器（図版29 - 28～33、第29図28～33）

太型蛤刃石斧　太型蛤刃石斧を転用した敲打具(28)、太型蛤刃石斧の破片(29)、石庖丁の破片(30～33)が出土した。28は刃の付く先端部が欠如しており、平坦な破面をもつ。この一縁辺を片減りさせるかたちで敲打痕を残す。基部端面も敲打痕で覆われる。敲打痕の周辺には、使用時に生じた剝離痕がみとめられる。器表には製作時の研磨方向を示す微細な線条痕をとどめる。29は、先端部と基部を欠く破片で、表面に煤の黒ずんだ色あいを残すことから高熱をうけた可能性がある。破面の剝離痕も明瞭な打点がなく、剝離面中央部からフィッシャーが走るので急激な温度変化による差別的膨縮の結果と思われる。器表に点々と残る敲打痕は製作時のものであろう。

第4表　石器資料の法量と石材

番号	器　　種	※長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材
1	横形削器	90.6	63.4	19.0	81.4	サヌカイト
2	横形削器	75.9	39.3	9.4	40.0	サヌカイト
3	横形削器	63.0	47.1	14.4	44.9	サヌカイト
4	横形削器	77.3	47.5	8.7	34.1	サヌカイト
5	横形削器	80.3	54.3	12.5	47.0	サヌカイト
6	横形削器	68.8	42.4	12.5	35.7	サヌカイト
7	横形削器	72.4	37.0	6.9	18.3	サヌカイト
8	横形削器	39.2	31.3	9.2	11.9	サヌカイト
9	縦形削器	83.0	36.3	10.8	32.2	サヌカイト
10	縦形削器	65.6	33.6	12.1	25.1	サヌカイト
11	縦形削器	72.0	26.9	6.2	14.6	サヌカイト
12	尖頭器破片	38.0*	30.1*	5.7	6.6*	サヌカイト
13	尖頭器破片	47.0*	34.1*	9.9	13.7*	サヌカイト
14	複刃尖頭削器破片	63.0	36.4	16.3	35.6	サヌカイト
15	複刃削器(石小刀)	60.6	26.7	9.8	16.6	サヌカイト
16	複刃削器(敲打具)	88.6	51.3	18.0	104.8	サヌカイト
17	複刃削器	58.3	30.9	12.0	26.0	サヌカイト
18	細部調整剥片(直刃削器？)	49.0	38.7	11.2	26.0	サヌカイト
19	細部調整剥片	53.0	46.8	11.7	31.2	サヌカイト
20	細部調整剥片	62.5	43.3	10.7	33.0	サヌカイト
21	細部調整剥片	44.0	41.8	11.1	21.6	サヌカイト
22	石　核	51.9	28.2	21.3	30.5	サヌカイト
23	石　核(剥片素材)	46.9	26.9	18.9	27.1	サヌカイト
24	石　核	123.0	100.0	35.8	454.8	サヌカイト
25	石　錐	57.6	36.5	11.2	22.2	サヌカイト
26	石　核	113.6	62.5	54.8	376.3	サヌカイト
27	搬入石材	148.7	84.8	78.8	1039.5	サヌカイト
28	太形蛤刃石斧(敲打具)	121.2	69.5	44.2	600.0	玄武岩質安山岩
29	太形蛤刃石斧破片	94.4*	70.0*	53.8*	515.1*	玄武岩質安山岩
30	石庖丁破片	72.3*	42.8*	6.6*	27.4*	雲母片岩
31	石庖丁破片	42.7*	37.1*	5.9*	12.0*	緑泥片岩
32	石庖丁破片	97.4*	30.8*	5.6*	23.2*	緑泥片岩
33	石庖丁破片	46.9*	34.0*	6.8*	14.5*	緑泥片岩
34	砥　石	74.6*	74.3*	60.2*	844.6*	角閃石閃緑岩

*は破損部分での計測値を示す。
※長さは原則として素材剥片の剥離軸長、幅はこれに直交する最大幅。



第30図　石器資料の重さと順位

番号	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	原礫面の有　無
1	剥　片	63.4	132.2	20.1	140.8	X
2	剥　片	67.2	77.7	14.4	60.9	X
3	剥　片	39.2	62.2	10.2	27.7	X
4	剥　片	62.0	34.4	12.0	25.2	
5	剥　片	43.8*	36.6	7.5	13.3	
6	剥　片	40.5	55.8	7.1	13.9	
7	剥　片	49.8	39.1	6.4	13.5	
8	剥　片	33.2	58.8	6.5	12.6	X
9	剥　片	35.2	57.1	7.3	13.5	X
10	剥　片	33.8	50.2	6.8	12.4	X
11	剥　片	65.3	35.2	11.7	18.3	X
12	剥　片	35.4	56.9	4.2	11.4	
13	剥　片	71.6	29.5	5.0	10.8	X
14	剥　片	37.5	41.8	4.8	8.7	X
15	剥　片	25.7	54.1	8.6	9.7	
16	剥　片	32.2*	42.8	7.0	12.0	X
17	剥　片	34.4	44.6*	4.8	6.5	
18	剥　片	41.1	27.3	8.6	8.4	X
19	剥　片	48.2	25.1	5.6	6.5	X
20	剥　片	30.1	40.2	5.1	5.4	X
21	剥　片	26.7*	43.8*	5.0	5.4	
22	剥　片	33.2	24.6	7.0	5.3	X
23	剥　片	43.5	34.0	7.4	10.0	X
24	剥　片	32.6	38.9	6.3	6.0	X
25	剥　片	27.4	35.0	3.4	3.7	X
26	剥　片	23.8	32.0	7.1	5.4	X
27	剥　片	36.9	23.7	3.9	3.4	
28	剥　片	35.0	28.2	4.2	3.5	X
29	剥　片	27.8	35.3	5.2	4.8	X
30	剥　片	23.8	24.8	3.7	2.3	
31	剥　片	40.6	18.6	5.4	3.3	
32	剥　片	23.0	32.0	4.7	3.1	
33	剥　片	22.1	30.5	3.6	3.1	
34	剥　片	24.7	30.4	5.3	3.3	X
35	剥　片	23.4	20.0	2.3	1.1	
36	剥　片	28.1	24.8	5.0	2.1	X
37	剥　片	22.0	24.5	5.2	2.9	X
38	剥　片	25.9	20.9	3.5	1.9	
39	剥　片	21.0	22.8	3.3	1.3	X
40	砕　片	37.8	24.0	18.3	19.8	X
41	砕　片	34.9	26.3	11.9	13.4	
42	砕　片	52.7	14.6	12.9	16.4	X
43	剥片破片	32.0	22.6	5.1	4.1	X
44	剥片破片	26.0	23.2	6.9	4.3	X
45	剥片破片	25.8	13.8	6.2	2.4	X
46	剥片破片	25.0	11.1	5.2	2.0	X
47	細部調整剥片	66.6	64.0	13.8	69.1	X
48	細部調整剥片	62.5	46.7	15.3	40.8	X
49	細部調整剥片	50.9	57.2	11.9	33.1	X
50	細部調整剥片	33.3	68.2	10.3	21.2	X
51	細部調整剥片	44.7	52.0	5.3	11.4	X
52	細部調整剥片	40.2	12.5	16.4	4.6	

石庖丁　石庖丁は片刃で直刃半月形のもの(30～32)が3点出土した。刃はいずれも刃縁と平行の研磨動作によって研ぎ出されている。30は3孔を穿つ。顕著な使用痕はみとめられない。31・32は刃部、背縁の両方にこれらの稜と直交する磨耗痕がみとめられる。32は穿孔を中断している。この穿孔には2種類の錐を使用したらしく、回転軸と直径の異なる孔が2段に重なっている。器表にみられる敲打痕は製作時のものである。31も石庖丁関連の資料だが原形は不明。やや大型の石庖丁からか、製作時の破損によって生じた破片であろう。

砥石　34は平坦面をもつ亜円礫素材の砥石破片。隣合う2面を使用し、ともにごくかすかな擦痕を残す。石材は生駒山周辺で産出する角閃石閃緑岩。造岩鉱物は細粒で、中粒～細粒砂岩と同等のテクスチャーをもつ。

V．東大阪市鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種

嶋倉巳三郎

東大阪市にあるいくつかの弥生時代遺跡からは、色々の木質遺物が出土している。このうち鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種を調査した結果を報告する。

用途や品名のわかる木製品が多いので、試料は原形を損なわないように、欠損部のある場合は、そこから数ミリ大の小片を切り取って薄片をつくりプレパラートとし、完形品は最も差し障りのない部分から目立たないように数十分の一ミリの薄片を削いでプレパラートに仕上げ、検鏡した。

調査の結果は第5表のようになった。

次に出土した材の性質についてのべる。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　　イチイ科

針葉樹材で、仮道管の内壁に著しいラセン肥厚があり、それが2条づつ接近して対をなしていることが多い。樹脂細胞はない。

形状のはっきりした弓は鬼虎川のほかもう1ヶ所から出土している。カヤの種子は瓜生堂や纒向その他の遺跡から出土しており、材片も姫路市長越や福岡市鶴町・板付等から出ているが弓はない。

モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc.　　マツ科

放射組織の水平および接線壁に特有の珠数状肥厚があり。傷害樹脂道を生ずることがあるも、年輪中に散在する樹脂細胞を欠く。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　　コウヤマキ科

放射組織の分野に大きな窓型の壁孔があり、接線縦断面ではやや円形に見える。樹脂細胞を欠き、晩材部は狭い。

コウヤマキは古代の棺材や祭祀用具によく使われているが、ここでは剣状木製品として出土したが、新しい使用例であろう。

ヒノキ *Chamaecy paris obtusa* Endl.　　ヒノキ科

樹脂細胞が年輪中、特に晩材部に多く散在し、放射組織の分野にはヒノキ型の壁孔がある。

針葉樹材中最も美しく、耐朽性にも富み、各地の遺跡から器具・建築材・武具として出土しており、ここからも板状物・加工板・棒状物などが得られた。

カシ類 *Querus (Cyclobalanopsis)* sp.　　ブナ科

放射孔材で、広放射組織があり、接線状柔組織の目立つこともある。

鋤・鍬の柄の殆んど全部がカシ材であることは、他の多くの遺跡から出土した例と同様である。ほかに、砧、その他の農用具や編物具・布巻具に用いられており、材質の特性が活かされている。

第5表 樹種一覧表

試料番号	種類・用途	樹　種	挿図番号	図版番号
KT－1	腰　掛	クスノキ	1	30－1・2
KT－2	有頭木器	サカキ	12	30－3・4
KT－3	広鍬の未製品	カシ類	5	30－5・6
KT－4	弓	カヤ	3	30－7・8・9
KT－5	高　杯	ケヤキ	2	31－10・11
KT－6	杭	モミ	47	31－12・13
KT－7	板　材	ヒノキ		31－14・15
KT－8	板　材	ヒノキ		31－16・17
KT－9	狭　鍬	カシ類	4	
KT－10	板　材	ヒノキ		31－18
KT－11	角　材	カシ類	27	32－19・20
KT－12	杭	サカキ		32－21・22
KT－13	杭	クスノキ		32－23・24
KT－14	杭	カヤ		32－25・26・27
KT－15	板　材	ムクノキ		33－28・29・30
KT－16	有頭木器	サカキ	11	
KT－17	武器形木製品	コウヤマキ	10	33－31・32・33
KT－18	羽子板状木器	ヒノキ	9	
KT－19	刻目のある棒	カシ類	7	33－34
KT－20	刻目のある棒	カシ類	8	33－35・36
KT－21	原　材	ムクノキ	31	34－37・38
KT－22	半截材	カシ類	29	34－39
KT－23	棒　材	シイノキ	30	34－40
KT－24	杭	クスノキ	40	34－41・42
KT－25	杭	サカキ	37	34－43・44
KT－26	杭	クスノキ	36	34－45
KT－27	板　材	ヒノキ	18	
KT－28	板　材	ヒノキ	20	
KT－29	板　材	ヒノキ	16	
KT－30	板　材	ヒノキ	17	
KT－31	板　材	ヒノキ	15	
KT－32	板　材	ヒノキ	14	

現在近畿地方にはアラカン・シラカン・アカガシ・イチイガシ・ウラジロガシ・ツクバネガシ・ウバメガシなどが分布しているが、材の構造からこれらを相互に識別することはむずかしいので、ここでは単にカシ類とした。

シイノキ類 *Castamopsis* sp.　　ブナ科

放射孔材であるが、晩材部の道管は急に小さくなり集合する。放射組織は単列のほか集合性のものもある。

ここからは板と杭各1例出土したが、近畿地方の遺跡では少数ながら含まれているので同じ傾向である。

シイノキにはスダジイとコジイとがあるが試料が小さいので決められなかった。

ケヤキ *Zelkova serrata* MAKINO　　ニレ科

早材部道管の大きな環孔材で、晩材部の道管は急に小さくなり、多数集合して接線・斜線方向に配列し、側壁にはラセン肥厚が著しい。放射組織は6-8細胞中に達し、えり細胞がある。

鬼虎川遺跡出土の高杯は上にのべた特徴に一致する。茨木市東奈良・桜井市纒向遺跡などから出土した容器類にもケヤキ材がある。

ムクノキ *Aphananthe aspera* PLANCH.　　ニレ科

散孔材で、道管部はやや大きく、巾の広い接線状柔組織と周囲状柔組織が著しい。鬼虎川遺跡から板材として1例出土した。

クスノキ *Cinnamomum camphora* SIEB.　　クスノキ科

散孔材で周囲状柔組織が著しい。放射組織は異性、1―3細胞巾で、板目でみると階段状に配列することがある。やや軟質であるが交錯木理のことが多い。

腰掛も茨木市東奈良遺跡から知られている。

サカキ *Cleyera japonica* THUNB.

小さな道管が密に分布する散孔材で、ユズリハやカナメモチなどに似る。しかし放射組織が1―2細胞巾で、道管の穿孔の階段数が甚だ多いことなどからみると、ここから出土したものはサカキに最も似ている。

男根状木製品がこの材であることは、材質からみても面白い。杭や建築材とされたものにも含まれている。

Ⅵ．まとめ

鬼虎川遺跡は昭和38年に弥生時代中期の土器が採集され知られるようになった。その後、弥生時代前期の土器や側板と底板と思われる木棺も採集されている。[1] 今回、実施した調査は鬼虎川遺跡では最初のものである。調査よりすでに15年が経過したが、以後の調査を実施するにあたって基礎的な資料を提供した。以下、今回の調査で得られた知見を列記してまとめとしたい。

1．今回の調査では地表下４～５ｍを測る所に遺跡が存在することが明らかになった。遺構の存在も確認され、溝、落ち込み、杭を検出した。遺構の性格は不明であるが中期のものである。その後、鬼虎川遺跡第19次調査が第１トレンチと第２トレンチの間で実施されており、環濠と考えられる大溝が見つかっている。[2] 環濠は東西方向に伸びており、第１トレンチは環濠外、第２・３トレンチが環濠内に位置することが明らかになった。第２・３トレンチの遺構は集落に関連するものであり、第１トレンチで遺構が検出できなかったのも環濠外にあるためと考えられる。

2．各トレンチの遺物出土状況を見ると第１トレンチでは極端に少なく、第２・３トレンチでは多量に出土した。第１トレンチは環濠外にあることや出土遺物量から見て当地点が鬼虎川遺跡のほぼ北限であると考えられる。

3．当遺跡は地表下４～５ｍに立地する低湿地遺跡であることから、木器、植物遺体、動物遺体などの保存状態が良好であることが確認された。木器は鍬、高杯、腰掛などがあり、詳細については中村友博氏のⅣ．３を参照されたい。

4．今回、出土した弥生土器は第Ⅱ、Ⅲ様式のものがあり、Ⅱ様式のものが圧倒的に多い。Ⅱ様式の土器は壺、無頸壺、甕、鉢、高杯、壺蓋、甕蓋の器種から構成されている。甕はＡ～Ｄタイプの４タイプに分類した。口縁部の総個数は230個あり、各タイプの比率を見るとＡタイプ43％(99個)、Ｂタイプ19％(44個)、Ｃタイプ37％(85個)、Ｄタイプ１％(２個)となる。各タイプ別で搬入品を見るとＡ、Ｂタイプは約８～９割が生駒西麓産である。Ｃタイプは搬入品の量が多くなり、7～8割をしめる。また、Ｄタイプはすべて搬入品であり、体部下半をヘラケズリ調整するのを特徴とするものである。紀伊地方に多く認められるものであり、太田黒田遺跡などがあげられる。[3] 和泉地方の池上・四ツ池遺跡ではＥ・Ｇ溝より出土しており、37点中で12点がＤタイプのものであり、高い比率をしめる。[4] 池上・四ツ池遺跡は紀伊地方と距離が近いためと考えられ、遠距離の当遺跡では出土量が少ないものと考えられる。甕以外の器種にも搬入品と考えられるものが多く認められる。無頸壺(53)は体部に櫛描直線文を描き、その完結する地点で櫛原体の下端を軸にして扇形文を施す。このような施文方法は和泉地方に多く認められる。[5] 当時期は他地域と交流が盛んにおこなわれていたと考えられる。

5．今回の調査では日常の土器とは考えがたい土器が出土した。台状土製品としてあつかう。台状土製品は古くは豊中市勝部遺跡[6]などから出土している。勝部遺跡では回転台形土器とし

てあつかわれている。姫路市八代深田遺跡でも同類のものが出土しており、用途不明特殊土製品として報告されている。[7] 山本博利、秋枝芳、森下大輔氏によって周辺での出土例の集成もおこなわれており、24遺跡が紹介されている。報文中では中期後半から後期前半の作業台として意義づけられている。また、八尾市恩智遺跡でも同類のものが出土しているが、鉢としてあつかわれている。[8] 今回、出土した資料は上部に持ち運ぶためのえぐりを2ケ所に入れている。このことから鉢とは考えがたい。また、上面には使用による磨り減りが認められることから、作業台と考えたい。時期は発見例中では古く、第Ⅱ～Ⅲ様式に相当する。また、東大阪市域では新たに鬼虎川遺跡[9]と西ノ辻遺跡[10]から出土している。

注

(1) 島田義明「弥生時代木棺の一資料」(『河内考古学』1　河内考古学研究会　1968年)

(2) 財団法人東大阪市文化財協会　東大阪市教育委員会(『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』　1988年)

(3) 森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相」(『考古学ジャーナル』6　6月号　No33　1969年)

(4) 佐原真・井藤徹他(『池上・四ツ池』　第2阪和国道内遺跡調査会　1970年)

(5) (4)と同様

(6) 荻田昭次・島田義明他(『勝部遺跡』　豊中市教育委員会　1972年)

(7) 山本博利・秋枝芳・森下大輔他(『八代深田遺跡』　姫路市文化財協会　1977年)

(8) 曽我恭子・成海佳子他(『恩智遺跡』Ⅲ　瓜生堂遺跡調査会　1981年)

(9) 第7次調査で前期～中期の包含層より出土した。未発表の資料である。

(10) 第10次調査で出土しており、中期末～後期の遺物と共伴している。未発表の資料である。

観　察　表

凡　例

器種	番号	法量（cm）		備　　考
壺 A	○ ↓ 土器番号 9	○口15.0⟶口縁部径 ○高30.2⟶器高 ○底 6.5⟶底部径 ○つ 5.0⟶つまみ部径 ○脚 4.2⟶脚部径		○石英、長石⟶胎土 ○茶灰色⟶色調 ○第２トレンチ→出土地区 ○その他⟶

（挿図・図版は共通の番号）

第Ⅱ様式の壺

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備　　考
壺 A	1	○口14.4 ○高30.0 ○底 5.8	○最大腹径が胴下半部にあり、丈の高い壺である。底部はわずかにくぼむ平底で、胴部の張りは少ない。頸部はしぼるが、頸部と胴部の境は明瞭でない。口縁部はゆるく外反する。口縁端部は尖りぎみである。部分的にヨコナデ調整の際にでた粘土のはみだしが認められる。 ○胴下半部外面はヘラケズリ＋ヘラミガキ調整する。胴上半部外面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面はハケメ＋ナデ調整し、口縁部をヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。 ○胴下半部外面に黒斑あり。
	2	○口12.4	○頸部はゆるやかに外方へ広がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第２トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	3	○口15.0	○頸部は直立ぎみで、口縁部が大きく外反する。口縁端部は上方へ拡張する。内面に稜線が認められる。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第３トレンチ。
	4	○口14.2	○口頸部はゆるく外反し、口縁端部はわずかに面をもつ。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。 ○口頸部外面にわずかに煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺	5	○口13.0	○頸部は外方へ広がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。 ○頸部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡桃褐色。 ○第3トレンチ。
	6	○口16.0	○胴部の張りは少なく、口頸部はゆるく外反する。口縁端部は面をもち、部分的にヨコナデ調整の際にでた粘土のはみだしが認められる。 ○胴部と頸部の外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。頸部内面にしぼり痕と指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。
	7	○口18.4	○頸部は直立ぎみで、口縁部は下方へ強く外反する。口縁端部は丸い。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第3トレンチ。
	8	○口17.2	○頸部は直立ぎみで、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は尖りぎみである。 ○頸部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。頸部内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第3トレンチ。
	9	○口17.2	○口頸部はゆるく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第3トレンチ。
	10	○口16.2	○口頸部はゆるく外方へ広がり、口縁端部はわずかに下方へ拡張する。 ○頸部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。頸部外面に接合痕が残る。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
A	11	○口25.3	○口頸部は大きく外方へ広がり、口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○頸部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○口頸部外面に煤が付着。
	12	○口22.8	○口頸部はゆるく外反し、口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○口頸部内外面はヘラミガキ調整し、口縁端部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○口頸部外面に煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺 A	13	○口20.4	○口頸部はゆるく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
壺 B	14	○口15.3	○頸部は直立ぎみで、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○頸部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。頸部内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。頸部外面に原体数８本の櫛描直線文を施す。４帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第３トレンチ。
	15	○口15.6	○頸部は直立ぎみで、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。頸部内面に指頭圧痕が残る。頸部外面に原体数７本の櫛描直線文を施す。２帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○出土トレンチ不明。
	16	○口16.4	○頸部は直立ぎみで、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。頸部外面に原体数５本の櫛描直線文を施す。３帯認められる。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。
壺 C	17	○口16.4	○太く短い頸部より口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部外面に接合痕が残る。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。
	18	○口17.0	○太く短い頸部より口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○頸部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○赤褐色。 ○第３トレンチ。 ○口縁部外面に黒斑あり。
	19	○口15.8	○太く短い頸部より口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。
	20	○口17.2	○太く短い頸部より口縁部はゆるく外反する。口縁端部は尖りぎみである。 ○頸部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺 C	21	○口19.4	○太く短い頸部より口縁部は下方へ強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部内外面はハケメ＋ナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○出土トレンチ不明。
	22	○口20.8	○頸部と胴部の境は明瞭でない。太く短い頸部より口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、頸部外面はナデ調整する。胴部と頸部内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第3トレンチ。
壺 D	23	○口19.0	○口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁端部の下端にキザミ目を施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第3トレンチ。
	24	○口19.4	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁端部の上端と下端にキザミ目を施し、羽状文とする。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○赤褐色。 ○第3トレンチ。
	25	○口22.3	○頸部は筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○頸部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部外面と頸部外面に原体数9本の櫛描文様を施す。口縁端部外面に1帯の波状文を施す。頸部外面の直線文は5帯認められる。	○石英を含む。非河内産。 ○乳黄灰色。 ○第3トレンチ。 ○頸部外面に黒斑あり。
	26	○口20.1	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数7本の櫛描波状文を1帯施す。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。
	27	○口19.0	○頸部は筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁端部外面と頸部外面に原体数5本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には1帯の波状文を施す。頸部外面の直線文は1帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰色。 ○第3トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺	28	○口19.6	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面と口縁部内面に原体数８本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には１帯の波状文と口縁部内面にはそれぞれ波状文と扇形文を１帯ずつ施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。
	29	○口20.4	○頸部は筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部外面と頸部外面の境はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。頸部外面と口頸部内面に原体数11本の櫛描文様を施す。頸部外面には４帯の直線文が認められる。口頸部内面には扇形文を１帯とその下に２ケ１対で長さ３cmの縦方向の直線文を施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
	30	○口14.1	○頸部は筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面と頸部外面に原体数10本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には１帯の直線文を施した後、下端にキザミ目を加える。頸部外面には直線文が１帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第１トレンチ。 ○頸部外面に黒斑あり。
D	31	○口13.6	○口縁部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面と口縁部内面に原体数７本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には１帯の波状文と口縁部内面には直線文を描いた後、その上に扇形文を加える。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○赤褐色。 ○第３トレンチ。
	32	○口23.6	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口頸部内面は横方向のハケメ調整する。口縁端部外面に原体数６本の櫛描直線文を１帯施す。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
	33	○口24.2	○口縁部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数７本の櫛描波状文を１帯施す。	○石英・クサリ礫・黒い砂粒を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺 D	34	○口23.8	○頸部と胴部の境は明瞭でない。口頸部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はナデ調整し、頸部外面はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口頸部と胴部の内面はヘラミガキ調整する。口縁端部外面と頸部外面から胴部外面にかけて原体数８本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には１帯の波状文を施した後、下端にキザミ目を加える。頸部から胴部の外面には５帯の直線文を施し、その文様間に扇形文を加え擬似流水文を描いている。この下に１帯の波状文を施す。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。
壺 E	35	○口23.4	○頸部は筒状を呈し、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は凹状を呈する。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第３トレンチ。
	36	○口27.0	○口頸部はゆるく外反し、口縁端部は凹状を呈する。 ○頸部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。
	37	○口27.2	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○頸部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○淡赤灰色。 ○第２トレンチ。
	38	○口33.6	○頸部は筒状を呈し、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。頸部内面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
	39	○口32.4	○口頸部は大きく外反し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁端部外面と口頸部内面はヘラミガキ調整する。無文。	○石英・雲母・クサリ礫を含む。非河内産。 ○赤褐色。 ○第３トレンチ。
	40	○口30.8	○頸部は筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○頸部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。
壺 F	41	○口18.2	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は面をもつ。 ○頸部外面はハケメ原体のような条間や条溝のない工具でナデ調整し、内面はハケメ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口縁部内面に裾部径1.5cm、高さ5～6mmの円錐形を呈する乳状突起を施す。１個のみ残存。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺	42	○口31.0	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へ拡張する。 ○頸部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はヨコナデ調整し、口頸部内面はヘラミガキ調整する。口縁端部の下端に指で圧痕を加える。そのため下端は波状を呈する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
G	43	○口26.4	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部の下端に指で圧痕を加える。そのため下端は波状を呈する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
	44	○口29.8	○口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の下端に指で圧痕を加え、指圧痕の間に棒状工具で円形の圧痕を加える。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第3トレンチ。
壺	45	○口31.4	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数4本の櫛描波状文を1帯施した後、上端と下端にキザミ目を加える。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○口頸部内外面に黒い塗料を塗る。
H	46	○口28.8	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部を下方へわずかに拡張する。 ○頸部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部の下端にキザミ目を施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第2トレンチ。
小型壺	47	○口11.6	○頸部は長い筒状を呈し、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。無文。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○淡赤灰色。 ○第3トレンチ。
	48	○口11.8	○頸部は短い筒状を呈し、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。無文。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第2トレンチ落ち込み内。
	49	○口 9.2	○頸部と胴部の境は明瞭でない。頸部は筒状を呈し、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部と胴部の外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。

第Ⅲ様式の壺

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺	56	○口22.2	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁端部外面に原体数８本の櫛描簾状文を１帯施す。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○赤褐色。 ○二次焼成を受ける。
	57	○口22.8	○頸部は筒状を呈し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部外面の文様間はヘラミガキ調整する。口頸部内面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面と頸部外面に原体数９本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には簾状文を１帯施す。頸部外面には３帯の直線文が認められる。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第３トレンチ。
	58	○口15.4	○口頸部は漏斗状を呈する。口縁端部は下方へ拡張し、断面の形が三角形である。 ○頸部内外面はナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面と頸部外面に原体数11本の櫛描文様を施す。口縁端部外面には波状文を１帯施す。頸部外面は２帯の簾状文が認められる。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。 ○口縁部外面に黒斑あり。
	59	○口21.1	○口頸部は筒状を呈し、口縁端部は下方へ拡張する。 ○頸部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数９本の櫛描簾状文を１帯施す。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第１トレンチ。
	60	○口16.8	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は上下へ拡張し幅広い面をもつ。 ○頸部内外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数４本の櫛描列点文を２帯施す。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。
	61	○口17.2	○口頸部は漏斗状を呈し、口縁端部は上下へ拡張し幅広い面をもつ。 ○頸部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面に原体数13本の櫛描簾状文を２帯施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。

第Ⅱ様式の無頸壺

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
無頸壺	51	○口11.4	○胴上半部は「ハの字」状を呈し、口縁端部は丸い。口縁部に２孔１対の小円孔を相対して２ケ所に穿つ。 ○胴上半部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。小円孔を穿った内面の周辺はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。胴上半部外面には原体数７本の櫛描直線文を施す。10帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。
	52	○口11.6	○胴上半部はわずかに内弯ぎみの「ハの字」状を呈する。口縁端部は角ばる、いわゆる擬口縁である。口縁部に小円孔を１孔穿つ。 ○胴下半部外面はヘラミガキ調整し、胴上半部外面はナデ調整する。胴部内面はハケメ＋ナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。胴上半部外面に原体数７本の粗雑な櫛描文様を施す。直線文を５帯とその下に３帯の波状文を施す。	○石英・雲母を含む。非河内産。 ○乳褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。 ○胴部外面に多量の煤が付着し、内面には炭化物が残る。
	53	○口10.8	○胴上半部は「ハの字」状を呈し、口縁端部は角ばる、いわゆる擬口縁である。 ○胴上半部内外面はナデ調整するが内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。胴部内面に接合痕がある。胴上半部外面に原体数４本の櫛描文様を施す。直線文を描き、その完結する地点で櫛原体の下端を軸にして扇形文を施す。４帯認められる。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○乳褐色。 ○第３トレンチ。
	54	○口 8.2	○胴上半部は「ハの字」状を呈し、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸い。 ○胴上半部内外面はナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。胴上半部外面に原体数７本の櫛描直線文を施す。４帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第３トレンチ。
	55	○口 8.0	○胴上半部は「ハの字」状を呈し、口縁端部は丸い。 ○胴上半部内外面はナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。胴上半部外面に原体数７本の粗雑な櫛描文様を施す。直線文を３帯とその下に３帯の波状文を施す。	○石英・黒い砂粒を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○胴部外面に煤が付着。口縁部内面に幅２cmの帯状の剝離痕あり。

第Ⅱ様式の壺蓋

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
壺蓋	50	○口10.8	○笠形を呈する壺蓋である。口縁部に相対する2孔1対の小円孔を穿つ。 ○体部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。内面に指頭圧痕と接合痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第3トレンチ。

第Ⅱ様式の甕

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕 A	62	○口22.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第2トレンチ。 ○胴部外面に煤が付着。二次焼成を受け外面の一部が赤褐色を呈する。
	63	○口22.8	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第1トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	64	○口22.6	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整する。内面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第3トレンチ。
	65	○口20.0	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○二次焼成を受け外面はもろくなっている。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕 A	66	○口18.4	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	67	○口22.6	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	68	○口23.2	○胴部はわずかに張り、口縁部はゆるく外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	69	○口23.2	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部にヨコナデ調整の際にでた粘土のはみだしが認められる。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁部と胴部外面の境に指頭圧痕が残る。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
	70	○口21.9	○口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○口縁部はハケメ＋ナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡茶褐色。 ○第3トレンチ。
	71	○口21.2	○口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
	72	○口18.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は上方へわずかに立ちぎみである。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰色。 ○第3トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	73	○口17.4	○口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸い。 ○口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○口縁部外面に少量の煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕 A	74	○口17.0	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第2トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	75	○口11.2 ○高12.4 ○底 4.4	○底部は厚い平底で胴部の張りは少ない。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸い。 ○胴部下半外面はヘラケズリ＋ナデ調整し、胴部上半外面はナデ調整する。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第2トレンチ落ち込み内。 ○外面に多量の煤が付着。
	76	○口14.6	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○胴部外面に少量の煤が付着。
	77	○口16.0	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。胴部内外面に約2㎝幅で接合痕が残る。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰色。 ○第3トレンチ。 ○胴部外面にモミ圧痕がある。外面に煤が付着。
	78	○口16.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整し、内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第2トレンチ落ち込み内。 ○外面に多量の煤が付普。
	79	○口17.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部内外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はハケメ＋ヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第3トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕A	80	○口15.8	○胴部の張りは少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○口縁部内面と胴部外面に多量の煤が付着。
	81	○口15.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はハケメ＋ヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○口縁部内面と胴部外面に煤が付着。
	82	○口17.3	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	83	○口17.3	○胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が多量に付着。
	84	○口15.8	○胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はハケメ＋ヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第2トレンチ。
大型甕A	85	○口29.2	○胴部はわずかに張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整するが内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部にキザミ目を施す。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡茶褐色。 ○第3トレンチ。
	86	○口33.7	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○淡黄褐色。 ○第3トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
大型甕A	87	○口29.9	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部はわずかに面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○淡灰色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	88	○口27.4	○口縁部は強く外反し、口縁端部は面をもつ。 ○口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰色。 ○第3トレンチ。
甕B	89	○口17.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	90	○口13.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴下半部外面はヘラミガキ調整し、胴上半部外面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面はハケメ＋ナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	91	○口16.6	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋ハケメ調整する。胴部外面に接合痕あり。口縁端部外面にキザミ目を施す。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	92	○口19.4	○胴部はわずかに張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面に多量の煤が付着しており調整法の観察不可能。胴部内面はナデ＋ヘラミガキ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヘラミガキ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が多量に付着。
	93	○口17.8	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕 B	94	○口16.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はナデ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。 ○外面に煤が多量に付着。
	95	○口10.8	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○灰色。 ○第３トレンチ。
大型甕 B	96	○口23.0	○胴部はわずかに張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しいので調整法の観察不可能。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。
	97	○口27.2	○胴部はわずかに張り、口縁部は下方へ強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第２トレンチ。 ○胴部外面に少量の煤が付着。
	98	○口28.7	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はナデ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	99	○口30.4	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。口縁端部にヨコナデ調整の際にでた粘土のはみだしが認められる。 ○胴部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。
甕 C	100	○口19.6	○胴部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部にキザミ目を施す。	○石英・雲母を含む。非河内産。 ○暗灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面は二次焼成を受け、部分的に赤灰色を呈する。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	101	○口18.9	○頸部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は巻き込むような形状を呈する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の上端にキザミ目を施す。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
	102	○口17.1	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の上端にキザミ目を施す。	○石英・雲母を含む。非河内産。 ○暗乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○内面に黒斑あり。
	103	○口15.2	○胴部はわずかに張り、口縁部は強く外反する。口縁端部は巻き込むような形状を呈する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の上端にキザミ目を施す。	○石英を含む。非河内産。 ○暗灰色。 ○第２トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	104	○口21.0	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は巻き込むような形状を呈する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部外面にキザミ目を施す。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
C	105	○口18.0	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部外面にキザミ目を施す。	○石英・雲母を含む。非河内産。 ○暗乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	106	○口17.6	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部外面にキザミ目を施す。	○石英・雲母を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	107	○口18.6	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は巻き込むような形状を呈する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の上端にキザミ目を施す。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○口縁部外面に少量の煤が付着。
	108	○口13.8 ○高20.6 ○底 6.0	○底部は厚い平底で、胴部の張りは少ない。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。胴部内面に指頭圧痕と接合痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。口縁端部の下端にキザミ目を施す。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第２トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	109	○口15.6	○胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面に接合痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。 ○外面に多量の煤が付着。
	110	○口16.0	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○暗乳灰色。 ○第２トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
C	111	○口16.9	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。 ○外面に煤が付着。
	112	○口17.4	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は巻き込むような形状を呈する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○暗乳灰色。 ○第２トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	113	○口16.6	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕C	114	○口20.8	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○口縁部内外面と胴部に多量の煤が付着。
	115	○口21.0	○胴部はわずかに張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。胴部内面に接合痕が残る。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第２トレンチ。 ○外面に煤が付着。
大型甕C	116	○口26.3	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。
	117	○口31.4	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は尖りぎみである。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。
	118	○口27.1	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は下方へわずかに拡張する。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○暗乳灰色。 ○第３トレンチ。
	119	○口30.6	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
	120	○口29.9	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はヨコナデ＋横方向のハケメ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○口縁部外面に黒斑あり。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	121	○口14.9	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。胴部外面にヘラケズリ調整の際にできた稜線が残る。 ○胴下半部外面は横方向のヘラケズリ調整し、胴上半部外面はナデ調整する。胴部内面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○暗桃灰色。 ○第3トレンチ。
D	122	○口17.6	○胴部の張りは少なく、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。胴部外面にヘラケズリ調整の際にできた稜線が残る。 ○胴部外面はヘラケズリ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第3トレンチ。 ○外面に少量の煤が付着。

第Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭の甕

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	123	○口16.4	○胴部の張りは少なく、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗灰褐色。 ○第2トレンチ。 ○外面に多量の煤が付着。
	124	○口15.3	○胴部の張りは少なく、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は上方へわずかに拡張する。 ○胴部外面はハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第3トレンチ。
大型甕	125	○口29.2	○胴部はわずかに張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡灰色。 ○第3トレンチ。 ○口縁部外面に黒斑あり。

第Ⅲ様式の甕

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	126	○口17.2	○胴部は張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。胴部内面に接合痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	127	○口15.6 ○高26.4 ○底 5.2	○底部は薄い平底で、胴部が張る。口縁部は「くの字」状に外反し、口縁端部は上方へ拡張する。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。胴部内面に接合痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。 ○胴下半部外面は二次焼成を受け赤褐色を呈する。
	128	○口13.7	○胴部は張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はハケメ調整し、内面はナデ調整する。胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	129	○口15.4	○胴部は張り、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	130	○口11.0	○胴部は張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○胴部外面に黒斑あり。
	131	○口15.9	○胴部は張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は上方へわずかに拡張する。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。胴部内面に接合痕が残る。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第３トレンチ。 ○胴部外面に多量の煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕	132	○口14.4	○胴部は張り、口縁部は「くの字」状に外反する。口縁端部は丸い。 ○風化が著しいので調整法の観察不可能。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○胴部外面に少量の煤が付着。
大型甕	133	○口29.2	○胴部は張り、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第2トレンチ。 ○外面に煤が付着。
	134	○口27.3	○胴部は張り、口縁部は強く外反する。口縁端部は下方へ拡張し、そのため断面形が三角形を呈する。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。胴部内面は風化が著しいので調整法の観察不可能。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第3トレンチ。

第Ⅱ様式の甕蓋

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕蓋	135	○つ 5.2	○体部はゆるやかな裾広がりを呈する。つまみ部は上方へ立ちあがり、端部が強く外反する。つまみ部上面はわずかに凹む。 ○つまみ部内外面はナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第2トレンチ。 ○つまみ部外面に煤が付着。
	136	○つ 7.2	○体部はゆるやかな裾広がりを呈する。つまみ部は上方へ立ちあがり、端部が大きく外反する。つまみ部の上面は凹む。 ○つまみ部外面はハケメ＋ナデ調整し、内面はナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○出土トレンチ不明。
	137	○つ 7.8	○体部はゆるやかな裾広がりを呈する。つまみ部は内弯ぎみに上方へ立ちあがり、端部が強く外反する。つまみ部の上面は凹む。 ○体部内外面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。つまみ部外面はナデ調整するが、指頭圧痕が残る。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第2トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
甕蓋	138	○つ 6.4	○体部はゆるやかな裾広がりを呈し、つまみ部は上方へ立ちあがる。つまみ部の上面は凹む。 ○体部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。つまみ部外面はナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。

第Ⅱ様式の高杯

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
高杯杯部	139	○口19.2	○杯部は深い椀状を呈し、口縁部が内弯する。口縁端部は面をもつ。 ○杯部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。杯部内面に接合痕が残る。	○石英・クサリ礫を含む。非河内産。 ○乳褐色。 ○第２トレンチ落ち込み内。
高杯脚部	142	○脚 3.4	○脚部は短い柱状を呈し、中実である。 ○脚部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。杯部と脚部の内面はナデ調整する。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○脚部外面に黒斑あり。
	143	○脚 4.0	○脚部は柱状を呈し、中実である。 ○脚部外面はナデ調整する。杯部内面はナデ調整し、脚部内面はハケメ＋ナデ調整する。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。
	144	○脚 3.4	○脚部は柱状を呈し、中実である。 ○脚部外面と杯部内面はヘラミガキ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰色。 ○第３トレンチ。
	145	○脚 4.0	○脚部は長い柱状を呈し、中実である。 ○脚部外面と杯部内面はヘラミガキ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第３トレンチ。
高杯脚裾部	146	○底13.0	○脚裾部はゆるやかな裾広がりで、裾端部を上方へ拡張する。 ○脚裾部内外面はナデ調整し、裾端部をヨコナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
高杯脚裾部	147	○底13.8	○脚裾部は急な裾広がりで、裾端部は面をもつ。 ○脚裾部外面はハケメ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。内面にしぼり痕が残る。裾端部はヨコナデ調整する。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○裾端部と内面に多量の煤が付着。

第Ⅲ様式の高杯

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
高杯杯部	140	○口25.0	○杯部は水平に外折した後、下方へ垂下する。口縁部と杯部の境に断面形が三角形の凸帯がめぐる。 ○口縁部内外面はナデ調整する。	○石英･角閃石･クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
	141	○口――	○杯部は漏斗状を呈し、口縁部が欠損する。杯部と口縁部の境に断面形が台形の凸帯がめぐる。 ○杯部内外面はヘラミガキ調整する。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。
高杯脚部	148	○脚 4.2	○脚部はわずかに裾広がりの形状を呈し、中空である。 ○脚部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。脚裾部内面はハケメ＋ナデ調整し、脚部内面にしぼり痕が残る。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。

第Ⅱ様式の鉢

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
鉢A	149	○口23.0	○胴部はわずかに内弯ぎみで、深い椀状を呈する。口縁端部はやや幅広い水平面をもつ。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。胴部外面に原体数12本の櫛描直線文を施す。３帯認められる。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。

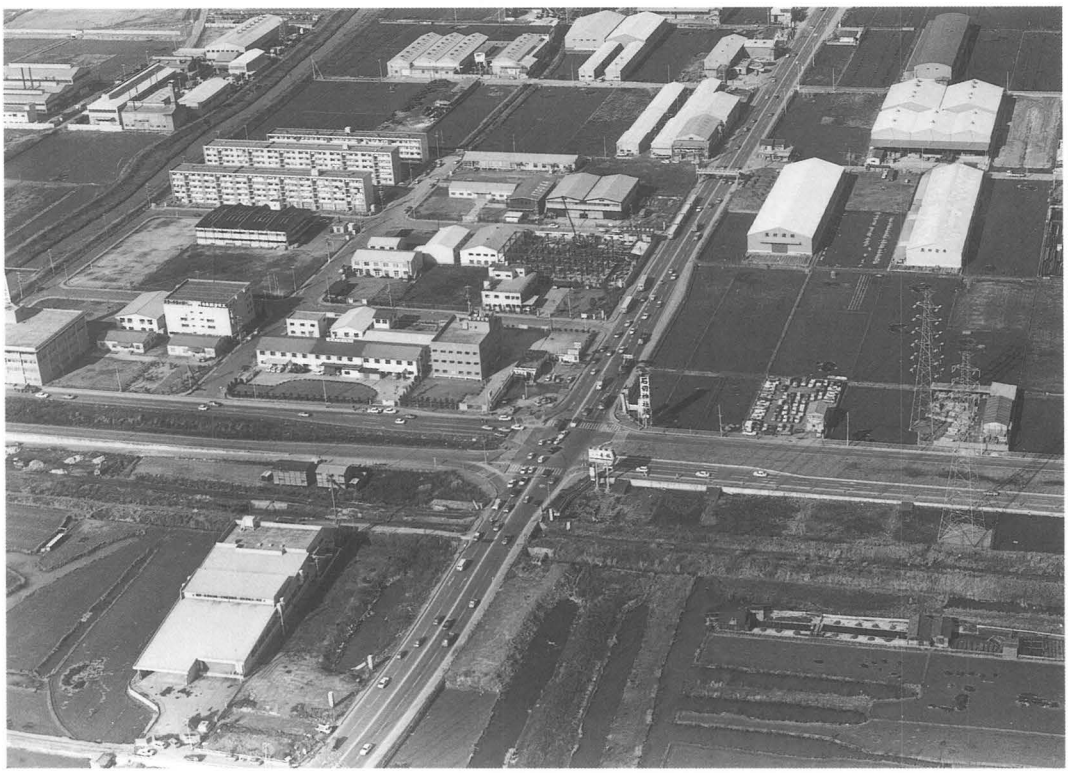
器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
鉢 A	150	○口18.6	○胴部はわずかに内弯ぎみで、椀状を呈する。口縁端部はやや幅広い水平面をもつ。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。胴部外面に原体数５本の櫛描直線文を施す。２帯認められる。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○淡褐色。 ○第３トレンチ。
	151	○口19.6	○胴部は内弯ぎみで、深い椀状を呈する。口縁端部は内側へ拡張し、やや幅広い水平面をもつ。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。胴部外面に原体数10本の櫛描直線文と波状文を施す。２帯認められる。	○石英を含む。非河内産。 ○淡灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面に黒斑あり。
鉢 B	153	○口19.0	○胴部は逆円錐形を呈し、口縁端部は丸い。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。胴部外面に原体数４本の櫛描直線文を３帯施す。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
	154	○口25.4	○胴部は逆円錐形を呈し、口縁端部が水平面をもつ。 ○胴部内外面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
	155	○口20.6	○胴部は逆円錐形を呈し、口縁端部が面をもつ。無文。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
	156	○口13.2	○胴部は逆円錐形を呈し、口縁部は丸い。 ○胴部内外面と口縁部はヘラミガキ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第３トレンチ。
鉢 C	157	○口18.3	○胴部の張りが少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○胴部外面に煤が付着。
	158	○口22.6	○胴部は張りが少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。 ○胴部外面はハケメ＋ヘラミガキ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。胴部内面に約1.6cm幅の接合痕が残る。無文。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第３トレンチ。 ○胴部外面に少量の煤が付着。

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
鉢	159	○口17.8	○胴部は張りが少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○暗褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。
C	160	○口17.8	○胴部の張りは少なく、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○淡灰褐色。 ○第3トレンチ。
大型鉢C	161	○口25.1	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。胴部内面は風化が著しいので調整法の観察不可能。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。 ○胴部内面に黒斑あり。
	162	○口21.2	○胴部は張りが少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸い。 ○胴部外面はナデ調整し、内面はハケメ＋ナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○淡赤褐色。 ○第3トレンチ。 ○胴部外面に黒斑あり。
	163	○口26.4	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部外面は風化が著しいので調整法の観察不可能。胴部内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石・雲母を含む。生駒西麓産。 ○褐色。 ○第3トレンチ。
	164	○口25.1	○胴部の張りは少なく、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はハケメ＋ナデ調整するが、内面には指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。無文。	○石英・角閃石を含む。生駒西麓産。 ○乳灰色。 ○第3トレンチ。
	165	○口35.8	○胴部の張りは少なく、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。 ○胴部内外面はヘラミガキ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁部外面に指頭圧痕が残る。無文。	○石英・角閃石・雲母・クサリ礫を含む。生駒西麓産。 ○茶褐色。 ○第3トレンチ。 ○外面に煤が付着。

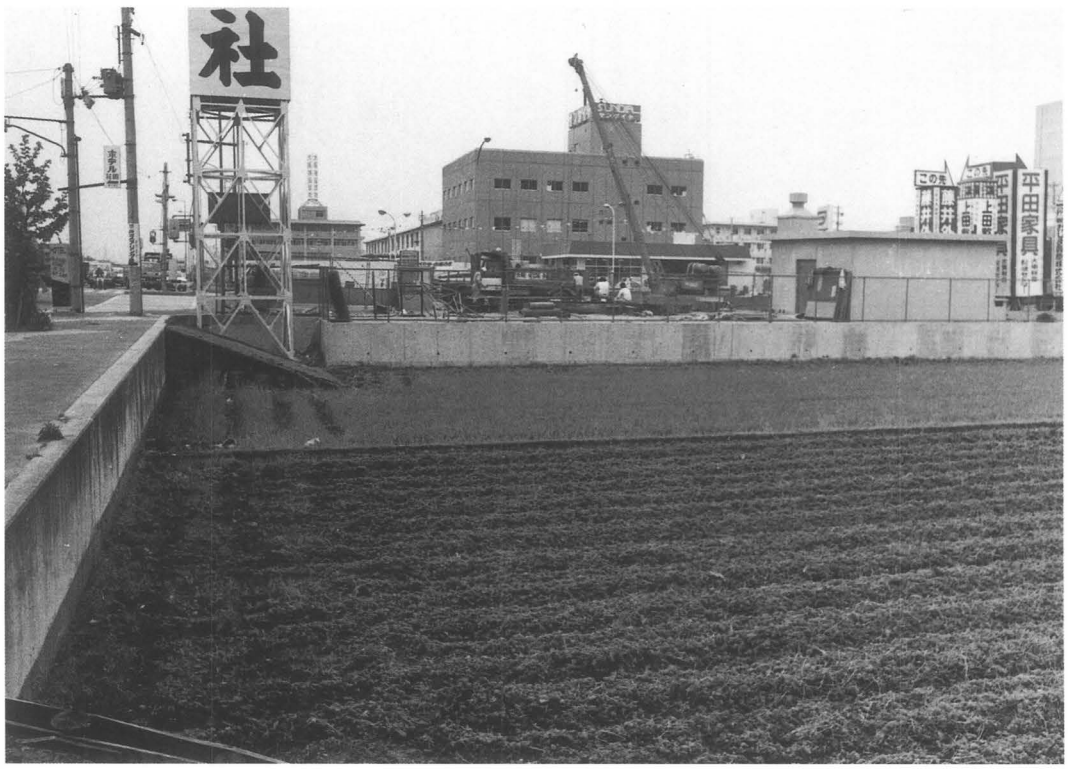
第Ⅲ様式の鉢

器種	番号	法量（cm）	形態・技法の特徴	備考
鉢	152	○口20.5	○器高が低く、胴上半部は内傾する。口縁端部は外方へ拡張し、段状を呈する。 ○胴下半部外面はヘラミガキ調整し、胴上半部外面はナデ調整する。胴部内面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ調整する。口縁端部外面にはキザミ目を施し、胴部外面には原体数８本の櫛描波形文を１帯とその下に簾状文を１帯施す。	○石英・茶色の砂粒を含む。非河内産。 ○乳灰色。 ○第３トレンチ。 ○外面に黒斑あり。

図　　版

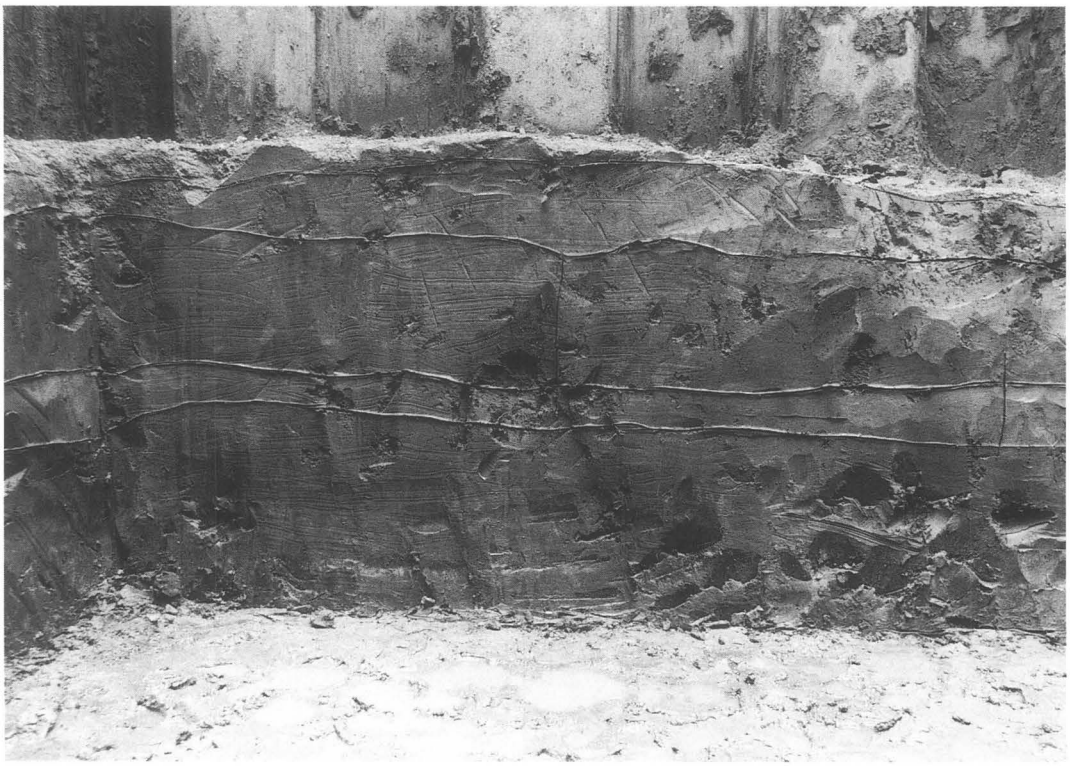


1．調査地航空写真



2．調査地遠景

1．調査風景



2．東壁断面(第1トレンチ)

1．落ち込み内遺物出土状況(第2トレンチ)

2．落ち込み内遺物出土状況(第2トレンチ)

1．落ち込み(第2トレンチ)

2．溝内遺物出土状況(第3トレンチ)

図版5 遺構

1．溝(第3トレンチ)

2．溝(第3トレンチ)

25

29

51

52

1

6

弥生土器　壺、無頸壺

89

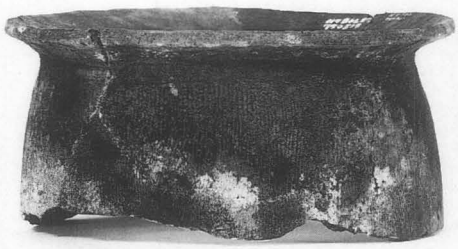
75

127

108

弥生土器　甕

139


123

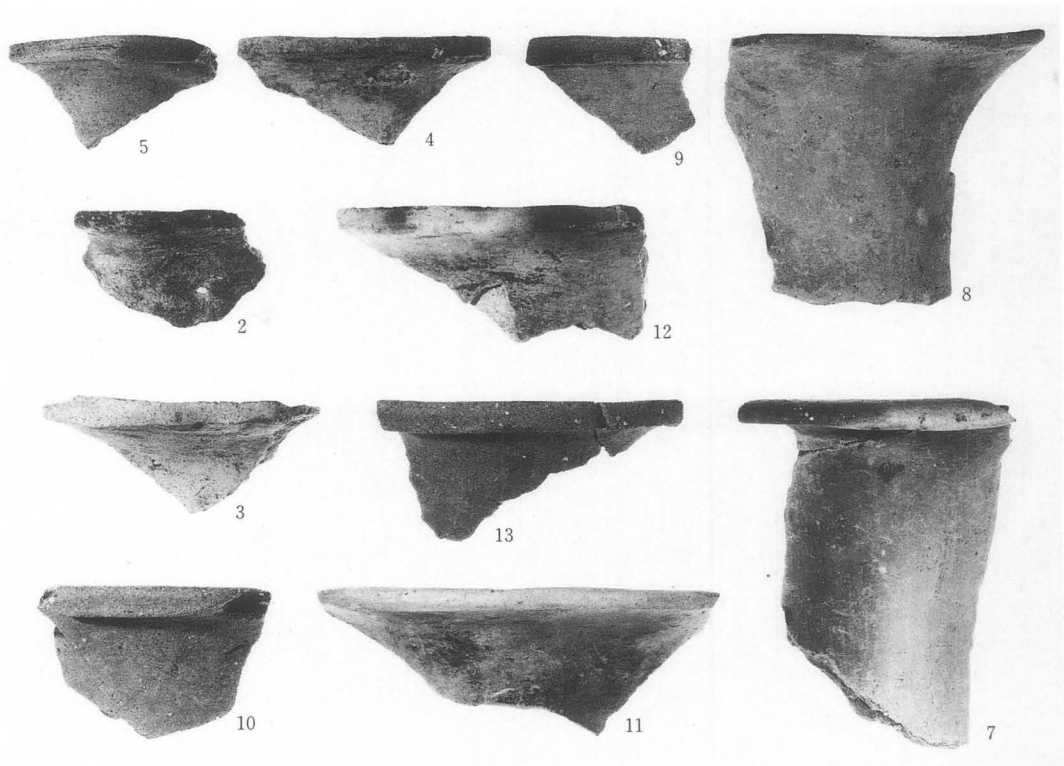
126

78

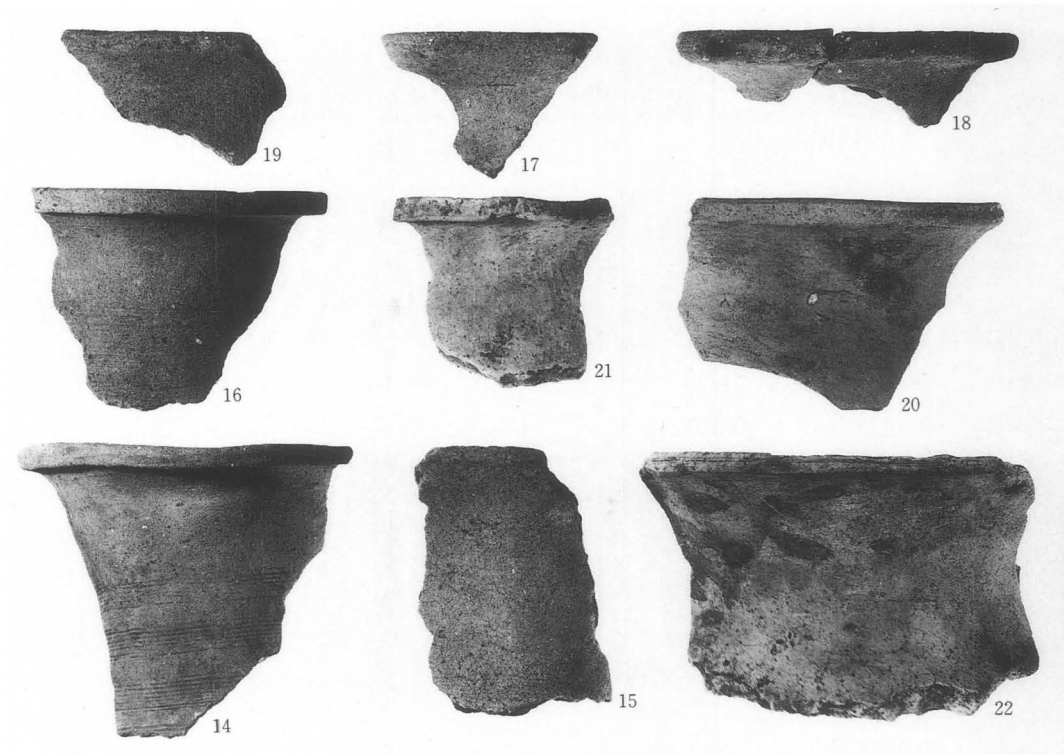
90

74

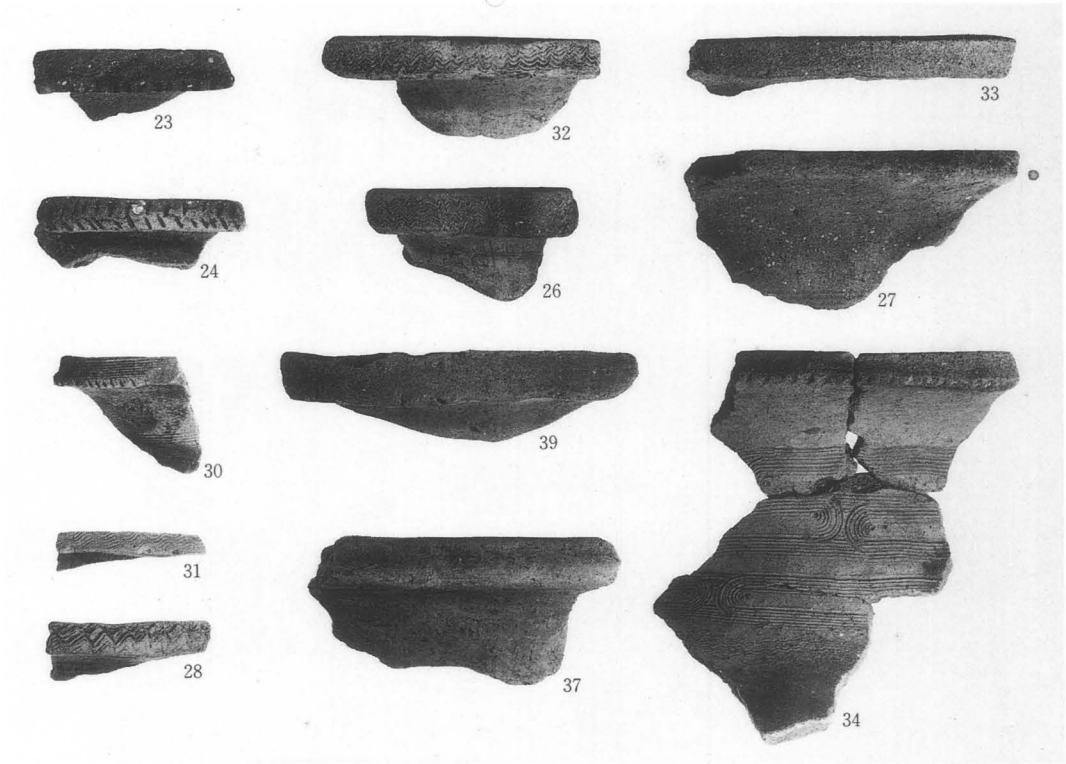
弥生土器　甕、高杯



1．弥生土器　壺

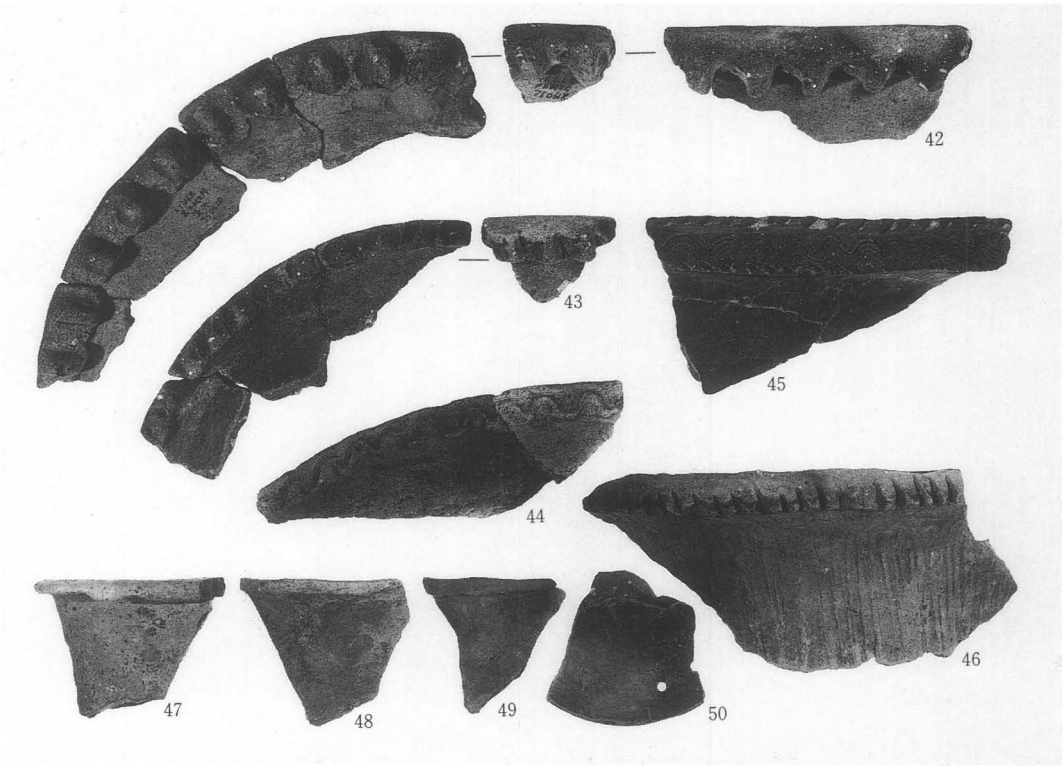


2．弥生土器　壺

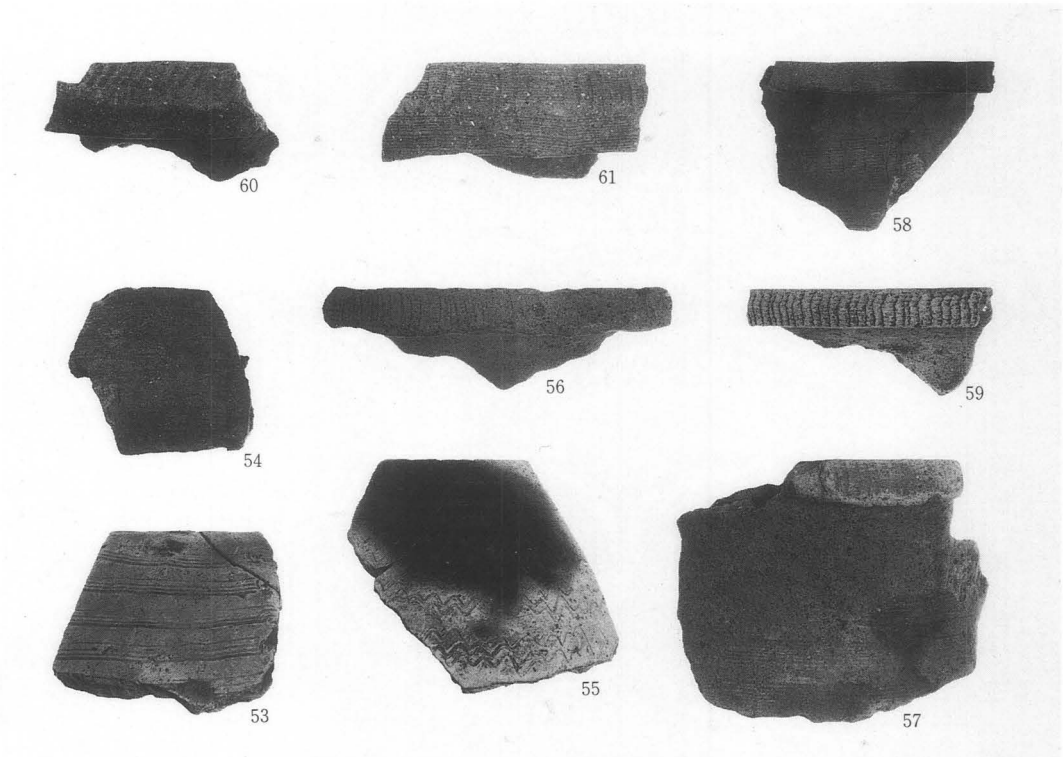


1．弥生土器　壺

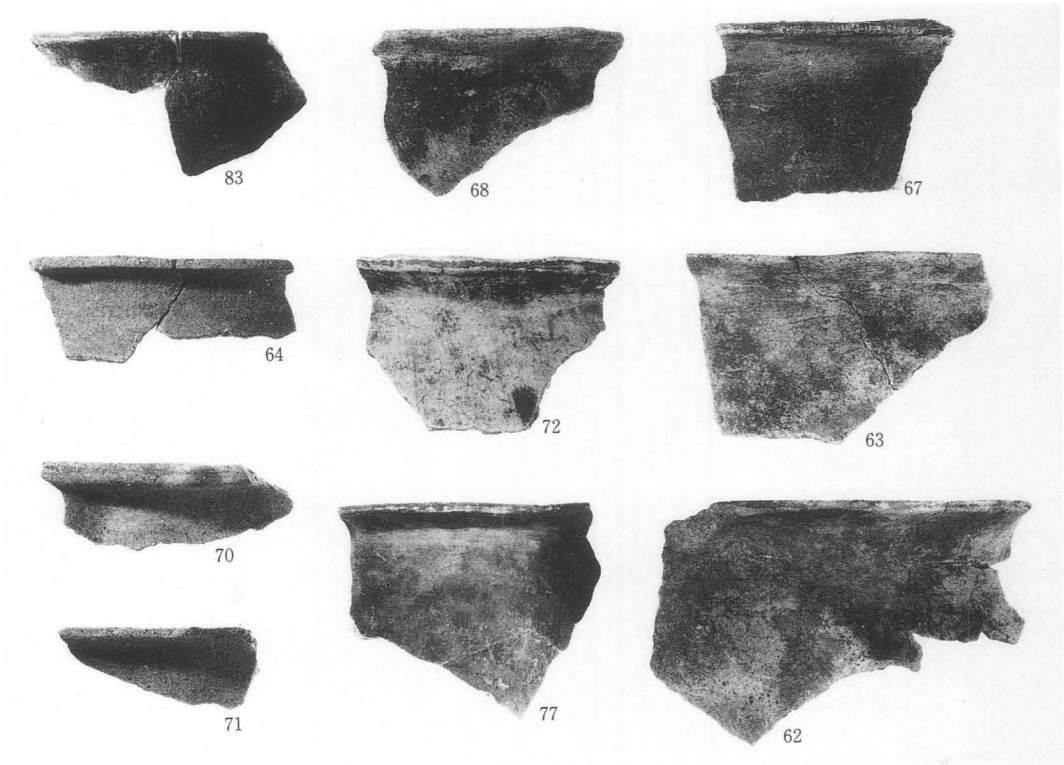
2．弥生土器　壺



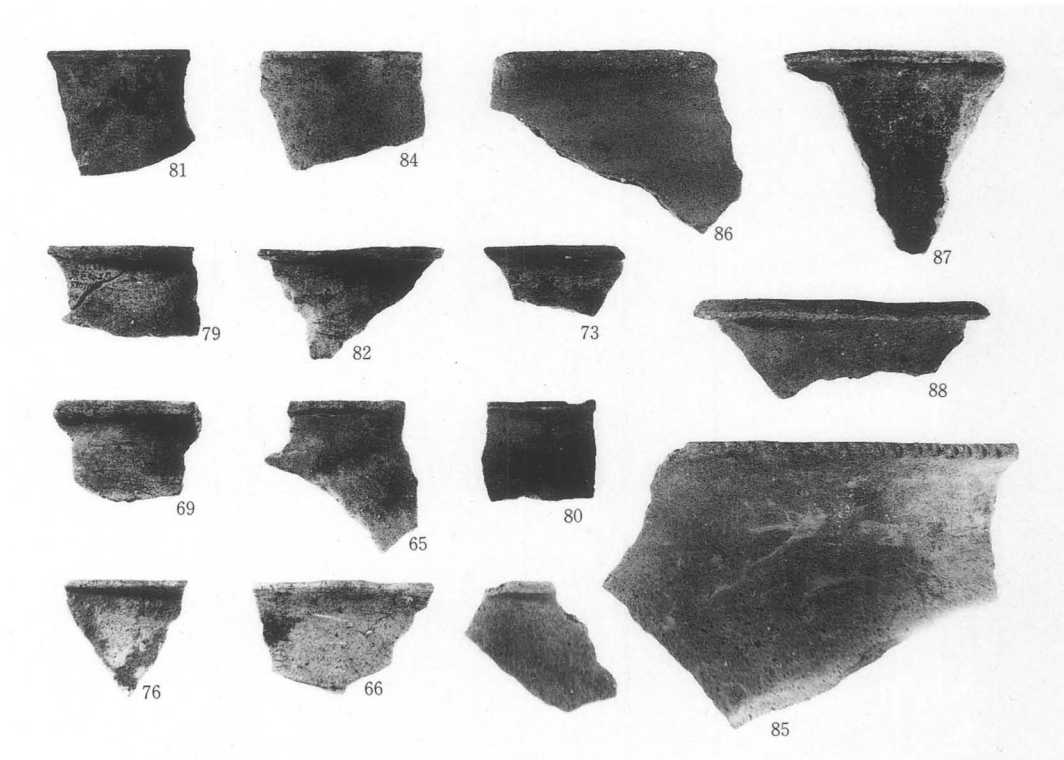
1．弥生土器　壺、壺蓋



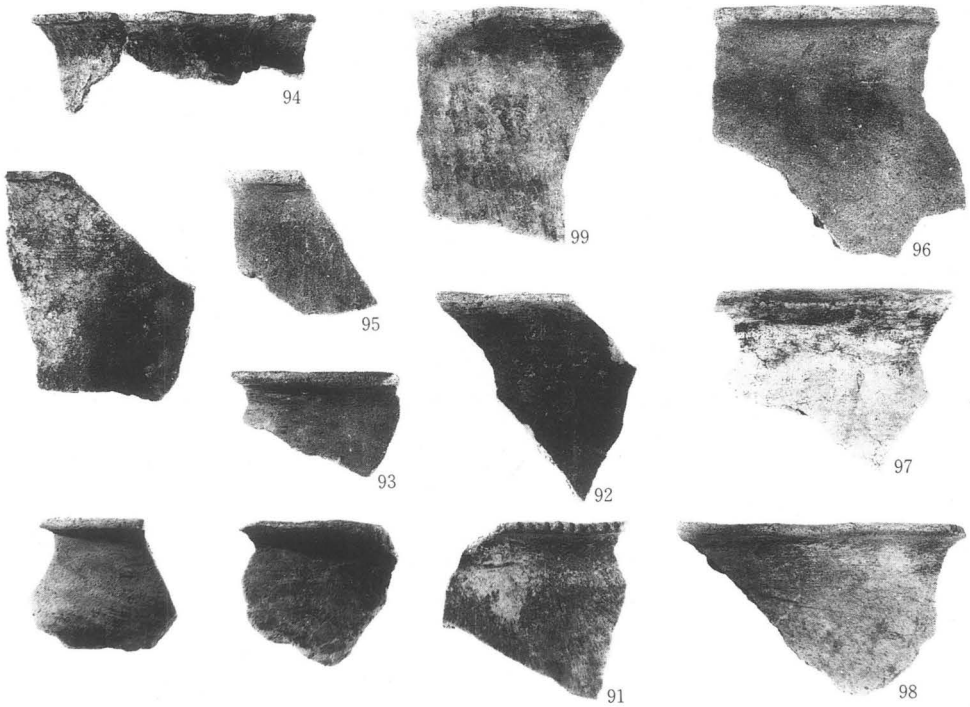
2．弥生土器　壺、無頸壺



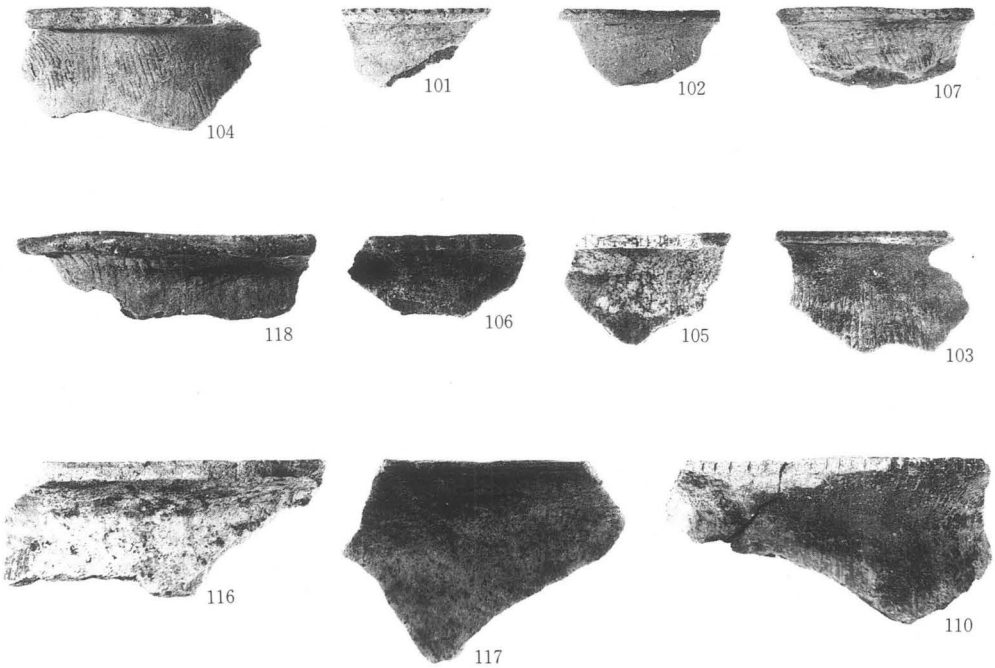
1．弥生土器　甕



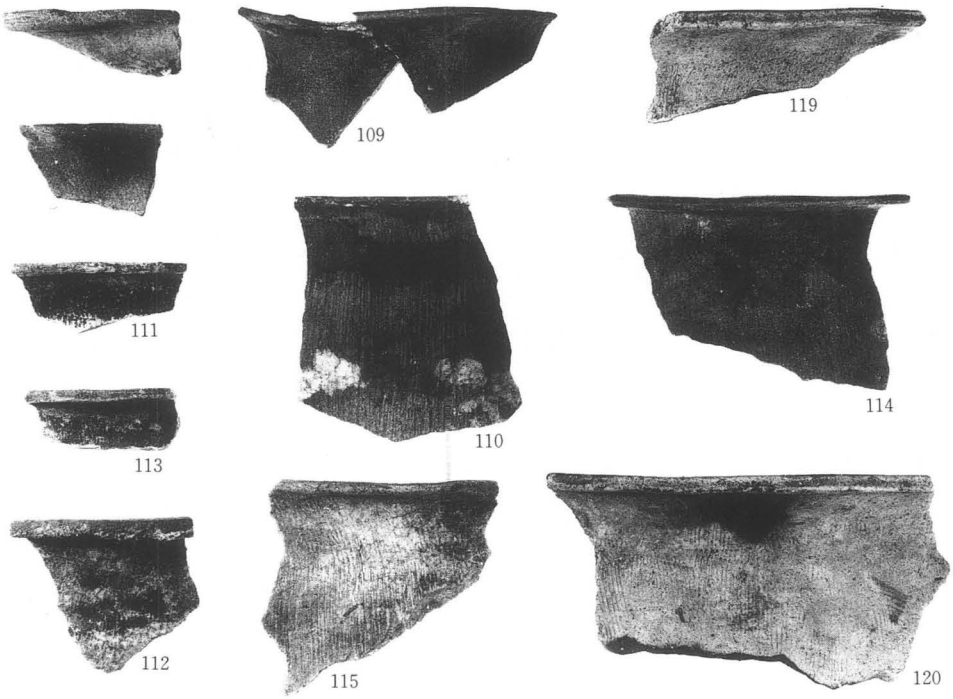
2．弥生土器　甕



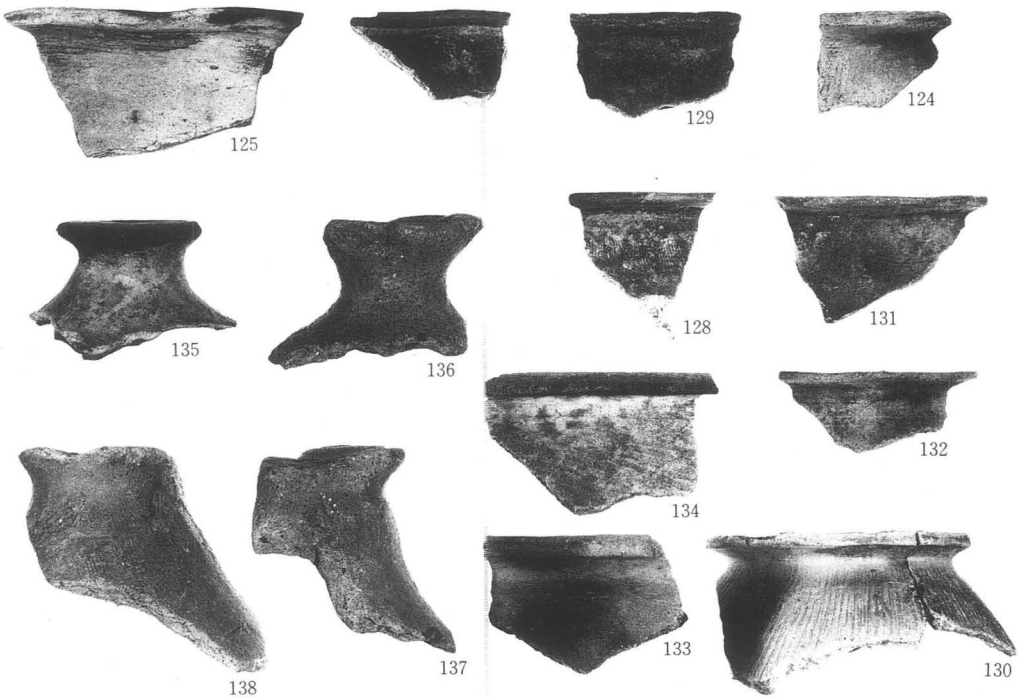
1．弥生土器　甕



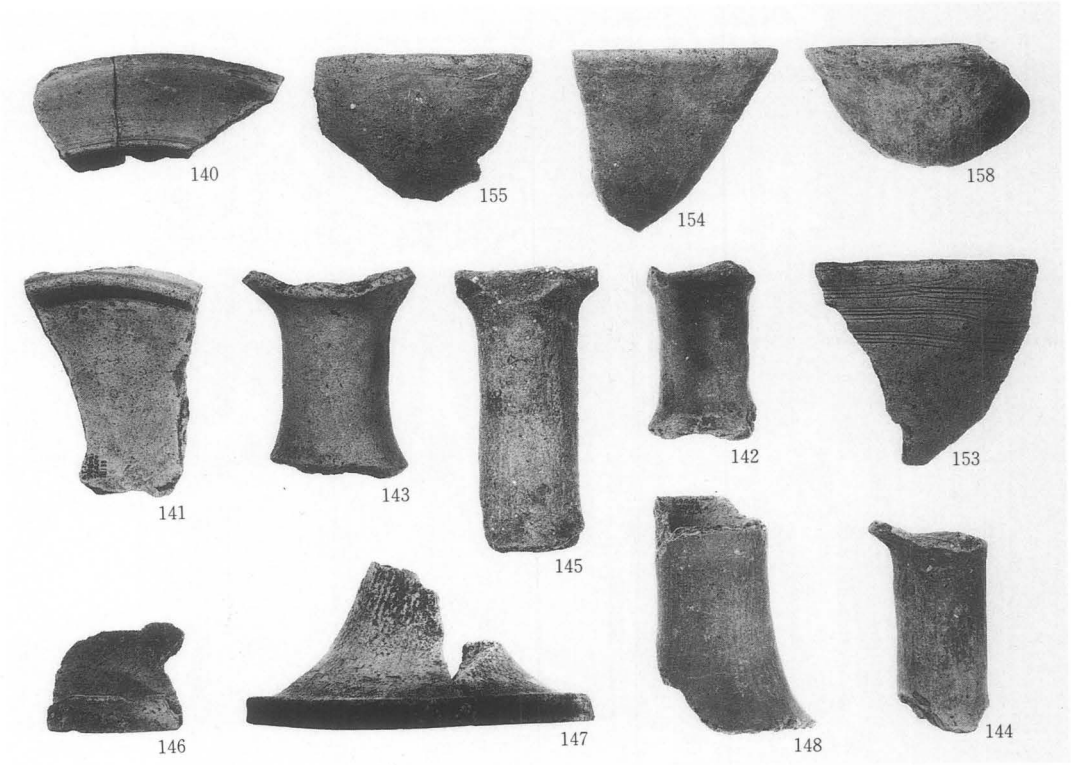
2．弥生土器　甕



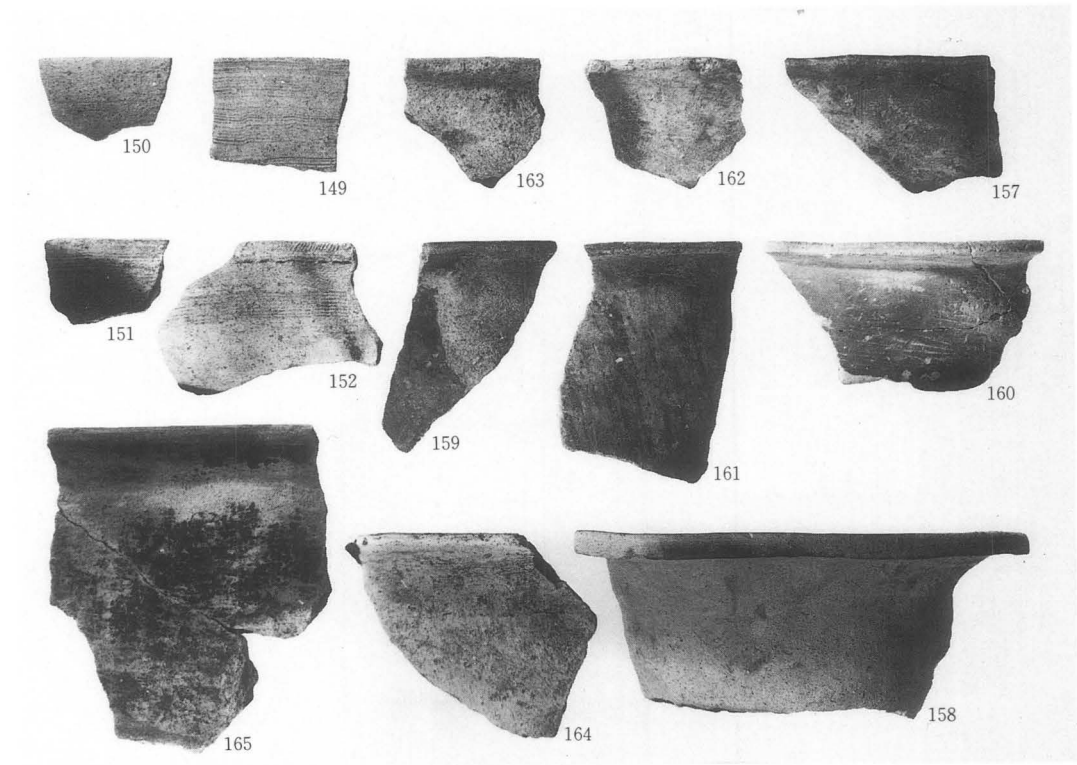
1．弥生土器　甕



2．弥生土器　甕、甕蓋



1．弥生土器　高杯、鉢



2．弥生土器　鉢

231

226

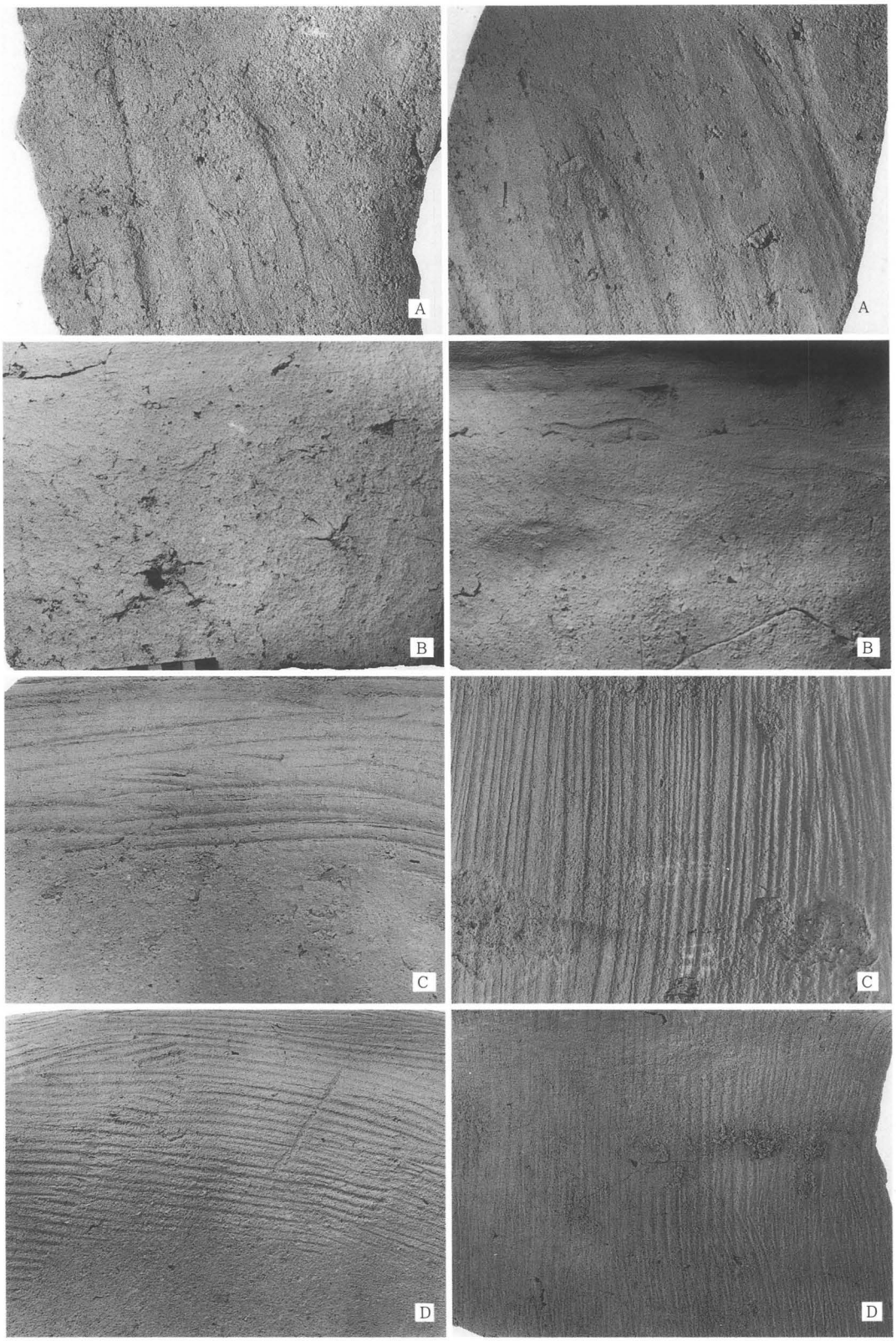
227

230

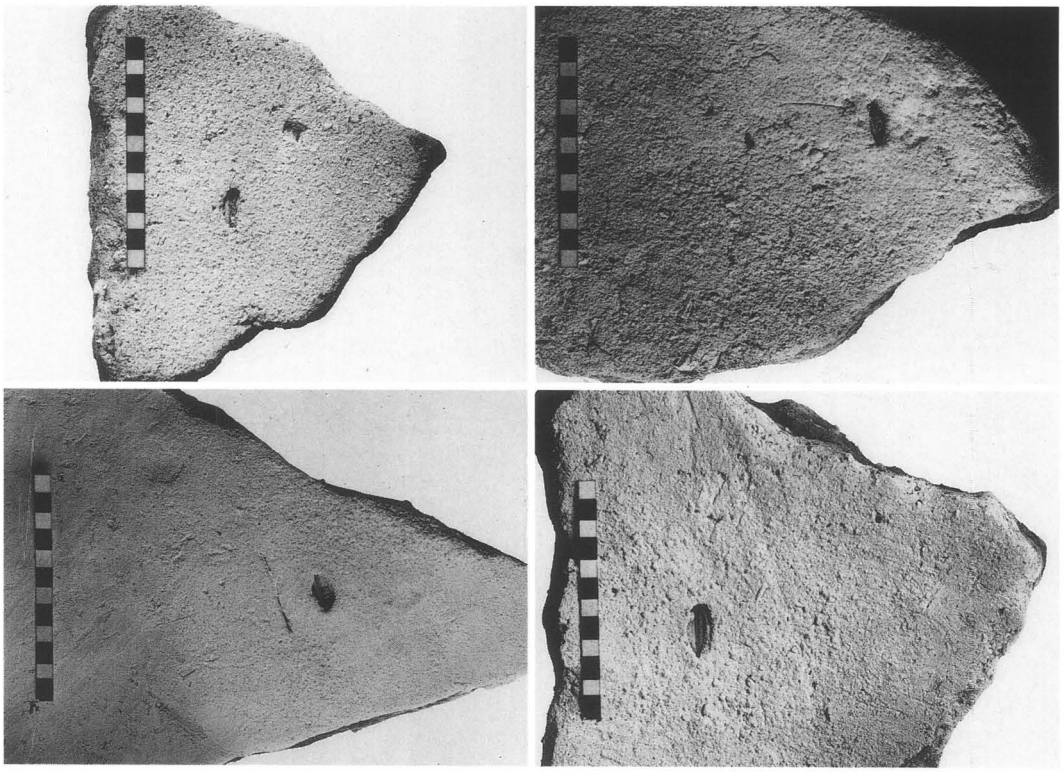
228

229

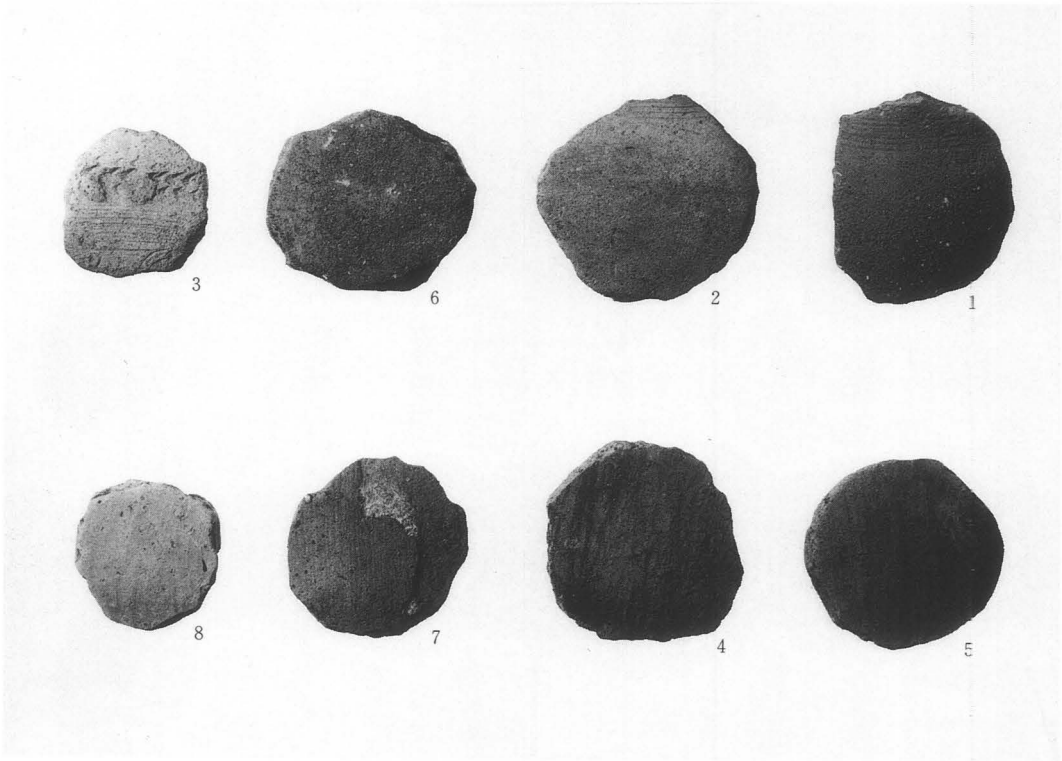
木葉痕の残る土器底(ホワイトニング写真)



甕の調整法　A(ヘラミガキ調整) B(ナデ調整) C・D(ハケメ調整)(ホワイトニング写真)

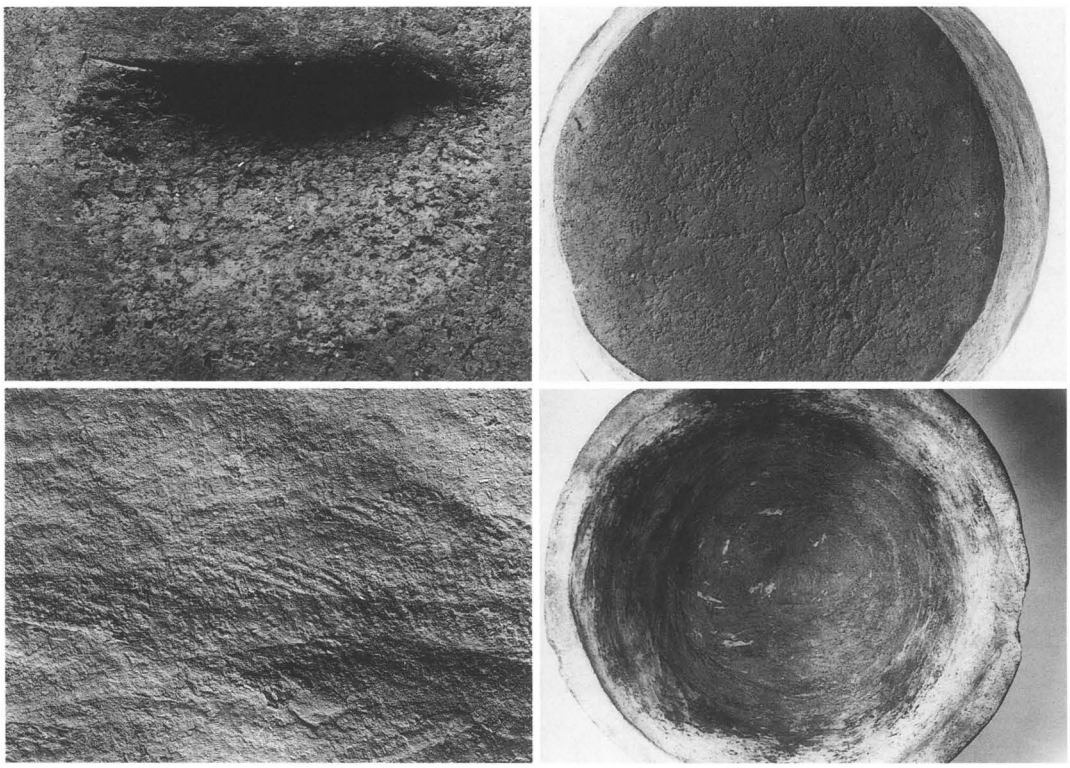


1．モミ圧痕の残る土器(ホワイトニング写真)

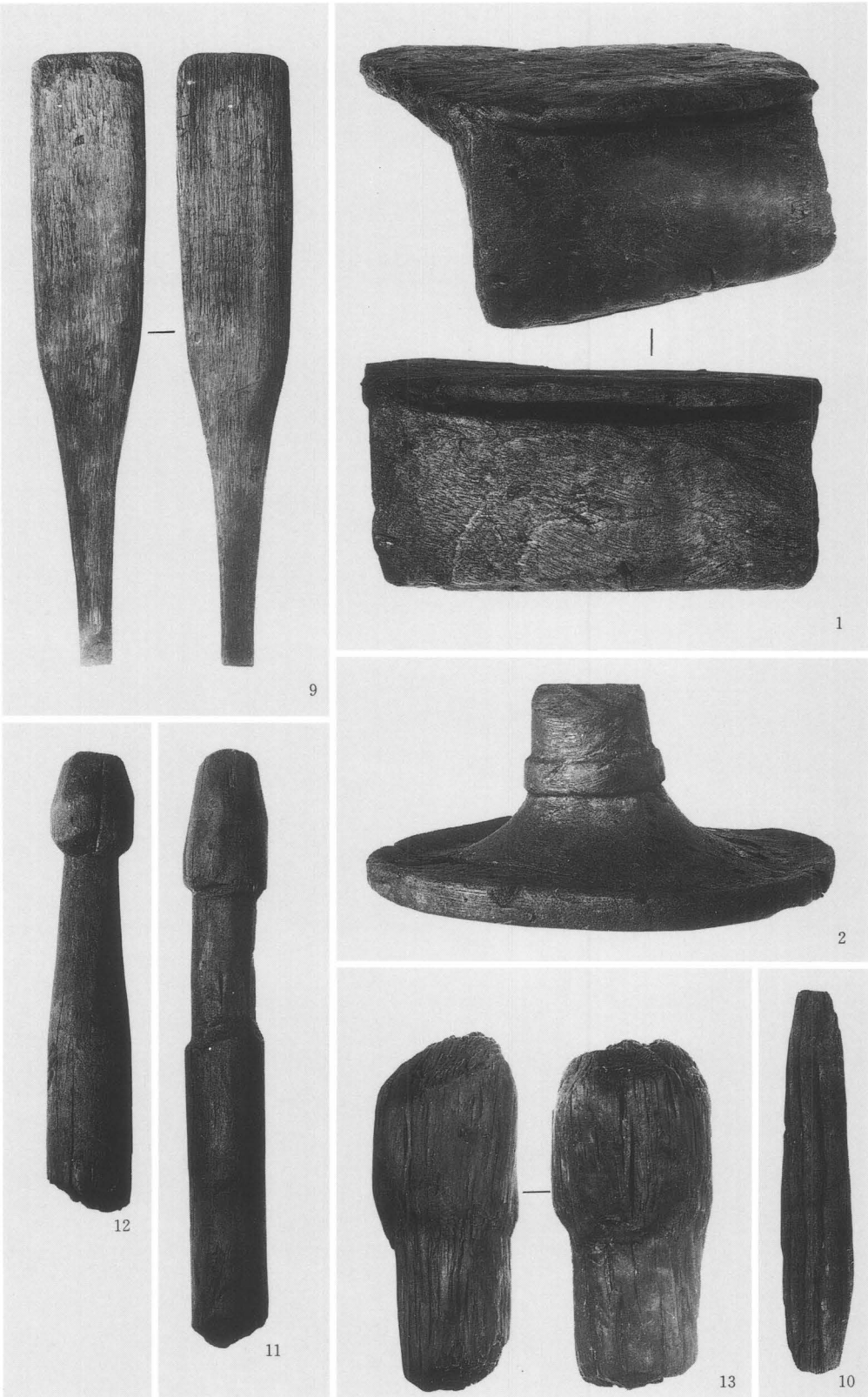


2．土製品　円板状土製品

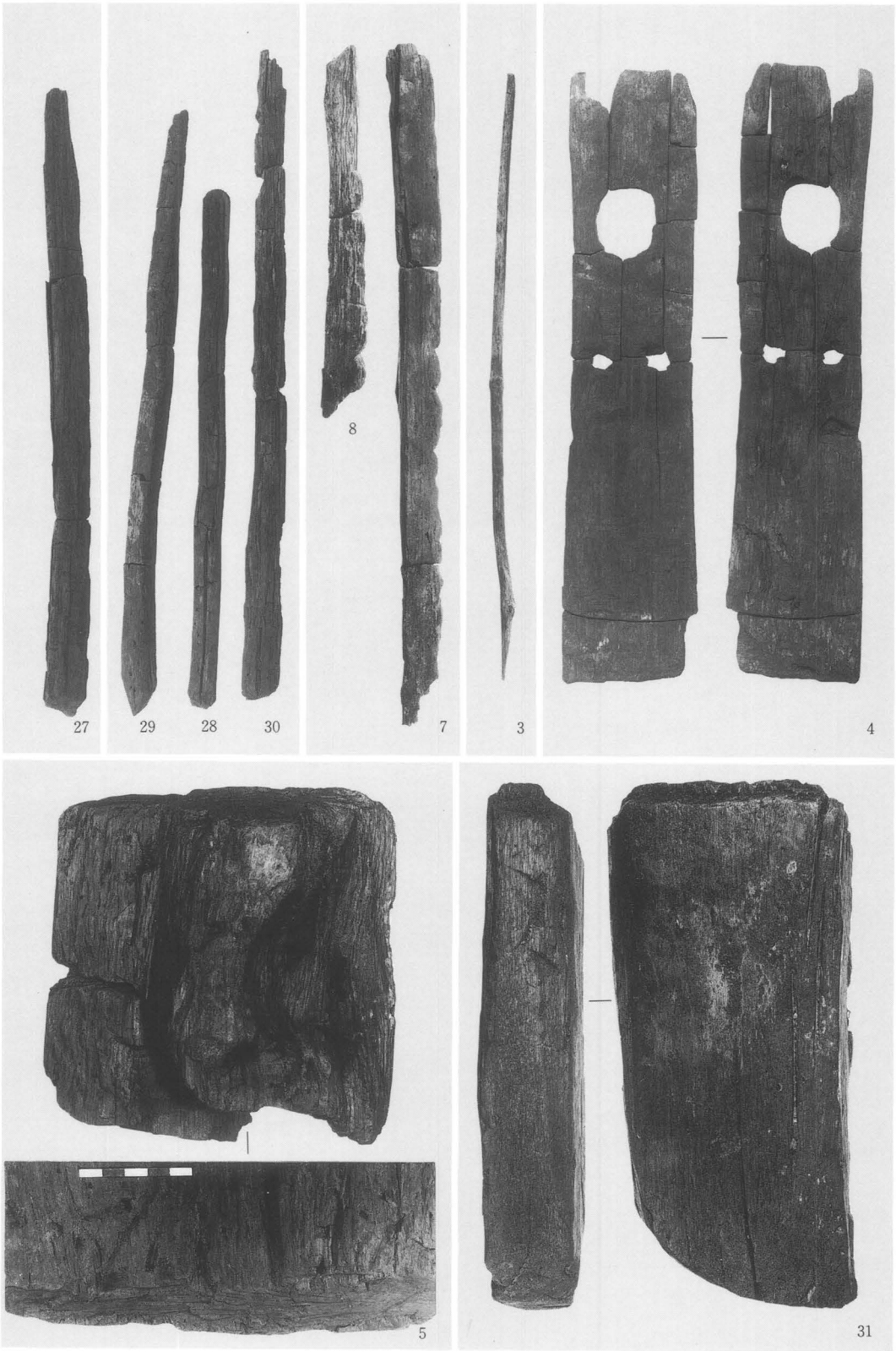
1．土製品　台状土製品



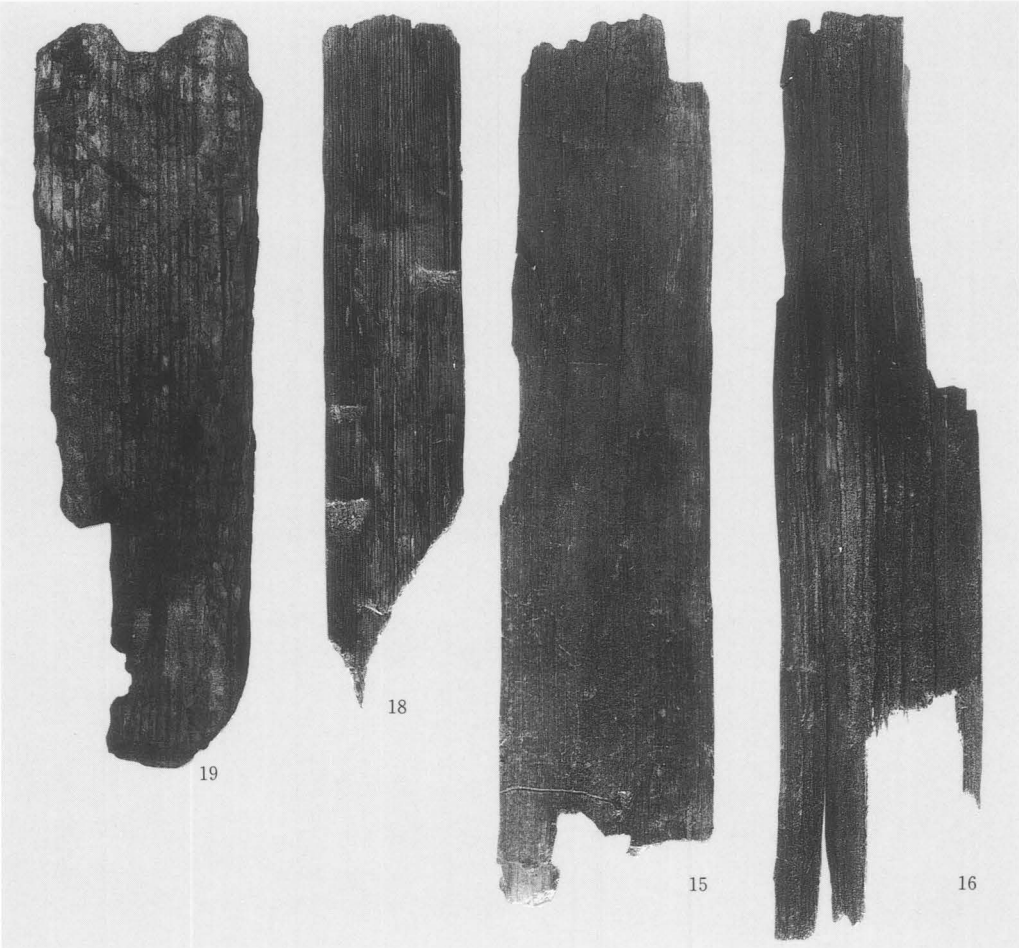
2．土製品　台状土製品細部

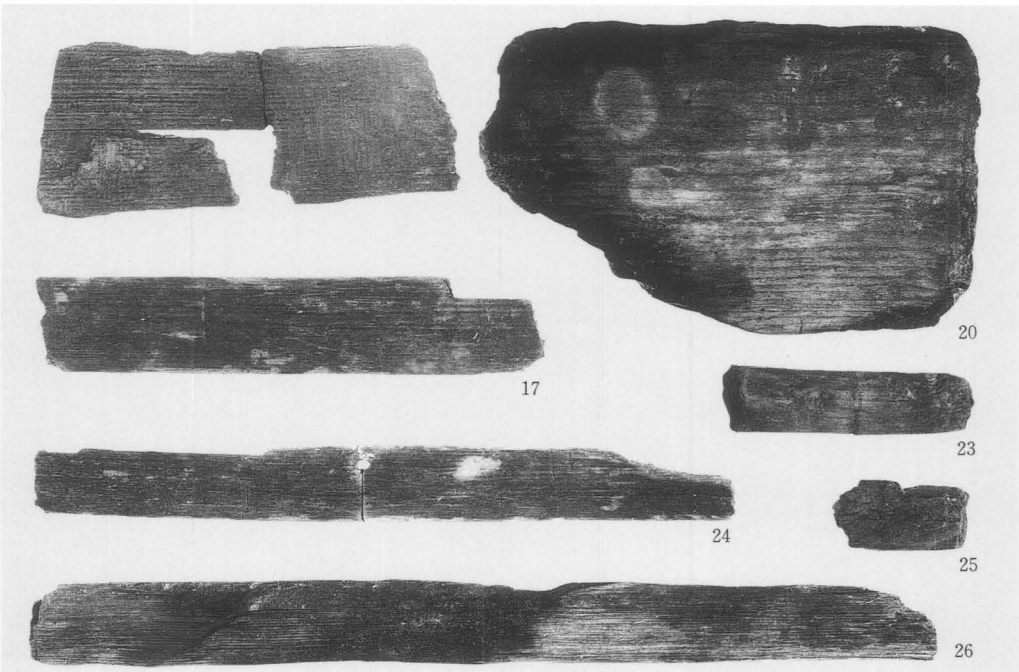


木器　腰掛(1)、高杯(2)、羽子板状木器(9)、武器形木製品(10)、有頭棒(11～13)

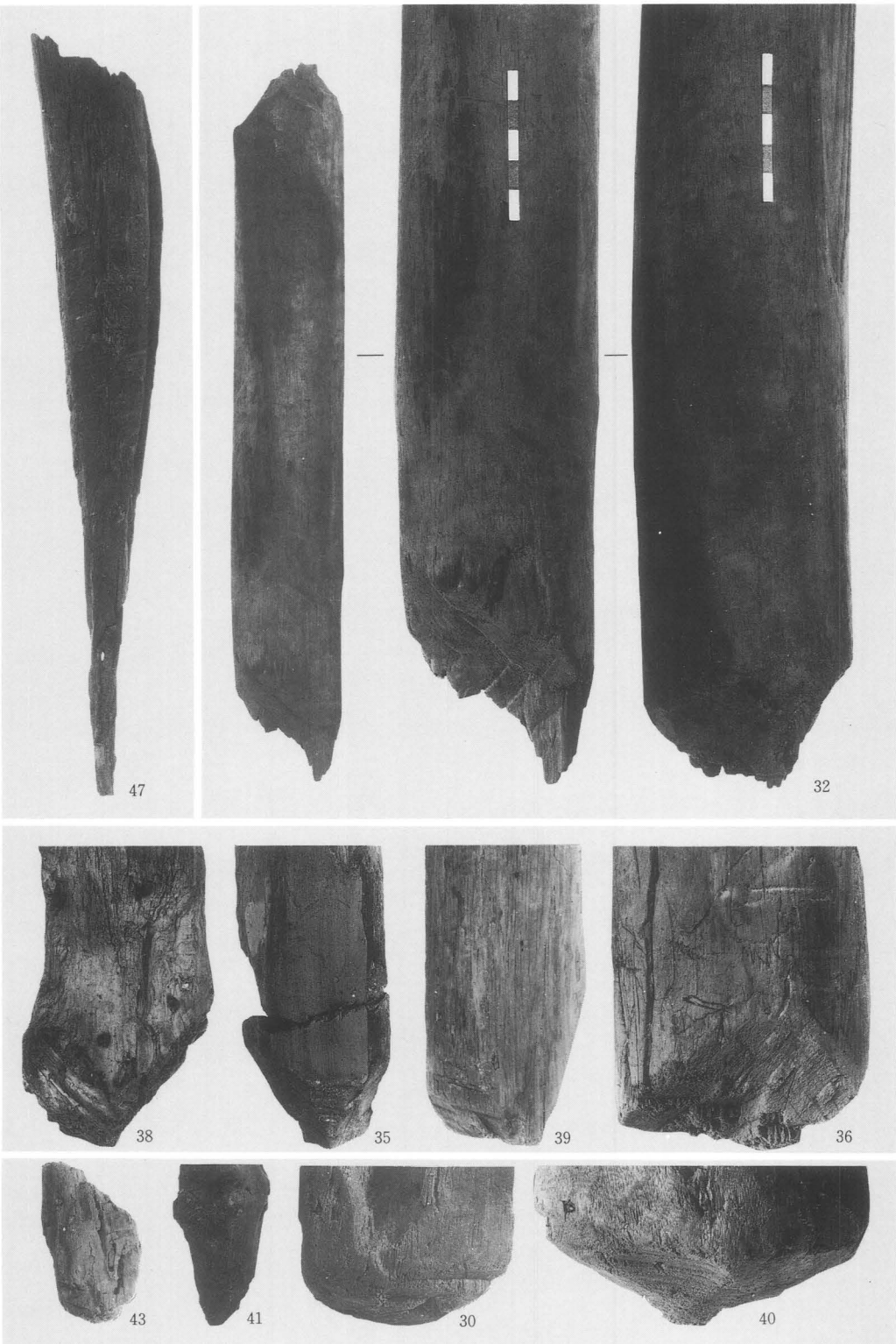


木器　鍬(4・5)、弓(3)、刻目のある棒(7・8)、材(27～31)

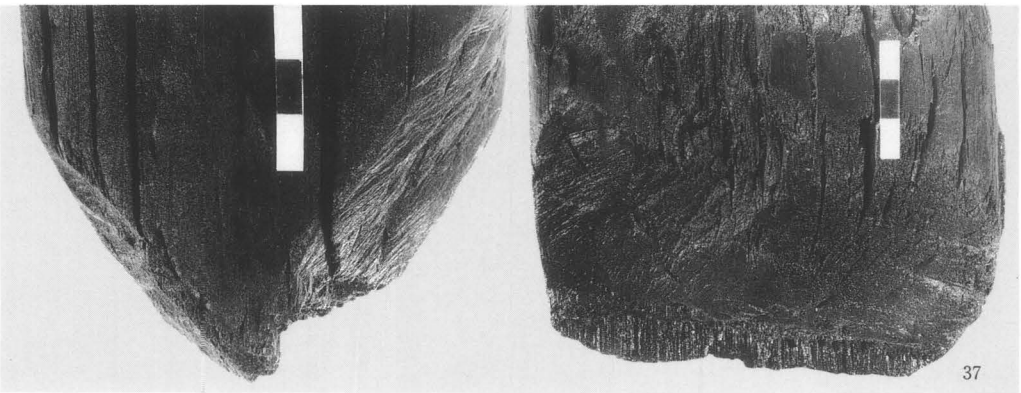




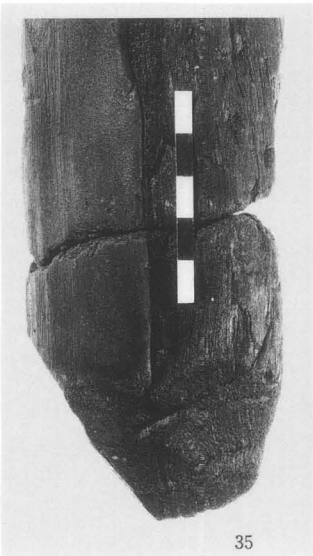
木器　板材

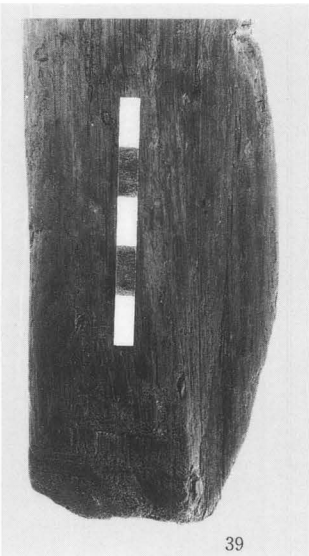


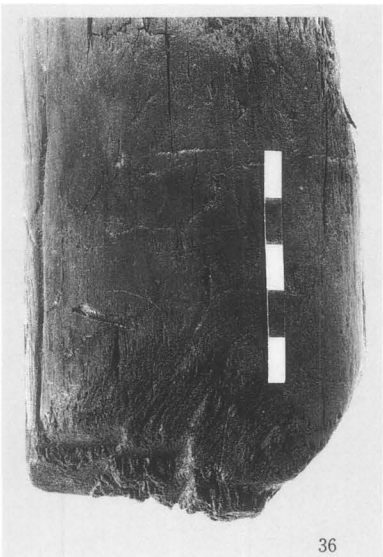
木器　丸棒材(32)と杭



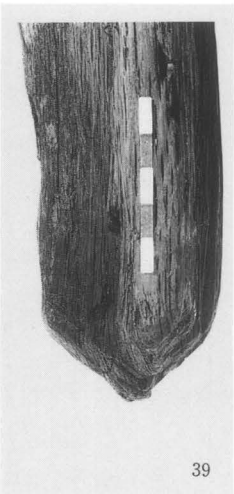
37は切断法Bによるもの。

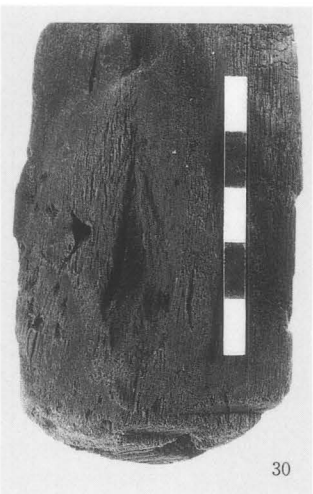






35は切断法Aによるもの。36・39は切断法Bによるもの。

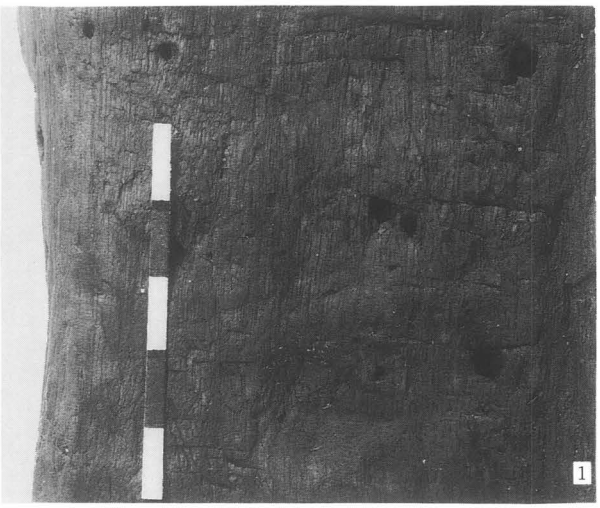




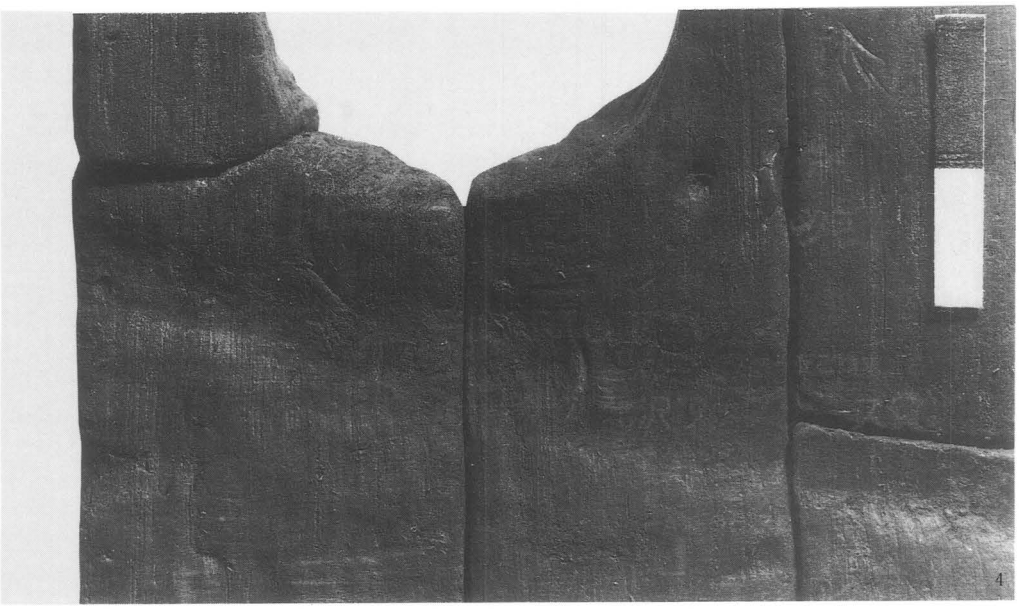
杭の切断痕

a 厚板の切断痕

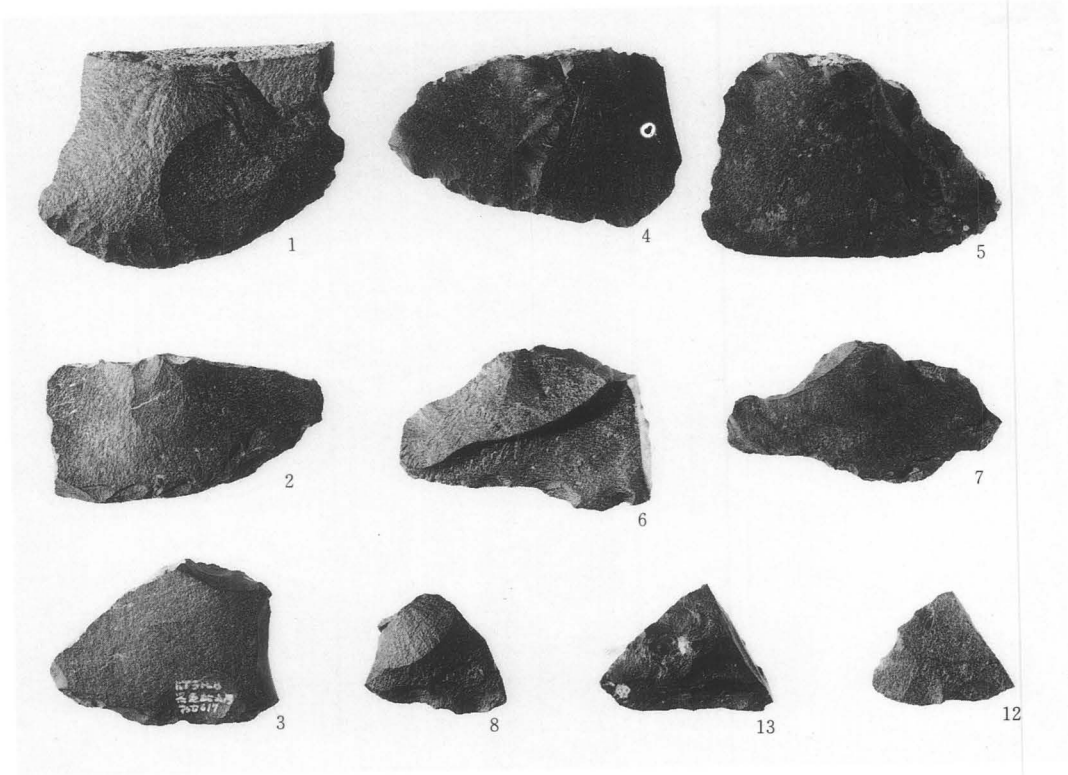
b 枝の切断痕



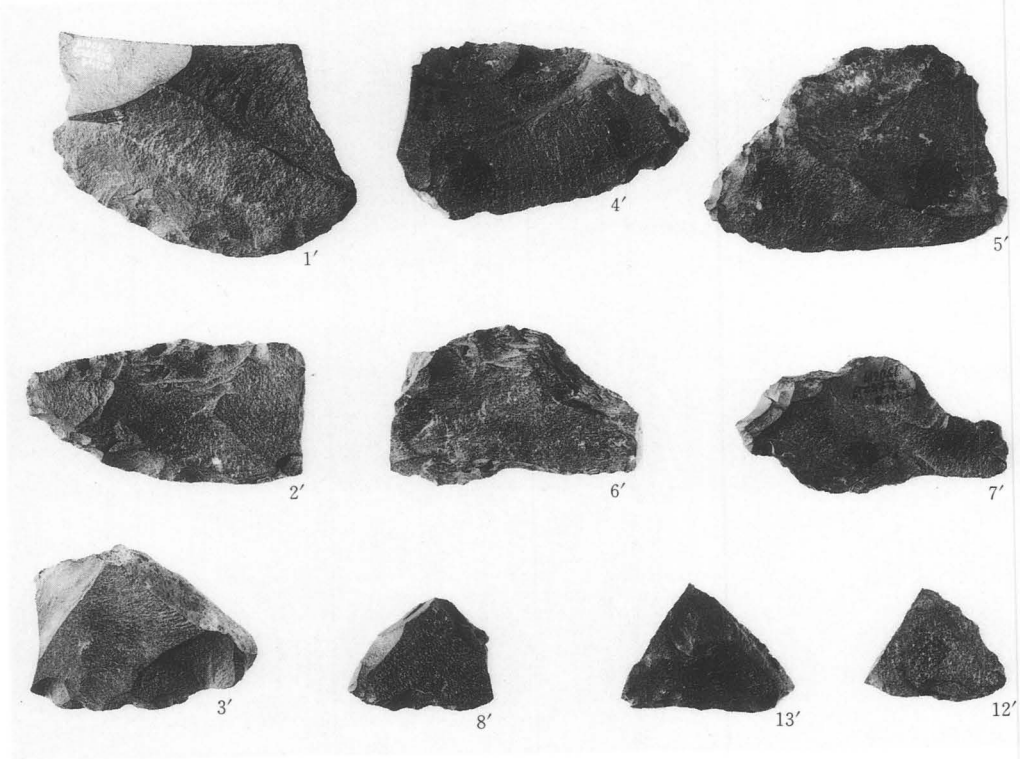
c 腰掛の削り痕



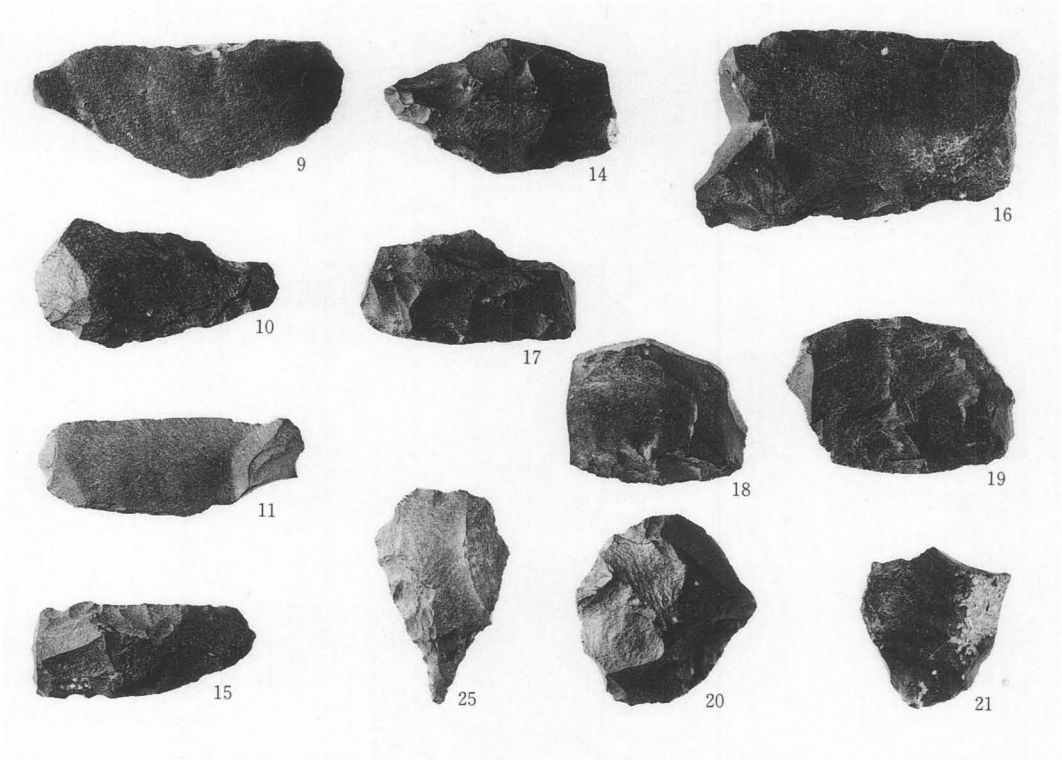
d 狭鍬にみる圧痕



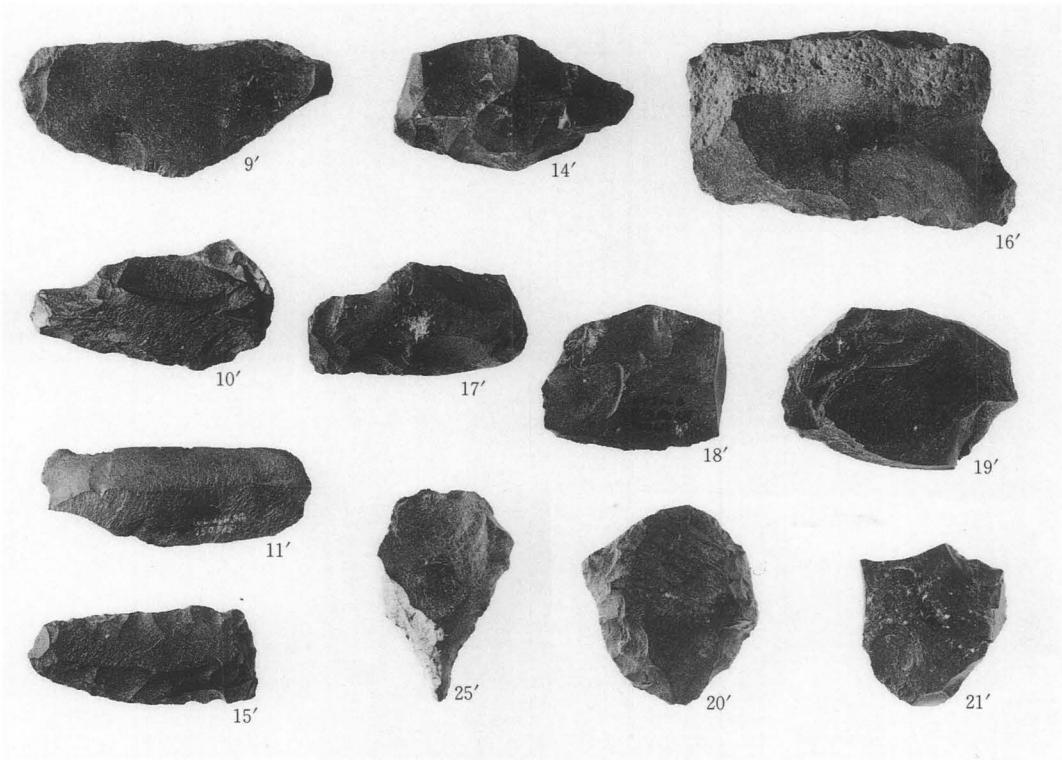
1．石器　削器(表)



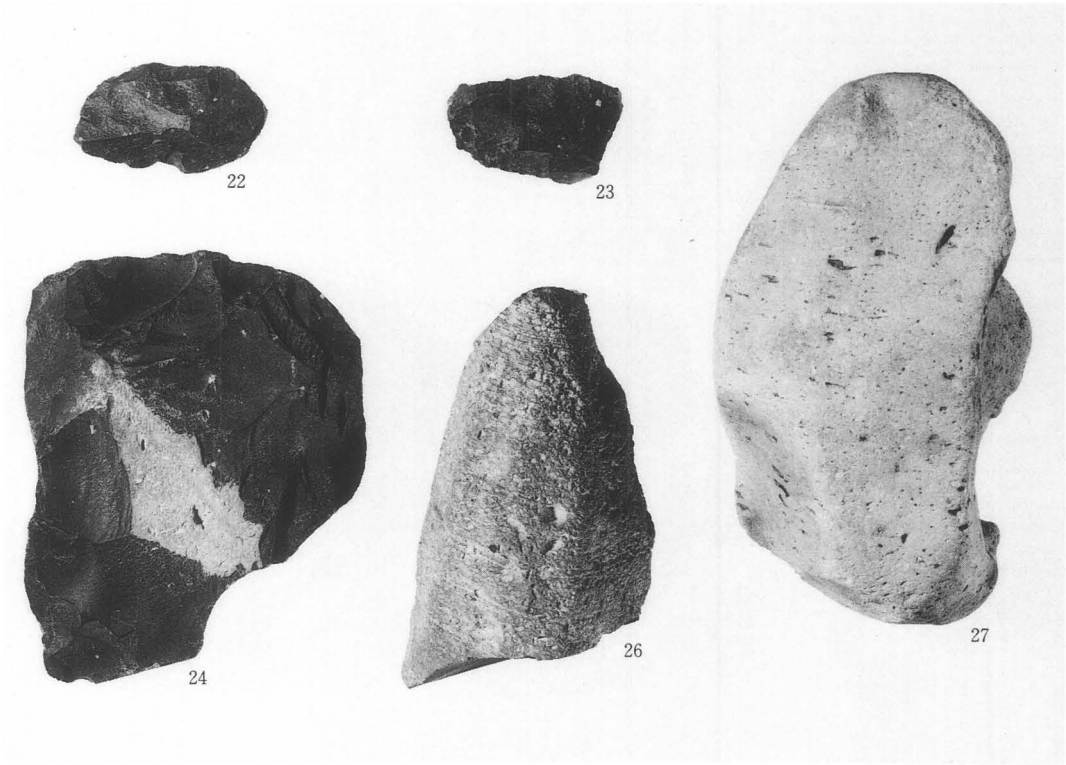
2．石器　削器(裏)



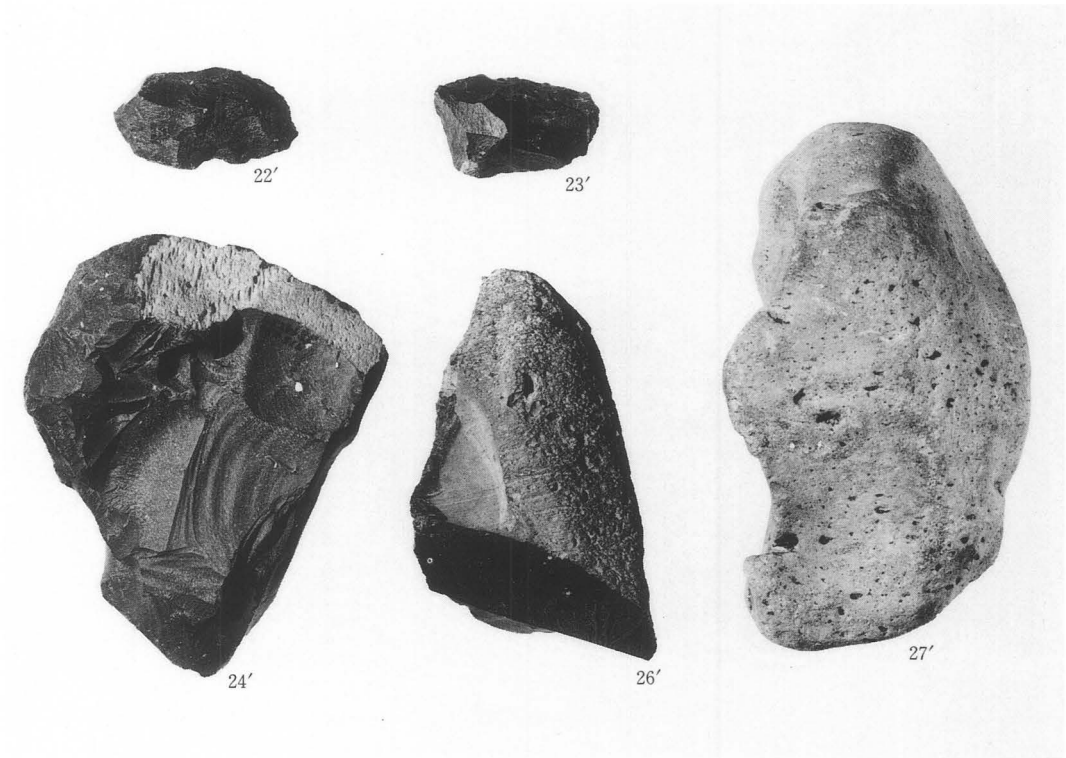
1．石器　削器、石錐、石核(表)



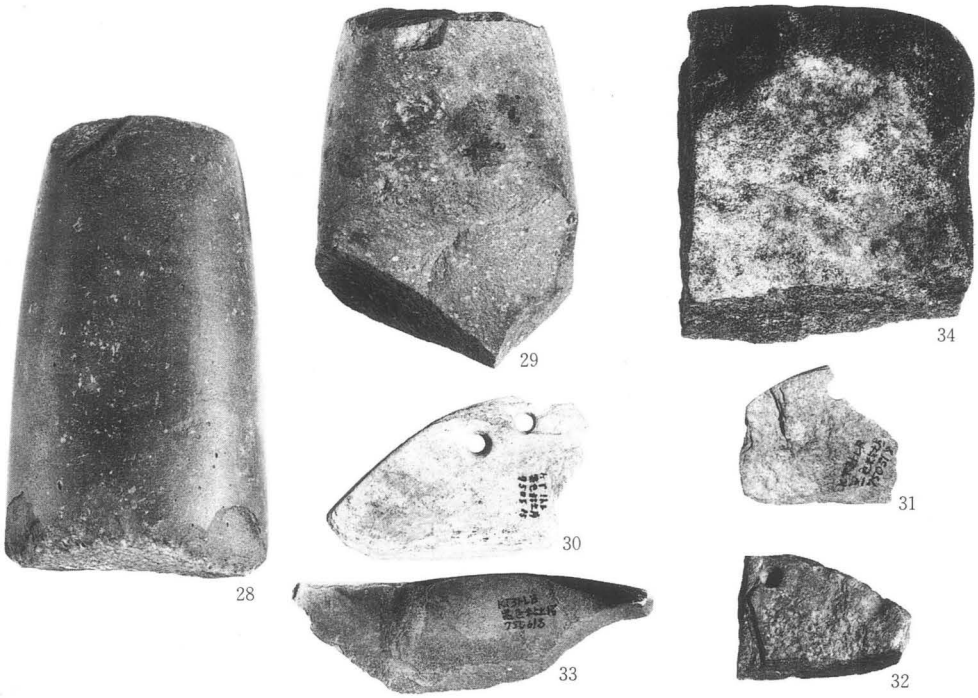
2．石器　削器、石錐、石核(裏)



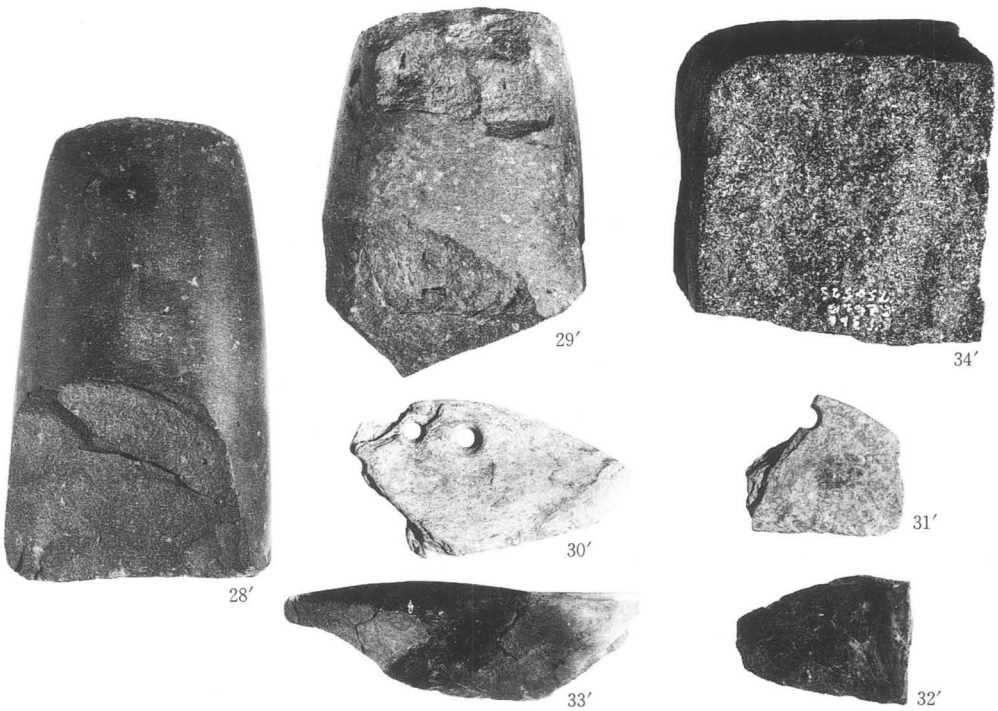
1．石器　石核、石材(表)



2．石器　石核、石材(裏)



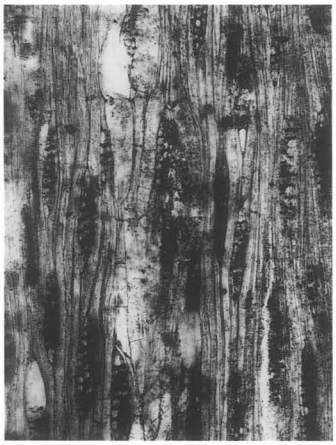
1．石器　太型蛤刃石斧(敲打具)、石庖丁、砥石(表)



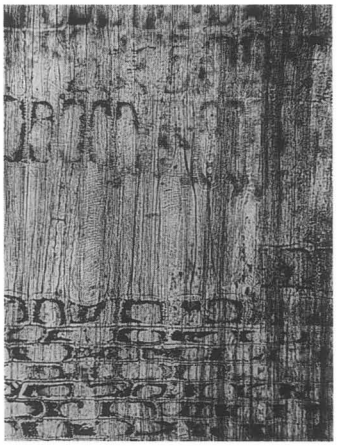
2．石器　太型蛤刃石斧(敲打具)、石庖丁、砥石(裏)

図版30　木器顕微鏡写真

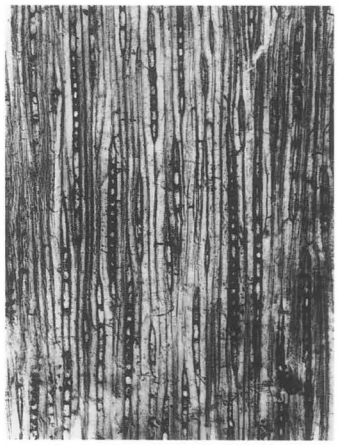
(1)KT-1　クスノキ　　木口×50



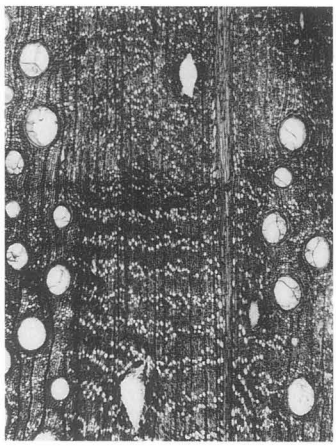
(2)KT-1　クスノキ　　板目×75



(3)KT-2　サカキ　　柾目×100

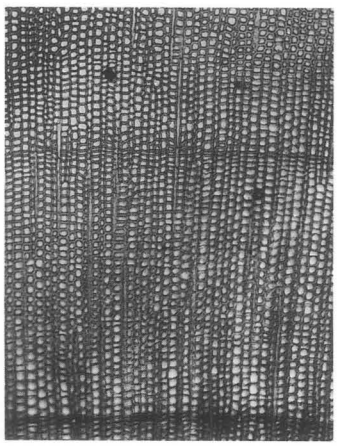


(4)KT-2　サカキ　　板目×50

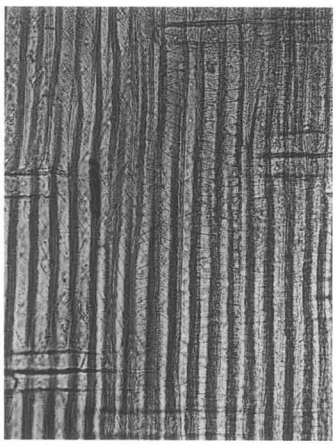


(5)KT-3　カシ類　　木口×25

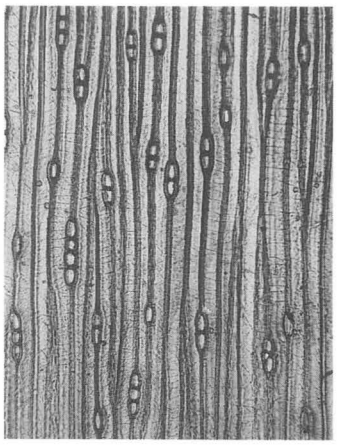
(6)KT-3　カシ類　　板目×50



(7)KT-4　カヤ　　木口×50

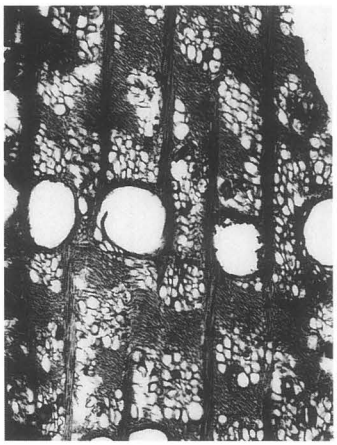


(8)KT-4　カヤ　　柾目×100

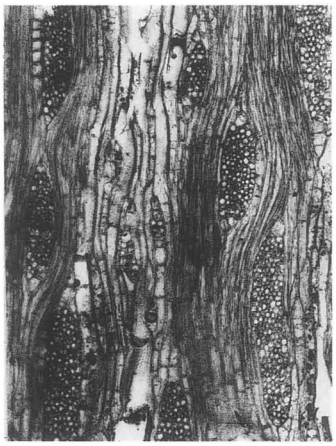


(9)KT-4　カヤ　　板目×100

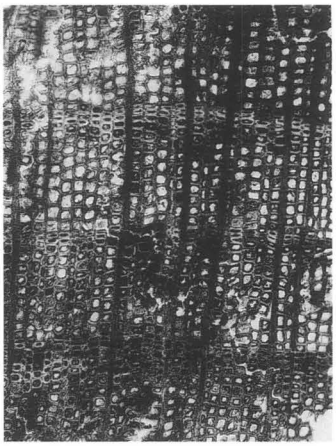
図版31　木器顕微鏡写真



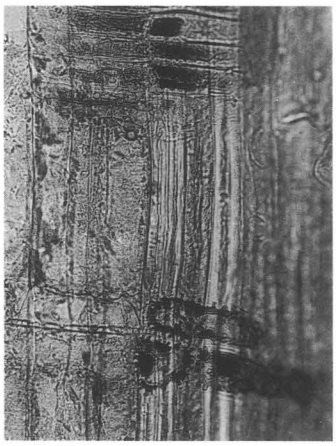
⑽KT-5　ケヤキ　木口×25



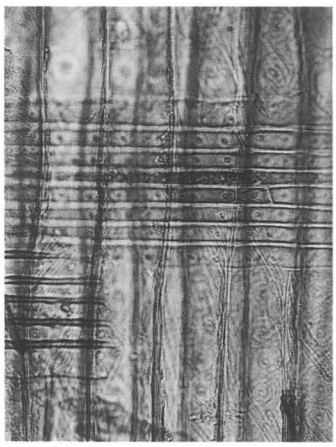
⑾KT-5　ケヤキ　板目×50



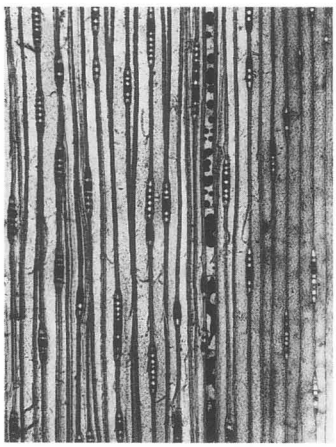
⑿KT-6　モミ　木口×50



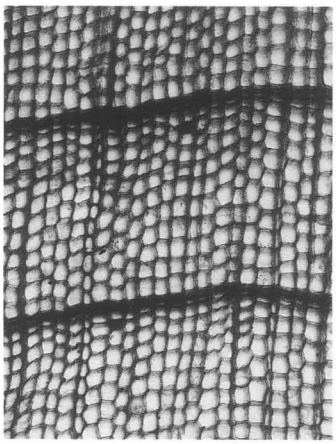
⒀KT-6　モミ　柾目×150



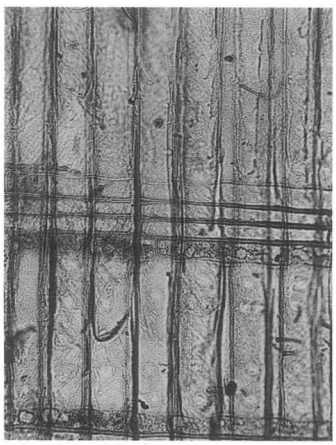
⒁KT-7　ヒノキ　柾目×150



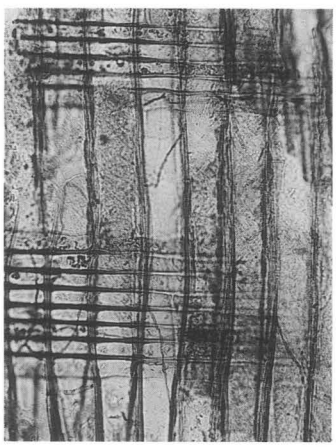
⒂KT-7　ヒノキ　板目×100



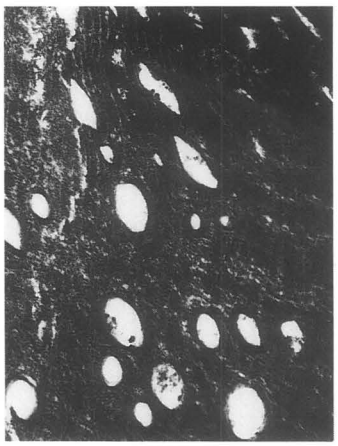
⒃KT-8　ヒノキ　木口×75



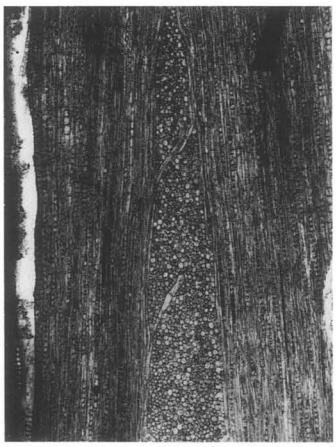
⒄KT-8　ヒノキ　柾目×150



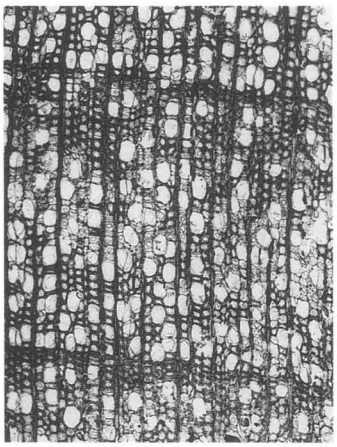
⒅KT-10　ヒノキ　柾目×150



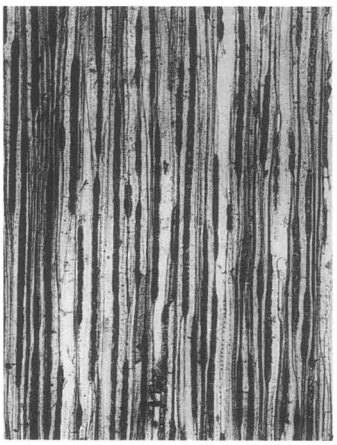
⑲KT-11　カシ類　　木口×50



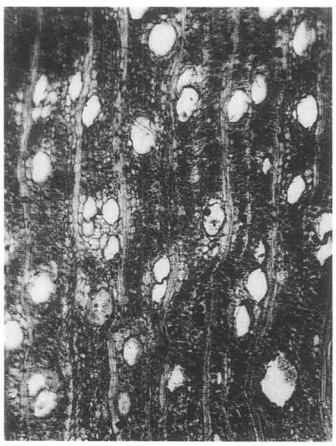
⑳KT-11　カシ類　　板目×50



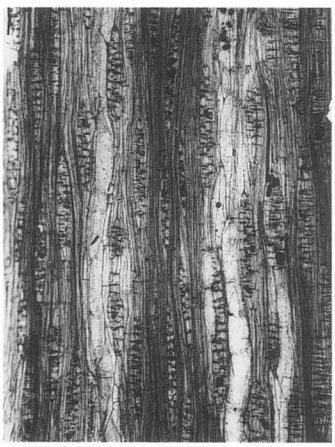
㉑KT-12　サカキ　　木口×75



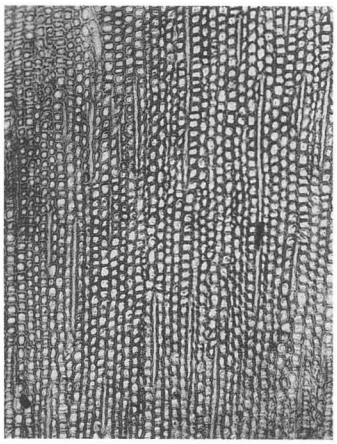
㉒KT-12　サカキ　　板目×50



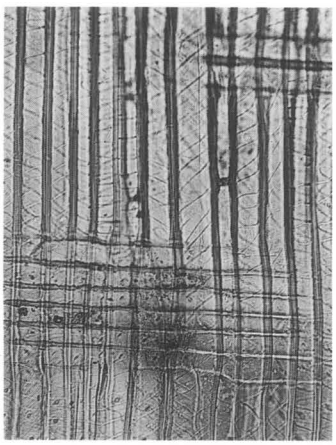
㉓KT-13　クスノキ　　木口×25



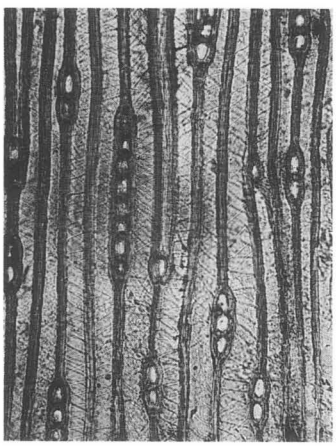
㉔KT-13　クスノキ　　板目×50



㉕KT-14　カヤ　　木口×50

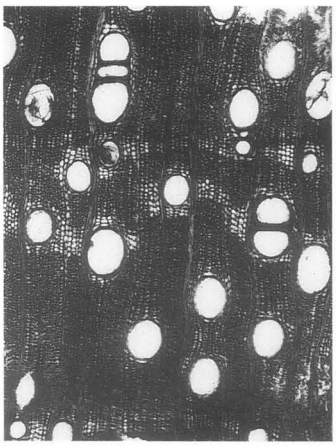


㉖KT-14　カヤ　　柾目×150

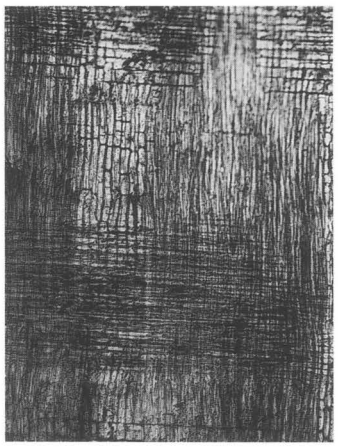


㉗KT-14　カヤ　　板目×150

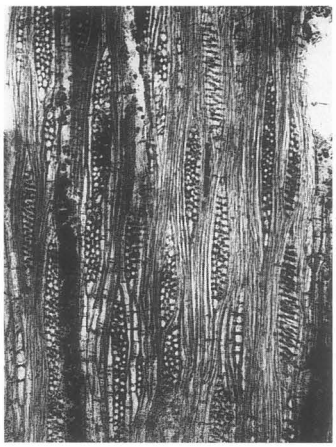
図版33　木器顕微鏡写真



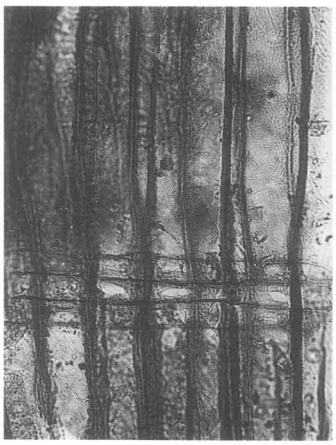
(28)KT-15　ムクノキ　木口×50



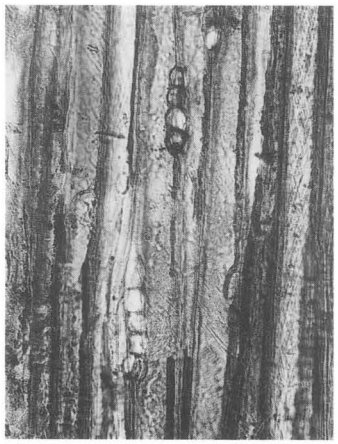
(29)KT-15　ムクノキ　柾目×50



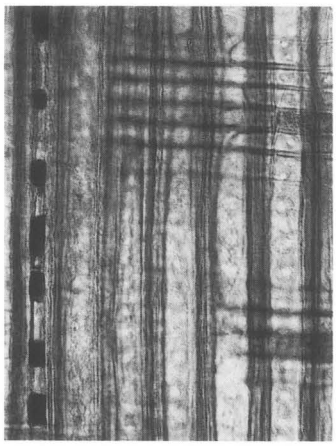
(30)KT-15　ムクノキ　板目×50



(31)KT-17　コウヤマキ　柾目×150

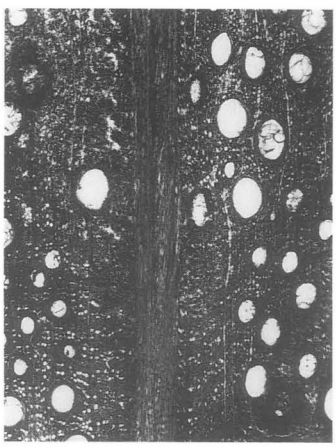


(32)KT-17　コウヤマキ　板目×150



(33)KT-18　ヒノキ　柾目×150

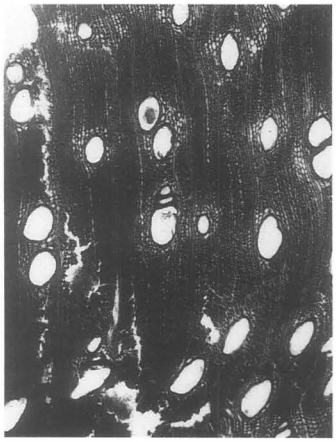
(34)KT-19　カシ類　木口×50



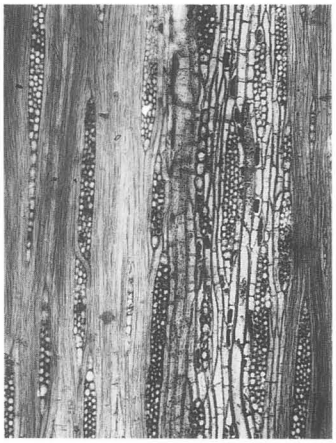
(35)KT-20　カシ類　木口×50

(36)KT-20　カシ類　板目×50

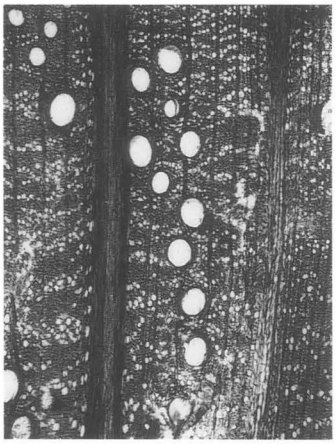
図版34　木器顕微鏡写真



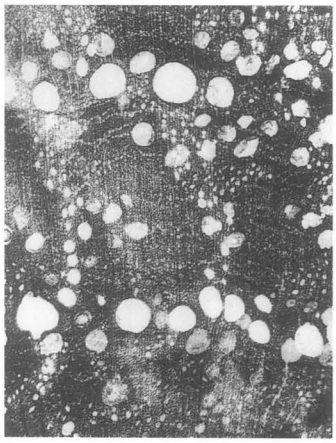
(37)KT-21　ムクノキ　　木口×50



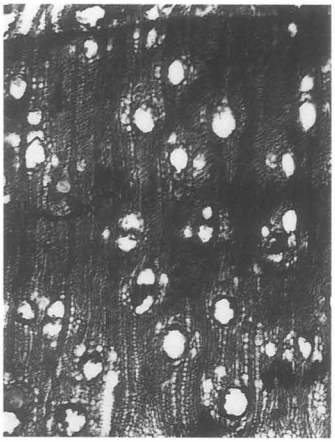
(38)KT-21　ムクノキ　　板目×50



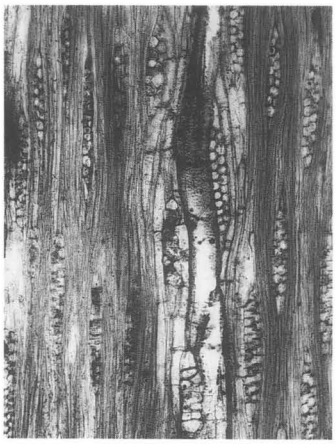
(39)KT-22　カシ類　　木口×25



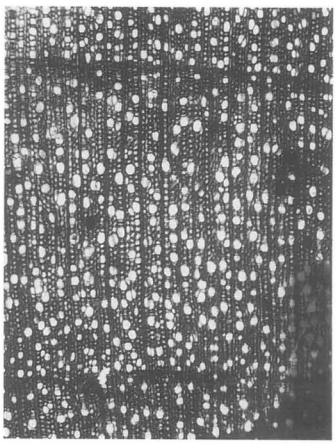
(40)KT-23　シイノキ　　木口×25



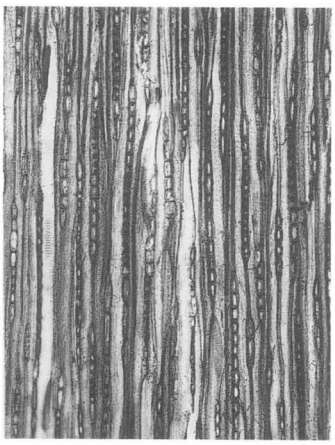
(41)KT-24　クスノキ　　木口×25



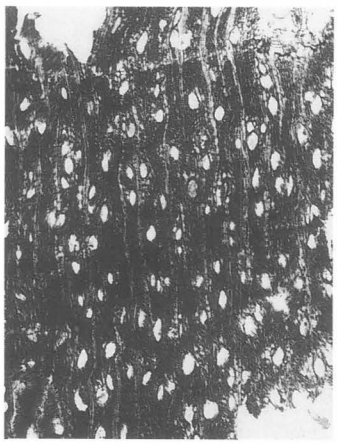
(42)KT-24　クスノキ　　板目×50



(43)KT-25　サカキ　　木口×50



(44)KT-25　サカキ　　板目×50



(45)KT-26　クスノキ　　木口×25

鬼虎川遺跡第1～3次発掘調査報告

発行日　1990年3月
発行所　財団法人　東大阪市文化財協会
印刷所　明文堂工業株式会社